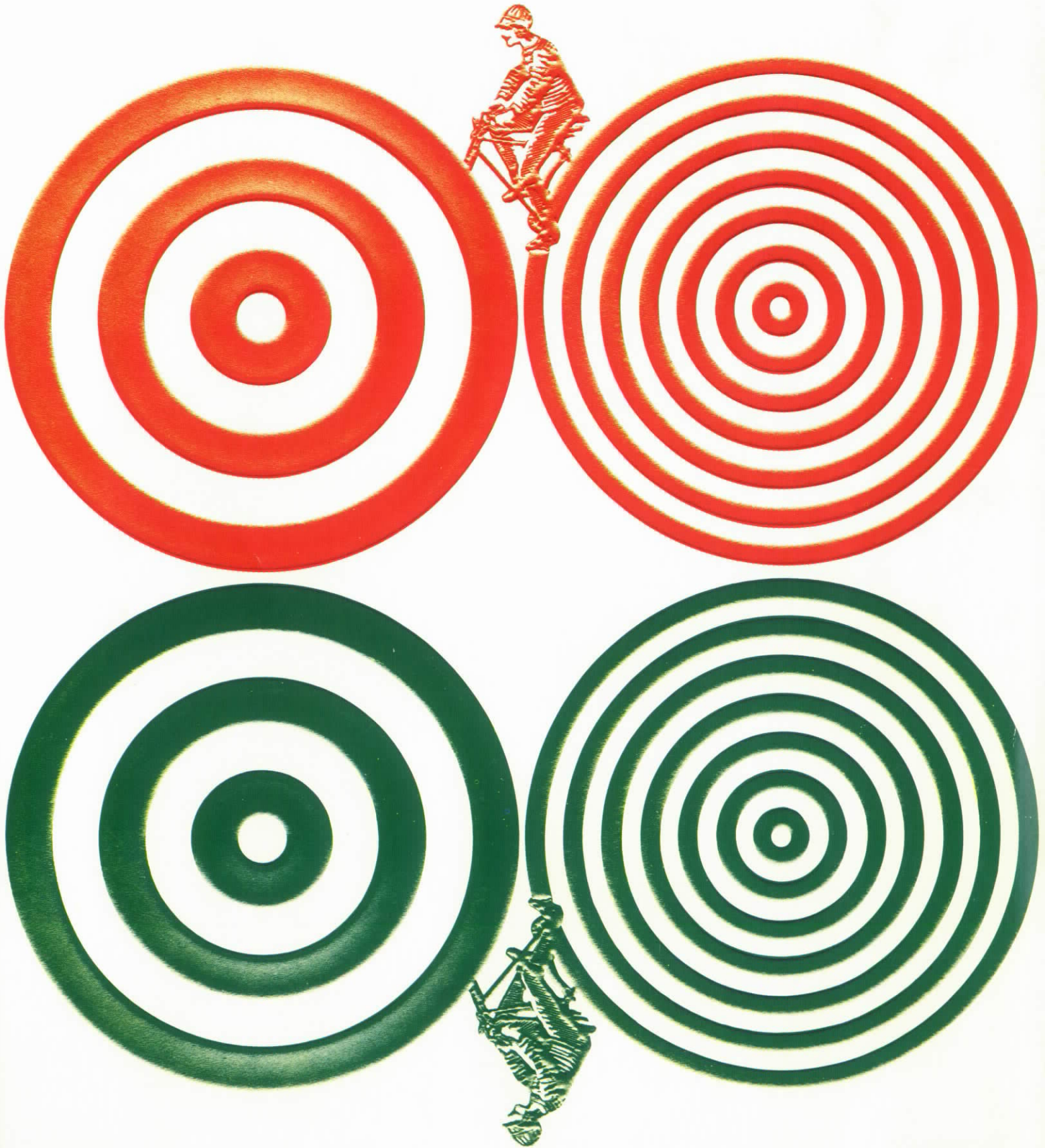


21世紀フォーラム

20+ONE 会報

7





A POINT OF VIEW

地球

深瀬昌久

科学 科学 科学者 科学者

伏見康治

(日本学術会議会長・茅誠司部会)

今世紀の前半までは、科学は寵児であった。科学研究はもちろん真理を目指すもので、善とは異なる価値を追求するものであったにもかかわらず、科学は、科学的研究に従事することは、とりも直さず即ち善であるかのように思われていた。特に科学が「役に立つ」ことが知られて、科学研究の成果を意識的に利用しようとする話が組織的に進行しはじめ、科学技術というこぼがはやり出すと、科学は世俗的にも大歓迎されることとなり、科学者の社会的地位はすこぶる高くなったのである。スポーツニク打ち上げ直後にアメリカに行った友人の話によると、科学者と名乗っただけで、軍用機乗務員の待遇が変わった由である。また鉄腕アトムでお茶の水博士の存在を知った小学生は、親父が研究所の科学者だと聞いて、親父の偉さを再認識したというような話もある。こうして科学が尊重されだすと、科学研究を志望する学生の数は急増し、二十世紀のある時点で存在する科学者の数は、かつて生存していたすべての科学者の総数よりも多いといわれるようになった。また別の言い方では、科学研究論文の数も指数関数的上昇を続け、二十世紀の終りにはその紙の目方は地球の目方を越えるだろうともいわれた。

こういう事態の推移が科学の性格に変化を与えないはずがない。ちょうどローマ・クラブの分析が行なわれる前後に、人類は突然、地球が有限であることに気づいたように、あるいは遙かに前に、徳川三百年の鎖国時代の日本人が、間引きという人口抑制法を採ったように、科学者の生産制限をしなければならなくなっているのではあるまいか。自然の神秘は深遠であって、科学研究の対象は、ここ当分の間は少なくとも、涸渇する気配はないけれども、しかし科学者の数は制限しなければならぬだろう。科学はかつての宗教になぞらえられる——科学者は僧侶であり、大加速器は大伽藍だという話があるが、寺と僧侶の数がふえ過ぎれば、市民はその負担に耐えられなくなったに違いない。

しかし実をいうと、私は科学者の数にはこだわらない。科学者の質を高めることが大切だといいたいのだ。質が高ければ結局は科学は大いに「役に立ち」、従って市民の負担が大きくなる以上に、見返りがあるはずなのだから。それで結論はこうなるのだ。

科学者の数の急増が、科学者の大衆化にならないような仕組みを考えようではないか。

目次

科学と科学者

伏見康治

1

●特集 ●外交の時代

日本外交・一人歩きの戦略 大来佐武郎

4

安全保障としての国際交流 松山幸雄

8

米欧関係の構図

八〇年代ソ連の読み方

河合秀和

12

ASEAN経済協力

「援助を生かす」現実主義外交への転換

斉藤志郎

16

外交における人間の条件

北原秀雄

20

Yes・but…とNo・but…

河合三良

22

コンペティブルな国際化を——企業外交論

小林陽太郎

24

プロフィール 河合三良(大来佐武郎部会)

北原秀雄(大来佐武郎部会)

28

木田 宏(大来佐武郎部会)

小林陽太郎(大来佐武郎部会)

茅誠司部会

東北開発とエネルギー

大来佐武郎部会

外務大臣の経験から

加藤秀俊部会

祭りからみた山村の将来

加藤芳郎部会

エネルギー政策について

33

【部会報告】

国際交流研究部会

説話交流の条件

原発立地紛争と合意形成

山田 嗣

36

●カラーグラフィア 明日のエネルギーを求めて
(ア・ポイント・オブ・ビュー) 地球

吉成守久
深瀬昌久

わが師・わが友・わが時間

新春合わせて二百四十四歳

■座談会■

茅 誠 司
東 畑 精 一
松 本 重 治

42

フォーラムズフォーラム

私の近況

四年後を目標に
美術エッセイを出版
最近「越ひかり」事情
テニスでサビ落とし

有澤廣巳
橋 口 収
加 治 章
坪内ミキ子

26

絆

(きずな)

われらが人生ハーモニー

■座談会■

飯 沢 匡
遠 山 一
喜 早 哲
佐 々 木 行
高 見 沢 宏
三 国 一 朗

52

省エネルギー考

環境性・経済性・価値観

日本エネルギー経済研究所

40

新幹線の影響波及

都市機能はどう変わるか

政策科学研究所

50

21世紀フォーラム部会メンバー

60

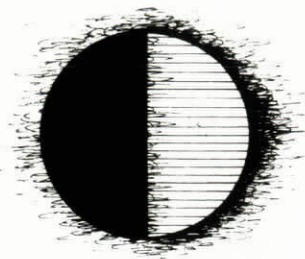
●表紙 永井一正 ●アートディレクション 大橋成夫 ●目次・本文カット 高見澤忠勝

日本外交・一人歩きの戦略

おおきた さぶろう

大来 佐武郎

(対外経済関係担当政府代表・大来佐武郎部会)



「バジ」外相としての、ある意味では激動の経験だった。

歴代の外相経験にくらべれば、二五二日という日数は決して長いものではないが、就任直前の五十四年十一月四日のイラン米大使館人質事件を始め、年末十二月二十七日にはソ連軍のアフガニスタン侵攻、さらに年明けて以後の米国の対イラン制裁を軸にした経済・オリビック外交への対応、EC諸国との協議、さらには石油外交、対米経済摩擦といった宿題への取組み、そして病床の大平さんが念願としていたサミットへの代理出席等々、日本外交にとっても多事多難な、また密度の濃い二五二日間だった。私自身もこの間、海外出張九回、六〇日間を外で過し、その飛行距離は約二十一万キロ、地球を五回りほどした勘定になる。

「日」のつかない外交課題をかかえて

難産の未成立した第二次大平内閣の外務大臣に就任してほしいという要請があったのが昭和五十四年十一月八日。ちょうど私の主宰する「フォーラム80」の一周年記念で若い友人たちと歓談している最中だった。翌十一月九日から、五十五年六月十二日の大平さんの劇的な死をさみ、鈴木内閣の伊東正義外相にバトンタッチするまでの二五二日間が、私のノ

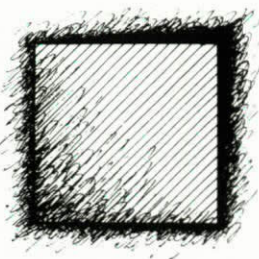
世界的な問題への外交対処をせまられる事態への変化が、そこに質的に読みとれる。

このことをまた別な面からいえば、これまでの日本外交は、経済外交・資源外交といったように、ある意味では「実利外交」ともいえるような、復興過程以来、日本の経済的体力をどうつけるかに目が向き勝ちな外交だったが、これからは「経済・プラスチック」外交への転換がより顕在化してくると思われる。イラン問題、アフガン問題はその何よりの象徴で、それは単なる石油問題にとどまらず、東西関係、緊張緩和の問題に密接に結びついていた。その視点から日本はグローバルな問題についての選択・外交決断をしなければならなくなった、ということが質的变化のもう一つの側面といえるだろう。

原則と現実

つき合いの濃度

そうした「新しい選択」をせまられるようになった日本の外交の方向づけを考える場合に、従来「全方位外交」ということがいわれ、あらゆる国と同じ濃度でつき合うことが日本外交のあるべき姿のようにいわれてきた。しかし、あらゆる国と同じ濃度でつき合うことは現実問題として不可能であり、よく「西側諸国の一員」といういい方がされるが、そうした濃淡は自ずと出てこざるをえない。



同時に、日本が置かれた地理的・資源的立場からいえば、世界に「シリアス・エネミー」をつくることは得策ではない。米ソのような超大国とちがって、海外資源依存度が高く、防衛費は低く、平和の維持が国の存立にとって死活的に重要な意味をもつ日本のような場合には、たとえ同じフリー・デモクラシーの国といっても、米国と全く同一歩調の政策をとれない場合もしばしばある。むしろその点では西ヨーロッパと共通した立場にある場合も生じてくる。

イラン問題はその試金石の一つであったといえよう。「あつた」と過去形でないほどイラン問題はまだ解決をみたわけではないが、イランと米国との板ばさみにあつて日本がゆれ動くあいだに、いくつかの独自の展開の積み重ねが出てきたように思われる。

たとえば一昨年十二月、パリでフランス米國務長官（当時）から、当時米国が輸入禁止していたイランの石油を購入していることに対して、「インセンティブ」（無神経）ではないかという抗議を受けた。そのあと日本に帰ってくると、今度は「イラン問題の対応は無原則」ではないかという。このように、「無神経」と「無原則」の板ばさみにあうという状態にあつたが、今ふり返ってみると、日米関係に大きなヒビを入れることもなく、またイランとの関係においても、人質問題が解決すれば修復可能という状況を維持しえたことは、やはり独自の外交展開への一つの積

み重ねといふことができるのではないかと。外交に「歯切れがいい」ということは必ずしも必要なことではなく、むしろ原則と現実とのあいだにあつて調和をはかることの方が数段大切なことである。

先に、西ヨーロッパと共通した立場ということを述べたが、この点については私の在任中、対イラン経済制裁措置を一つのきっかけとして、西欧諸国と日本とのあいだで事前の協議・合意が行なわれたことは収穫の一つと思つてゐる。EC外相会議の開かれるルクセンブルグに急拠飛び、会議前日の午後から当日の朝までのあいだに、英、仏、独、伊、ルクセンブルグ五カ国の外相とジェンキンスDEC委員長を含めた六つの個別会談を行なつたが、これはその後、ヨーロッパ側でも日欧関係の新しい展開の一つだと評価してくれている。

従来、日欧関係というと、経済・貿易問題が主流であり、グローバルな問題について日欧が話し合うことはほとんどなかったといつてよい。米ソの超大国に対して、日欧がある意味で共通した立場におかれている今日、この日欧関係の新しい芽生えはぜひ将来に生かしたいと考える。

援助と循環

南北問題の考え方

南北問題については、私の在任中、直接取り組む機会は少なかった。しかし、

日本の今後の外交、世界経済の推移を考えると、南北問題は非常に重要な意味をもつてゐる。エネルギー問題一つとっても、産油国の多くはいわゆる「開発途上国グループ」の一員であり、政治的には共同歩調をとって先進諸国に当たるといふその基本的底流は変わっていない。また、特に日本にとっては、アジアで唯一の経済先進国であるということもあつて、経済外交面における「南」の重要性は、「北」の経済摩擦にまさるとも劣らないものがある。

日本は経済力の面では現在、すでにGNPでは米国の半分、英・仏・伊三国の合計額に近い大きさのものになっており、この大きな経済力をどう世界に還元するかが、北からも南からも問われている。日本は軍事費が少なくと米国からしばしば批判されるが、同時に世界から、援助費が少ないと批判されてもいることは周知の事実である。

防衛費がある程度ふえることは一面でやむをえないとしても、それ以上に援助費をふやすことは、日本の基本的な世界の中のあり方からみても望ましい。しばしば引き合いに出される日本の開発援助費は、一九八〇年にはほぼ三〇億ドルを超え、GNP比率で〇・三一パーセント程度に達したと思われるが、西欧先進国の平均〇・三五パーセントにくらべれば、それはまだ見劣りがする。この比率をいま一歩高めて、日本はこの大きな経済力を開発途上国の建設投資や食糧増産、エ



ネルギー転換、あるいは大平首相が強調されていた人づくりや教育・訓練など、生産的・建設的な面に役立てていくべきではないかと思われる。そのことがまた日本に対して、いろいろな面で必ずプラスの「はねかえり」を生むはずである。

援助問題についてはさらに二つほどのことに注目しておきたい。一つは、これは息の長い問題だということ。先の援助費のGNP比率の問題にしても一朝一夕にして出来ることではない。まして日本にとっても最近では財政上の制約がある。従って中長期の視点がぜひとも必要である。

もう一つは、富める国から貧しい国への「チャリティ」であるという見方よりは、最近では、インターデイペンデンス(相互依

存)という考えが強まってきている。先進工業国、産油国、非産油途上国という三つのグループを考えてみても、三者のあいだに資金の円滑な循環がない限り、世界経済はうまく動かない。「南」を抜きにして世界の問題を論ずるわけにはいかななくなっている。その意味では南北問題は、イラン問題、アフガニスタン問題以上に中長期の見方を必要とされる基本的に重要な問題である。

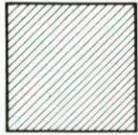
外相以後 レーガン政権の見方

さて、二五二日の務めも、大平さんの「喪服外交」を最後に、幕が下りた。外相の任を終えてまもなく、五十五年七月二

十二日から「対外経済関係担当政府代表」という役割をおおせつかり、ニューヨークの国連経済特別総会出席、電々公社の資料調達開放問題等の対米折衝、シンガポールでの日本・ASEANシンポジウム、オーストラリア・キャンベラでの環太平洋構想に関する専門家セミナーへの出席、さらにはバージニアで開かれた国際金融専門家会議、クウェートで開かれたタイド・ウォーター会議(援助問題)への出席、中国訪問など、実のところ席の暖まる暇もない。余談になるかもしれないが、こうした「会議外交」はこれからはますます多くなることが予想され、そこで英語——世界語としての英語——を使用する頻度はますます高くなる。

わずか三、四カ月のあいだにも、外交環境はめまぐるしく動いている。まずその一つは、米国におけるレーガン大統領の登場である。

米国が現在おかれている国際的地位からみても、大統領が変わることによって大きく国際政策を変えらるということはむしろかしい。カーター大統領の場合でも、いわゆる人権外交、核拡散防止、韓国からの撤兵などを選挙スローガンに掲げて当選したが、いざ政権についてみるとかなり修正せざるをえなかった。強いアメリカを選挙スローガンに掲げたレーガン大統領の場合も、現実に米国の経済力が、たとえば、第二次大戦後は世界の約二分の一、一九六〇年頃は三分の一、現在は四分の一と相対的に低下している状況で



は、とくに経済面では、日本・欧州と相談しつつ政策をすすめることになる。

ただ政策上のニュアンスのちがいがあって、レーガン政権はかなりソ連との対決姿勢があるといわれているし、軍事力を重視するといわれている。カリフォルニア州知事時代の実績からみてもかなりスタッフに仕事を任せる主義のようである。全体としては、カーター時代に比べ、いろいろな交渉のやり方が「タフ」になる可能性がある。日米関係が大きく変ったり、ヒビが入るようなことは米国のナショナル・インタレストとしても予想されないが、従来からくすぶっていた「タダ乗り論」がこれまでに以上に強くなることは考えられる。

もう一つの中東情勢については、イラン・イラク紛争がやや泥沼的な状況を帯びている。基本的には米ソ両大国とも紛争の拡大を望まないし、周りの諸国も戦争の局地化を望んでいるという意味では、今後拡大の見通しは少ない。しかし、双方ともそれぞれ国内問題をかかえており、双方の言い分に妥協の余地がないだけに、引くに引けない格好になっている。決めの手のないままにいましばらく長期化し、場合によっては戦争をしながら石油を輸出するような態勢にすることも考えられる。

紛争が中東全域に広がり、サウジアラビア、クウェート、アラブ首長国連邦などの主要石油産出国に飛び火するということになればともかく、いまのところそ

の可能性は少ないとみていい。決め手を欠いたまま、多少泥沼的に推移し、そのうち鎮火する可能性が強いと思われる。

レーガン大統領の登場にせよ、イラン・イラク紛争にせよ、基本的に先にのべた日本外交の大筋を変える動きとは私には思われない。しかし、世界は、先のイラン問題にしても、アフガン問題にしても、また新たに発生したポーランド問題にしても、世界政治をより多極化の方向に押しすすめる継手の役を果たしているように思われる。その中で、日本外交も二国間外交から多国間外交へ、経済外交から「経済プラス政治」外交へという色彩を、より強めてくるのが今後は予想される。

世界問題に「日本案」の提案を――

編集部注の注文によれば、「日本外交・一人歩き」の戦略である。グローバルに展開する世界政治の中で、日本の国益に合った独自の生き方を発見するという意味では、一人歩きの時代である。しかし、それは決して孤立化を意味してはならず、グローバルな政策を日本が身につけて、他の国々と協調しながら事を運ばなければ、かえって危険な結果を招きかねない。

各国それぞれの考え方があり、その調和をはかりながら世界に平和的・建設的な方向づけを与え、他方、世界の開発に協力して、世界経済全体が循環していくような方向に対して、これからは「日本

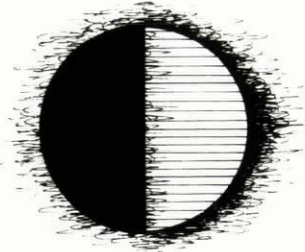
案」というようなものを準備することが必要になってくるのではあるまいか。従来は、簡単にいえば、米国の力が非常に強くて、世界問題といえれば米国が中心になって考え、それに日本もついていくという行き方がだいたいとられてきたが、これからの世界は必ずしもそういかない。日本からも、たとえ、世界経済を良くするにはどうしたらよいかについての、独自の「日本案」が必要になる。国際政治についても同様であろう。

その場合、独自の提案をしようとすれば、他国の政策を頼りに事をすすめてきたこれまでとちがって、よほど勉強しないと「案」は出てこないという意味で、国際問題の研究は従来以上に深く、かつ多様な角度から行なわれる必要がある。もしその結果、世界に受け入れられる「日本案」が出来れば、その面でのリーダーシップが日本にも次第についてくる。自主的な国際情勢の把握とそれにもとづいた政策提言、それによって世界の緊張緩和の方向づけがどこまで出来るか。やや大げさな言い方をすれば、世界を良くするために日本は何が出来るか、他の国に何をリコメンド出来るか――そうした発想が八〇年代、外交の時代に日本人に求められているといえよう。

安全保障としての国際交流

まつやま ゆきお
松山 幸雄

(朝日新聞論説委員・大来佐武郎部会)



なぜ「上げ千日、下げ一日」か――

数年前、パリで唐招提寺展が開かれたことがある。開基鑑真的坐像――評論家の小林秀雄氏が名著『私の人生観』の中で「肖像彫刻として比類なく見事な出来で、勿論日本一でせうが、世界一かも知れぬと思はれる」と称えた――あの国宝鑑真像が、海を越えてはるばるフランスに渡り、パリの前に陳列された。

「フランス人にもよいものはわかるのだね。みんな鑑真像の前で十字をきつたり手を合わせたり。当時は日本に対して貿易上の抗議、文句のやかましい最中だったのだが、驚いたことに、展覧会中は大使館に貿易関係の苦情が一つも来なかった。いかに良質の文化交流が大事か、痛切に感じたね」――北原秀雄前駐仏大使の回想である。

日本のように、核兵器を持たず、エネルギー、食糧を全面的に外国に依存しなければならぬ国、「諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しよう」と決意した（憲法前文）国にとって、外国から親近感をもってもらうことは、安全保障そのものといってよい。

ケネディ米大統領が暗殺される少し前、記者団に国家間の友情についてこう語ったことがある。「フランス政府は、必ずしも米政府にいつも友好的ではないが、フランス人は米国人にとっていつも信頼出来る友人だ」。たしかにフランス政府は、中国承認やら北大西洋条約機構（NATO）

（O）の軍事機構からの脱退やら、ジュネーブ軍縮委員会不参加やら、ワシントンをよく悩ましたが、米仏両国民の親近感そのものは、日米の場合とは比較にならぬほど強く、安定している。

何しろ日米関係の方は、「戦後最良の無風状態」ということでちよつと安心して、経済上のトラブルで米議会の空気が一夜にして「真珠湾前夜」みたいになり、険悪になってしまふ。ブレが大きすぎ、まるで、「上げ千日、下げ一日」といった株価をみる思いだ。これは、米仏関係と違って、日米間にはお互いに文化的親近感がまだ十分でないからであろう。

文化交流は国防

人種的に、また文化的に、日本が世界の主流からはずれている以上、われわれは好むと好まざるとにかかわらず、諸外国の好意、信頼を得るよう、もっと積極的な戦略、戦術を考える必要があるのではないか。

最近日本人の中にも、文化交流の必要性、重要性に気づくものがふえてきた。例えば二年ほど前、桜田武日経連会長を団長とする政府派遣の北部アンデス地域経済使節団は、貿易、開発などを主目的とした使節団だったにもかかわらず、政府に対する提言の第一に「人物交流、文化交流の必要」をあげた。

また同じころ外務省のアフリカ大使会議や、在アジア大使館政務担当官会議が、

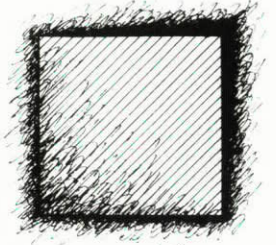
それぞれ「対アフリカ政策の最優先事項は、幅広いレベルでの人物、文化交流の推進である」「アジアにおける日本の経済的存在と文化活動の間の大きなミゾを埋めるべく、文化交流を促進することが対アジア最重要施策である」など、東京に対して強い語調で進言している。

しかし、国会議員をはじめ、政治の中枢に在るものには「文化交流は国防」といった意識が、まだほとんどない。

「外交は、消防であると同時に、予防医学の役割をもつ」といわれる。発生したことの後始末と同時に、未然に不祥事を防ぐ、という意味だ。文化交流はまさに「予防医学」そのものであって、これからの外交では「安保」や「貿易」に劣らぬ重要な分野だといってよい。ところが日本は、この点たいへんな後進国なのだ。

デモより大事なビザ申請

日本と米国の文化交流予算を比較すると、だいたい一対十の開きがある。米国は、ハリウッド映画やジャズやスポーツ、コココーラ、ジーンズなど、ごく自然な形で文化的に海外進出しようする状態にあるが、それとは別に「国策」としても、米文化の普及に懸命の努力を払っている。評論家の加藤周一氏は「米外交は拙劣な点多く、欧州では米国の外交の影響力は明らかに弱まっているが、文化的な面での米国の欧州へのくいこみ方はめざまし



いものがある。イタリアには明らかに英語を話す人がふえた。こうした面を軽視してはならない」という。国家関係における文化的接近は、自動車の売行きなどよりも、場合によっては条約や協定よりも、もっと重大なことなのだ。

六〇年安保で東京が「反米」というより「反岸」デモで荒れた時、米大使館幹部が「いかに米大使館がデモ隊に囲まれようが、渡米ビザ申請件数が今のようになっている限り、日米関係は心配ない。これが逆になったら、私は大いに心配する」と語ったことがある。見習うべき感覚である。

英国や西独も、文化外交では日本をほかにリードしている。例えば、日本の八〇年度国際文化交流基金予算五十二億円に対して、英国文化振興会（ブリティッシュ・カウンシル）四百七億円、西独ゲーテ・インスティテュート百二十四億円（いずれも七十八年度）。

面白いのは、最も緊密な関係にあると思われる米国に対して、英国も西独も激しい広報活動をしている点だ。ワシントンの英国大使館、西独大使館には立派な（外来者用）図書館があり、資料でもフィルムでも、本国に関するあらゆる問合わせに応じられるようになっていて、ニューヨーク駐在の英国広報担当官六十余人。「二つの世界大戦の経験からして、いざという時米国の応援を得るには、ふだんから一般米国人に英国びいきになっておいてもらわねばならんから」とさうだ。

文化センターは空母

これに比べ、海外にある日本文化センターの質量ともに貧弱なこと。日本の大使館や総領事館に置いてあるパンフレットには、二、三年前に印刷されたものがよくある。首相の写真が前首相、時には前々首相のものでたりする。

また日本には、欧米のように文化交流を一生の専門とするエリートがまだほとんど育っていない。かつてローマの日本文化会館の館長に、日本文化についてまるで知識のない外交官の古手が赴任してきて、地元にあきれたことがある。

これは軍隊でいえば、飛行機のことを知らぬ人を航空母艦の艦長にしたようなものだ。

実際、海外の日本文化センターは、文化国防上の「空母」とも「要塞」ともいえる。「海外派兵」は憲法違反だが、「海外派文化」は平和国家、文化国家の精神に合致するのだから、われわれはその線に沿っての「戦力増強」をもっとはからねばならない。

日本人は伝統的にサムライ気質が強く、また明治以来文化交流といえは受け入れ一方だったのが、官民とも自己主張、自己宣伝の下手な点では、世界最低に近い——ということだが、日本のえらい人には実感としてまだわかっていないようだ。むしろ親日派の外国人の方が「日本と外国とのトラブルの原因の一つは、日本の宣伝不足にある」（ホドソン元駐日米大

使）とか「日本は自ら外界から身を隠し、ちぢこまって静かにしている」（ライシヤワー元駐日米大使）、「日本人は政府も国民も、外に向かつて自分のことをあまり説明したくないから」（マンスフィールド駐日米大使）と親身になって心配している。

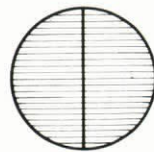
ビデオ、フィルム、写真を

日本が、自国の出来事を海外にどんどん流す通信社を持っていないのも大きい。海外に需要が少ないから、といってしまえばそれまでだが、米国のAP、UPI、英国のロイター、フランスのAFP、ソ連のタス、中国の新華社といった通信社が、日本に猛烈な情報の輸出攻勢をかけてくるのに対して、日本の方は、ほとんど輸出を手控えている状態である。

貿易でこれだけ著しい不均衡があれば大問題になるところだが、日本は明治以来情報の入超には慣れっこになってしまっていて、この不均衡を是正するため、輸出振興作戦を考えねば、といった論議は、国会あたりではまづきかれない。

とりあえず出来ることとしては、世界各地の在外公館に、日本の社会、産業、芸術などを要領よく解説したビデオ、資料などを大量に備えつけ、どんどん無料で貸し出すようにするのが急務であろう。米国などでは、中学や高校がこのごろよく「日本の夕べ」などの催しをやるが、適当なビデオを貸してほしい、といって





きても、日本の在外公館はまずたいていの場合、要求に応ずることが出来ない。たとえばビデオや映画のフィルムがあつても、歌舞伎や能など「日本は特殊な国だ」という印象を与えるようなものが大部分だ。

そういう伝統芸術も悪くはないが、それよりも、日本の選挙がいかに自由であるか、教育がいかに普及しているか、治安がいかによいか、新幹線や地下鉄がどんなに清潔で、快適で、時間が正確で、安全か、日本には階級差がどんなに少ないか、ブルーカーラーの人でも小説を書いたり俳句をつくったり、いかに文化水準が高いか、などを紹介する方が有意義であろう。また現代日本文化を代表する優れた論文や小説を英訳して、在外公館に備えておくことも望ましい。

知日派を拠点に

情報の輸出は、官制だけに頼っているはダメである。という事は、日本政府の刊行物だと、どんなに立派な英語で書かれたものであつても、相手からは「宣伝」と割り引いて受けとられる恐れがあるからだ。その点効率的なのは、信用ある外国人に日本紹介の労をとってもらうようにもつてゆくことであろう。

永井道雄元文相（現朝日新聞客員論説委員、松本重治部会）は「知日派の学者やジャーナリストに、年金または必要経費を支給して、日本紹介の論陣をはって

もらうぐらいのことを考えよ」と提案している。日本回帰を始めた日系三世、四世に奨学金を出して、日本文化海外進出の拠点に育てることも、一案かもしれない。

ライシヤワー元駐日大使の親日家ぶりは、いまさら紹介の要もないが、インガソル、ホドソン両元駐日大使も、帰国後まるで日本の「駐米名誉大使」といった形で、米国人の日本理解に手を貸している。一昨年コロラド州のアスペン高等研究所で開かれた「現代日本研究講座」に参加したところ、インガソル、ホドソン両氏が二週間の会期中びつしり出席して、米国知識人の日本勉強の手助けをしていたのには、強い感銘をうけた。

米国の場合に限らないが、こうした駐日大使経験者をいつまでも日本の援軍に止めておくような「アフタケア」を、国として組織的に考えるぐらいのことをした方がよい。国連には、斎藤鎮男大使当時出来た「東京クラブ」というのがあり、在日経験のある各国外交官が時々集まって懇親を深めている。彼らが「日本は信頼出来る友人だ」と自国民、自国政府に向かって説く時、日本の大使や総領事の演説、在外公館のパンフレット、ニュースレターなどの何倍もの影響力があるのは間違いない。

座頭市の威力

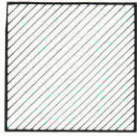
コロンビア大学では、月に一回、ジャパ

ン・セミナーを催し、東部の大学の日本研究者が順番に日本問題の研究成果を発表している。バージニア大学でも、年に一回「現代日本講座」を三日間開催する。どちらも私自身直接関係したから確信を持っていえるのだが、日本文化を外国に浸透させるには、「波及効果」という点で、大学研究者を重用するのが最も威力あるように思われる。

また、知日派とまで行かなくとも、日本に若干の興味を持ち始めた政治家、学者、官僚、ジャーナリストらを日本に招待し、こうした素人を日本問題の「半玄人」に仕立てて帰すことも、西鶴や漱石を読むようなジャパノロジスト養成以上に、有益だと思ふ。

文化交流をはかる上でとくに気をつけねばならないのは、日本側の尺度、ペー、好みで、ひとりよがりの「定食」を押しつけてはならない点だ。日本人は、文化というとすぐに、言葉や源氏物語や川端康成を考えがちである。たしかに鑑真像のようなトップの文化もわるくはないが、同時に、日本に親近感をもたせるのに意外に、また絶大に威力を発揮するのは、座頭市や黒沢明であり、松本清張や新幹線だ、ということも知っていた方がよい。

チュー政権時代のサイゴンで数週間過ごしたことがある。ある夜、朝日支局のベトナム人の使用人と一緒に中国人街シヨロンに行き、そこで勝新太郎の「座頭市」映画を観て、たいへん感激した。映画そ



のものでなく、観客の熱狂ぶりに感激したのである。英語と中国語の字幕付きなのだが、勝新太郎のかつこよきは、ベトナム人の対日感情をよくする上で多大の貢献をしている、との印象を受けた。こういう「文化」をバカにはいけない。

文化交流の達人を無形文化財に

文化勲章受賞者の顔ぶれが発表になるたびに、文化というものについての政府の考え方がちよつと庶民感覚、時代感覚からズレているように思えてならない。日本画家や歌舞伎役者がよく受賞する。彼らはたしかに日本文化の粋ではあるが、(そして私も、日本画、歌舞伎の愛好者ではあるが) 少なくとも外国との文化交流に当たっては、文化勲章選考の時は、「文化」の概念をちよつと変えた方がよくはないか、という気がする。

人間国宝とか無形文化財についても同様。日本にとって文化的に貴重な人が、どうして伝統的な踊りや美術、工芸の名手に限定されねばならぬのか、不思議でならない。むしろ東南アジアや中近東、アフリカに長期滞在して日本文化のフアンを生み出すことに専念しているような人をこそ、現代日本の人間国宝、無形文化財に指名すべきではないか。芸術院会員に国鉄無料パス支給もよいが、海外に日本びいきをつくるべく飛びまわっている人たちに、日航一等寝台パスを与えるぐらいのことを考えてもよいのではない

か。

スポーツの交流も、日本人の語学下手を目立たせずにすむから、大いに振興、奨励さるべき部門であろう。ただ日本人は、勝負にこだわるせいか、柔道のような日本の得意技に固執しがちだが、それより相手国の伝統的スポーツに挑戦してゆく方が(別にこびるといふ意味でなく)、より好感を持たれよう。

文化交流は、気どらず、相手の身になって細かいところに神経をつかってやることが大切である。体操のベテラン池田敬子さんがいう。「体操の試合に来日したソ連の選手が、口々に『ヨコヤマチョーに行きたい』というんですよ。私も秋葉原に行けば電気製品が安く買える、ということは知っていたけど、横山町の繊維製品までは気がつかなかった。共産圏の選手も、安いショッピングをしたいのですね。彼らの日程に、横山町行きを入れてあげるような配慮が、国際交流には必要なのでしょう。」

東西南北の懸け橋に

文化交流費というのは、最新式戦闘爆撃機の製作費が一機七、八十億円ということを考えても、実に安い国防費である。海外経済協力で、四車線の橋を一本かけると、数十億で日本全体の外国との「文化の懸け橋」予算がふつとんでしまおうという。

マニラの国連貿易開発会議(UNCTAD)

(AD)に出席した大平前首相が「奨学金百万ドル(約二億円)をフィリッピンの学生に出す」という発表をしたところ、地元新聞に大見出しで、また日本の新聞にも一面に三段抜きで出た。「二億円」といふと、建設や農林関係の予算だと、端数あつかいですからぬ。文化関係の費用は、宣伝になるといふことを考えると、投資効率抜群の分野です」と秘書官が驚いていた。ほんとに「費用対効果比」という点で、文化交流はどカネの生きる仕事も少ないのではないか。

以上、私は政府にもつとカネを出させたいとのねらいから、あえて安全保障がらみで文化交流を論じてきたが、実はこの問題は、本来そんな狭い視野でなく、もつと長期的、地球の見地からとりあげべきことかもしれない、という気がする。

日本は、西欧文明をモノにした東洋最大の国家であり、また短期間に軍国主義と民主主義、途上国と先進国、両方を経験した世界史上珍しい標本である。まさに東と西、南と北の文化的接点として行動する資格と義務とを持っているといえる。

この小論のように「日本の安全保障のために」などというケチな見でなく、本当は人類の歴史の大きな流れをふまえて、「東西南北の文化の懸け橋になろう」といった気宇壮大な構想の下に国際交流予算を組む——ぐらいの発想の大転換を試みて然るべきなのだ。

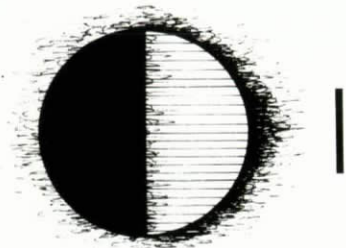
米欧関係の構図

— 80年代ソ連の読み方

かわいひてかず

河合 秀和

(学習院大学法学部教授・小松左京部会)



レーガン大統領の受け止め方

もともとカーター大統領は、西ヨーロッパであまり尊敬されていなかった。シユミット首相が、あれは厄介な男だと批評したのはよく知られているし、ジスカール・デスタン大統領は、カーターがアフガニスタン問題をめぐって動揺した時には、あからさまに軽蔑を示したといわれている。

レーガン新大統領も、これまでのころあまり尊敬されてはいない。六十九歳という年齢で西側の指導者になるとするのは、日本以外では考えられないことである。牧童のステットソン帽をかぶった二流の西部劇俳優というイメージも強い。レーガンが映画俳優組合の委員長としてタフな交渉の経験を積み、カルフォルニア州知事として実績を上げたことについては、あまり語られていない。西ヨーロッパでは、政治家が訓練を受け、世間に知られていく場合は中央議会だと思われるために、それ以外の場での経歴には

強い印象を受けないのである。

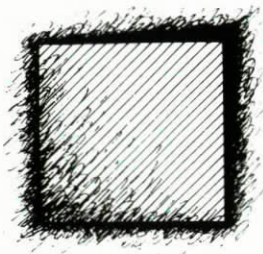
たしかフランスの新聞に、レーガンは——大統領になる前のカーターと同様——これまで一度もホワイト・ハウスに泊ったことがないという指摘があった。つまり誰であれ時の大統領の招待を受けたことがない、中央政界に足場がないという趣旨である。ニクソンがカルフォルニアで、カーターがジョージアでそれぞれ側近のグループを結成したように、レーガンもカルフォルニアで側近を募ってワシントンに乗り込んでくるであろう。閣僚はもちろんのこと、主要官庁の頭株も大幅に入れかわる。彼らの前歴——特に政治的前歴については、ヨーロッパではほとんど知られていない。官僚機構という政治の安定要因、誰が上に立っても大した変化は起こりそうにないという、いわば政治における安心感と墮性を生み出す要因が、アメリカではあまりにも少ないように見えるのである。

構造的な不一致

このような文化ショックは、レーガン大統領が就任して二―三カ月も経てば消えていくであろう。西ヨーロッパ各国の政府はそれぞれの国とアメリカとの関係あるいは全体としての西ヨーロッパとアメリカとの関係は「不変である」と声明した。そしてレーガンも、「アメリカの同盟国とは十分に協議する」ことを当選早々に約束している。しかし協議は、も

とも基本的な点についての合意がなければ、かえって不一致をさらけ出すだけである。そして西ヨーロッパとアメリカとの間には、いわば構造的な不一致があり、それは、一九七九年末の二つの事件——テヘランのアメリカ大使館員人質事件と、ソ連のアフガニスタン侵入以来、一層際立ってきている。この構造的な不一致は、西ヨーロッパがアメリカの核の保障に依存しているという事実根ざしている。西ヨーロッパにたいするアメリカの核の保障と、西ヨーロッパにおけるアメリカ軍の駐在は、一方では安全を、しかし他方では疑惑と不安を生み出す。アメリカと西ヨーロッパの間には大西洋があるが、西ヨーロッパはソ連圏と陸続きである。したがって西ヨーロッパには、アメリカの軽率な行動によって世界戦争に巻き込まれるはしないかという不安と同時に、世界的な危機にアメリカから見捨てられるはしないかという不安がある。さらに悪いことに、アメリカが西ヨーロッパを防衛してくれた場合にも、西ヨーロッパだけが廃墟になって、米ソは生き残るということになりはしないかという不安がある。

現実には、一九七九年十二月——ソ連のアフガニスタン侵入の二週間前に、NATOが西ヨーロッパにアメリカの巡航ミサイルとパーシングIIミサイルを配置することを決定したのは、ソ連の新しいSS-20ミサイルとバックファイア爆撃機にたいしてアメリカがICBMに頼り、



西ヨーロッパを事実上見捨てることになりはしないかという心配からであった。しかしこの新しいいわゆる「戦域」核兵器が西ヨーロッパ戦域だけのためであることは、ヨーロッパを戦場にして米ソが戦いはしないかという先の不安をあらためてかき立てずにはおかない。現にオランダ、ベルギー、デンマークは、そのよくな不安から新しい核の配置を拒否したり躊躇したりしている。

中東依存が矛盾を拡大

一九六〇年代以降の西ヨーロッパの経済成長は、それに対応するアメリカの経済的実力の相対的な低下と相まって、この西ヨーロッパの対米軍事依存に内在する矛盾を一層大きくすることになった。ドルの低下に対抗して、フランスは早くからドルを金に換えてアメリカを怒らせた。西ドイツは、七七年から七八年にかけてカーター政権がドル価低下に何の手も打てなかったことに怒り、そして景気回復のためのいわゆる「機関車」役を押しつけられたことに当惑している。

他方で西ヨーロッパ経済は中東の石油に依存しているが、この事実もまたアメリカと西ヨーロッパの間に緊張を生み出す。アメリカは、カーター政権のエネルギー政策の破産のために、依然として中東石油のガブ呑みを続けている。他方でドル価の低下はOPEC諸国の態度を強め、さらに石油輸出価格の引上げに向か

わせることであろう。

そのために西ヨーロッパは、アラブ諸国の動向にたいしてアメリカよりもはるかに敏感に対応するようになった。カーター政権がキヤムプ・デーヴィッド精神——つまりイスラエルとエジプトの和解を中東平和の要め石としようとしたことは、御承知の通りである。カーターが破れてもなおこの政策が成功するには、イスラエルの総選挙で労働党が大勝するといった条件が必要である。他方で選挙戦におけるレーガンが、キヤムプ・デーヴィッド精神からむしろ一步後退して、あからさまにイスラエル支持の態度を表明したことも、御承知のことと思う。最近の西ヨーロッパがPLOの承認を提唱しているのは、明らかにこのレーガンのユダア人票切り崩し（アメリカのユダア人は、伝統的に民主党支持であった）のための勇み足を牽制する動きである。

自立を模索した七〇年代

このような事態——西ヨーロッパの対米軍事依存と、石油についての中東依存を背景に、一九七〇年代には西ドイツ、フランス、イギリスの三国——つまり西ヨーロッパの主要三国に新しい外交政策が現れてきた。西ドイツは、これまでの軍事、外交における対米依存をゆるめつつある。またかつてのナチ・ドイツの汚名を消し去るために、西ヨーロッパの善良な一国であることを証明しようとして

いたのにたいして、いまではプラント以来のいわゆる東方政策によって、東ヨーロッパにたいする独自の外交を進めている。東ドイツとの関係、ベルリン問題、ポーランドとのオーデル・ナイセ河境界線問題などは、成功を収めた。ECにおける西ドイツの経済的比重の高まりについては、いうまでもないであろう。

フランスは、かつてドゴールが劇的にまた激烈にアメリカからの独立を求め、NATOからも脱退したのにたいして、いまでは軍事的自主性を保ちながらもNATOとの協力を図るという複雑な態度をとっている。ソ連のアフガニスタン侵入以後、ジスカール・デスタン大統領が、ワルシャワでブレジネフ書記長と会談するといいわば自前のデタント政策を続けながら、アフリカにたいする干渉、中東との石油交渉でもきわめて活発である。イギリスは、アメリカとイギリス連邦との「特殊な関係」をゆるめて、ECの一国になろうとしている。EC予算がフランス農業をあまりに手厚く保護しており、イギリスの一方的負担になっているというので強硬な交渉を続けているが、ECの一国となったという事実はおそらく（八〇年十月、EC脱退を年次党大会で決議した労働党が政権をとった場合にも）揺がないであろう。

もちろん、このような各国それぞれの自立性も先に述べたアメリカの核の傘の枠内にあることはいうまでもない。しかし自立性は確実に増大しつつある。一九



六〇年代には、フランスを別として他の西ヨーロッパ諸国は、何らかの外交上の動きに出る前にアメリカに相談し、アメリカが賛成しなければ動かなかった。今ではそうではない。そればかりか、西ヨーロッパ独自の外交政策、対外経済政策を追求しようとする動きも顕著になってくる。アメリカが提唱した対イラン経済封鎖、ソ連にたいする貿易制限とモスクワ・オリンピックのボイコットにたいしていかに同調するかという問題は、西ヨーロッパのP.L.O承認への動きと並んで過去一年に見られた西ヨーロッパ独自の外交政策を作り出すための努力の跡を示している。

イラン・アフガン問題の難しさ

対イラン、対ソ連の二つの制裁措置は、どこまで西ヨーロッパがアメリカに同調できるのか、あるいはできないのかをよく示していた。対イラン経済封鎖については、シュミット首相があらさまにいったように、西ヨーロッパは人質釈放という目的を達成する手段としてはあまり効果がないと信じていたにもかかわらず、アメリカが軍事行動に出るのを防ぐために同調することを決定した。この決定が行なわれたまさにその翌日、アメリカの特殊部隊が進攻し、そして失敗したことが明らかになった。

これはアメリカの裏切りなのか。つまり他国が同調するか否かにかかわりなく、

アメリカは独自の行動に出られることを誇示しようとしたものなのか。それともアメリカ国務省とブレジンスキー補佐官との間の意見の相違が現れたものなのか。どうやら後の解釈の方が当たっているようであるが、今のところははっきりしない。ともかくもカーター大統領の信用を失墜させる事件であったことは間違いない。アメリカからの呼びかけに真先に答えたイギリスが、議会の反対にあつて対イラン経済封鎖からおりてしまったのは、逆に西ヨーロッパ側の結束の弱さを示す事件であった。他方で対ソ制裁については、西ドイツとフランスが独自にソ連と会談するという動きに出て、これまた西側の結束の乱れを示した。

おそらく基本的な問題点は、西ヨーロッパとアメリカの同盟体制が西ヨーロッパ以外の地域にも対応せざるをえなくなっている点に求められるであろう。これまでも、ヨーロッパ以外での米ソ対立——朝鮮、スエズ、ヴェトナム、中東などは、一九六二年のキューバ危機を例外とすれば、いずれも大西洋同盟体制にとつての厄介な問題であった。しかしこれらの事件は、いずれもばらばらに時をおいて生じた事件であり、これまたキューバ危機を例外とすれば、米ソ戦争にまでエスカレートする危険性はあまりなかった。しかし現在の中東問題——イランとアフガニスタン——は明らかに違っている。すでに述べたように、西ヨーロッパは中東の石油に依存している。しかもこの

地域での米ソ紛争に、西ヨーロッパも巻き込まれてしまう可能性がある。中東地域は西側にとつて重要であるが、ソ連にとつても重要である。しかも軍事的には、おそらく陸続きのソ連の方が優勢であろう。そしてここでは、ヨーロッパにおけるソ連の通常兵力の優勢にたいして、西側の通常兵器プラス核兵器で対応するというやり方は適用できない。その上に、この地域における社会的・政治的不安定にたいして、西側と東側のいづれがより賢明に対処できるであろうか。

先にも挙げたP.L.O承認への動き、イギリス外相カリンソンのアフガニスタン中立化案、あるいはブラントの南北問題についての報告、日本ではあまり伝えられていないが、アフリカ・カリブ海地域などにたいするE.Cからの援助計画等々、西ヨーロッパ独自の第三世界にたいする政策も次第に芽生えつつあるようである。

新たな焦点・ソ連

しかしアメリカから見れば、このような動きは時として西ヨーロッパとの対立の種となりかねない。西ヨーロッパは足並みを揃えて動きはじめているとはいっても、軍事的にはN.A.T.O.、経済的にはE.Cと組織的に分れており、それぞれの内部でも決して結束が保たれているわけではない。そしてアメリカの側には、米ソ間の決定的な対立となれば、物をいうのはアメリカの核の力だけであるという

抜きがたい前提がある。一九七三年の「ヨーロッパの年」という有名なキッシンジャー提案以来、アメリカは西ヨーロッパに負担の増大を求めているが、しかし肝心の政策決定については、西ヨーロッパとともに行なおうとしているわけではない。

他方でヨーロッパからすれば、アメリカの政治のあり方はますます頭痛の種になってきている。この数代の大統領は失政続き、外交政策の決定では国務省に一元化しておらず、キッシンジャーやブレジンスキーの横槍がいつも入り、大統領は補佐官と国務長官とを噛み合わせて、その上で外交を行なっているかのようにさえ見える。各省各局が、それぞれ勝ちな政策を発表するということは、アメリカはただでさえ悪名が高い。さらに今度の選挙を通じて、共和党の議員が進出した。彼らはさらに強硬に西ヨーロッパに負担の増大を求め、負担増大がいやならば見捨てるぞという威嚇をもつと露骨にやるかもしれない。

結局のところ、今後のアメリカと西ヨーロッパの関係を占う鍵は、ソ連の動きをどう理解するにかかっているようにある。カーター大統領は、一方では西ヨーロッパの軍備強化を求めながら、他方でその軍備強化を常に対ソ軍縮交渉と結びつけていくという方針であった。そしてソ連そのものについては、遅くとも一九八〇年代の後半、ブレジネフに代わる新しいソ連指導者のもとでソ連は経済体制

の改革に取り組みざるをえないという見通しがあるようである。これは、西ヨーロッパとも共通の見方であろう。

問題は、ソ連の経済的な弱みという見通しに立ってどのような政策に出るかという点である。ソ連は、経済の弱さのために軍事的進出を控えるようになるであろうか。それとも逆に、経済の弱みを埋め合わせるために軍事的に強硬に出てくるようになるであろうか。流行の言葉を使っていえば、ソ連と西側それぞれについて、軍事と経済をどうリンクさせるかという問題である。

衰えたりとはいえ、アメリカの経済的實力は依然として大きい。二年続きの穀物不作に悩まされているソ連に、必要なだけの穀物を輸出できるのはアメリカだけである。カーター大統領は、アメリカの穀物輸出にソ連軍のアフガニスタン撤退という条件をつけた。ソ連を抜きさしならぬところまで一歩追いつめたわけである。同じく対ソ経済制裁の措置として、アメリカは石油採掘技術の輸出停止を定めた。ソ連の石油自給は数年のうちに終るであろうという予測に立ちながら、ソ連が中東の石油に目を向ける時機を早めたわけである。これが西ヨーロッパからカーターの対ソ政策に向けられた不満であった。西ドイツがポーランドにたいする融資を決定し、フランスが——ジスカール・デスタン大統領の再選を目指して——ソ連にたいする独自の外交、貿易政策を進めようとしているのは、この批

判の具体的な現れである。

それにたいして、レーガン新大統領はソ連にたいしてどのような態度に出るであろうか。選挙戦では、レーガンは世界の諸悪の根元はソ連にあり、アメリカはこの悪に対抗すべきであり、かつ対抗する能力があるとするかのような印象を与えた。もちろん、大統領になってからもそのような態度がそのまま続けられるとは思われないが、どのような線に落ち着くのか。西ヨーロッパと新大統領下のアメリカとの関係がかなりの動揺に見舞われるであろうことは、十分に予想できる。

日本へのツケ「中国カード」

最後になったが、日本の対米、対EC輸出問題と並んで、日本にも重大な関係のある問題として、いわゆる「中国カード」にも触れておかねばならない。かつて西ヨーロッパは、ソ連とナチ・ドイツを対立させようとしてヒットラーの「宥和」を図った。それはいうまでもなく、失敗に終わった。しかし今また、ソ連と中国を戦わせようとする誘惑に駆られてはいないであろうか。これはヨーロッパ「戦域」で行き詰まり、中東で打開策が見出せなくなつた時の最後の選択である。日本も含めた極東の側には、この事態を回避する見通しがあるのであるか。西ヨーロッパとアメリカの今後の関係を展望した時、これが極東にまでツケの回つてきそうな問題点である。

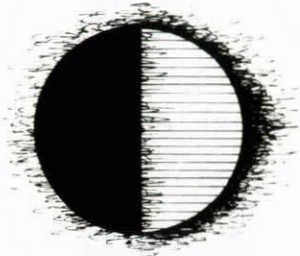


ASEAN経済協力

—「援助を生かす」現実主義外交への転換

さいとう しろう
斉藤 志郎

(日本経済新聞アジア総局長・茅誠司部会)



日本の東南アジアとの経済協力は、観念的な援助至上主義から、各国の実情と開発の優先順位に即した選別的現実主義をベースとするものに転換すべき段階にきているように思われる。近年「アジア重視」のかけ声が高まってきたものの、これまでの姿勢は「かねさえ出せば、事たりる」といった援助至上主義にとらわれたものであった。だが、これからの課題は資源開発、貿易、工業プロジェクト、技術移転、いずれの分野をとってみても、かねだけで済む問題ではない。しかも、ASEAN諸国の経済的現実が多様であり、すべてをかねに還元した「一律平等主義」は通用しない。

一月の鈴木首相のASEAN歴訪は、観念的アジア重視から一歩踏み出し、多様な環境の中で「援助を生かす」現実主

義外交への転換の契機とすべきであろう。

立往生のASEANプロジェクト

日本政府がASEAN諸国に対して行った、これまで最大の公約ともいうべき共同工業プロジェクトは、一九七七年の福田元首相による十億ドル借款供与の意思表示からすでに三年余りたつて、まだ一つも実現していない。このまま、実現がさらに遅延すれば、日本とASEAN各国との間のやっかいな緊張要因となりかねず、鈴木内閣のASEAN外交の成否を左右する大きな試金石となろう。

ASEAN共同工業プロジェクトは日本が借款供与を約束した十億ドルを五カ国等分の二億ドルに分け、尿素プラント、ソーダ灰肥料プラントなどを各国で建設しようとするものである。すでに、インドネシア、フィリピン、マレーシア、タイの各国でそれぞれのプロジェクトについてフィジビリティ・スタディが進められているものの、時間が長くかかりすぎたため、工場建設費の上昇で割当て資金を大幅にふやさないうかがり、実現のメドは立たない状況に追い込まれている。

インドネシアの北スマトラ・アチエ州に建設予定の尿素肥料工場は、一九七八年十一月からフィジビリティ・スタディを始めたが、七九年六月に国際協力事業団が行なった工場建設費推定額は三億一千三百万ドルにのぼり、日本側はこのうち七〇%を融資することに同意した。だ

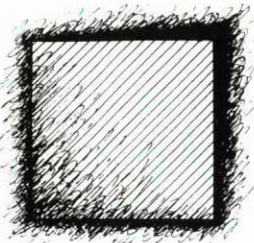
が、今年初インドネシアが交渉した日本企業の建設費見積りは約四億ドルで、不足額九千万ドルについて改めて日本からの融資を増額してほしいとの要請をインドネシアは行なっている。インドネシアに対する当初の割当て額二億ドルの二倍にふくれあがったわけである。

もし、インドネシアへの割当てを二倍にふやせば、他のマレーシア、フィリピン、タイなどへの割当てが削減されることになるかもしれない。各国とも神経をとがらせている。工場建設費の上昇はどの国も同じだとすれば、それぞれ日本に対して融資増額の要求を出して来ることが予想され、九月バンコックで開かれたASEAN工業相会議では、十億ドルのコミットメントの総額倍増要求の声があがったほどである。

経済・社会摩擦、公害論議も

ASEAN共同工業プロジェクトが遅延を重ねて今日に至った原因を考えると、たとえ田借款を倍増してみたところで、すぐ実現するものとは思われない。プロジェクト遅延の原因はかねの問題ではないからである。

日本国内で工場を建設するのとは異なり、プロジェクトの実施に必要な相手国との行政手続きから法的規制上の問題、技術・エンジニアリング、工場完成後の運営管理、保安上の問題まで含めて、いわば硬質社会の日本的システムを軟質社



会の東南アジア各国にそのまま持ち込むわけにはいかない、という困難な事情が介在しているのである。事を性急に運べば、経済的、社会的摩擦を惹き起こすかもしれない。下手をすると、工業プロジェクトが攻撃の具に供されたり、周辺住民の公害論議に巻き込まれる恐れもある。

現に、タイのチョンブリ海岸の村落レームチャバンに建設予定のソーダ灰肥料工場をめぐって、工場用地選定にからむ政治的思惑、海岸汚染の懸念と公害論議が表面化している。この問題は、パタヤ海岸の観光投資家、エビ業者、農漁村民まで巻き込んで「ストップ・肥料工場」のキャンペーンに発展している。この種の公害論議がどこまで根柢のあるものか、多分に疑問だが、問題の根はもつと深いところにある。経済的には、タイの観光収入に少なからぬ打撃を与え、政治的には、チョンブリ市と周辺の住民の怒りを買ひ、社会的には、一部資本家の利益のために貧しい住民が土地を追われて流浪の民と化す——といった議論がなされている。肥料工場の用地買収に伴い、農漁村の伝統的な生計の道を失う住民の数は、三千五百人ないし五千人といわれるが、彼らはわずか二万バーツ（一米ドル＝二〇バーツ）の補償金で移住を余儀なくされ、新しい職業を探さなければならぬのに、買収された土地はその十倍もの価格で富裕なデベロッパのふところをうろおすのみであるという。

単なる一肥料工場の建設にしても、か

くもさまざまな経済的、社会的摩擦を生む現実をみれば、ASEAN諸国の工業化とこれに対する日本の経済協力の前途はことのほか厳しいものといわねばならぬ。

ASEANの中でシンガポールだけは、当初考えられたディーゼル・エンジンのプロジェクトをインドネシアとの競合で断念する形となり、現在にも具体的なプロジェクトは計画されていない。ただ、総額十億ドルのうちの応分の割当て額について、これに享受する権利(?)は留保するというこのようである。シンガポール政府はかなり高度に発展した経済・産業の現状から、外国の政府開発援助より民間資本の導入、技術移転を通じて、さらに産業構造の多様化、高度化を図ろうとしている。日本からの民間投資、企業進出はここ二、三年欧米を圧倒する勢いをみせ、そろそろ頭打ちの兆候もないではないが、最大規模の合弁事業として注目されるのは住友化学の石油化学コンプレックスの建設である。PCS(シンガポール石油化学公社)のメルバウ島ベトケミ工場はことしからいよいよ設備建設に着手したが、公害防止の規程をめぐって、EDB(経済発展局)と環境省の意見が対立し、政府最高首脳に判断を委ねられた結果、環境保護を優先する方向が打ち出されている。この事実、シンガポールを含むASEAN全体として工業化に伴う環境汚染の問題に極めて敏感になってきていることを物語る。

技術移転を軸に総合協力

東南アジア地域をはじめ開発途上国に対する日本の海外援助政策は、ODA(政府開発援助)の三年倍増(七七年～八〇年)を柱として、第三世界途上国の経済繁栄、平和と安定に寄与し、引いては日本の総合安全保障の一環にこれを位置づけようとする理念が確立されつつあるようである。しかし、これまでの対ASEAN援助にしても、すでにみたように、援助の三年倍増、五年倍増といった、多分に観念的な目標を掲げるだけでは、途上国の経済発展、国際的安定秩序確立の目的を達成することは困難である。政府民間の資金供給による工業プロジェクトを真に機能的なものとして完成するためには、ハードな「かね」と「もの」の供給だけでなく、ソフトな「ノウハウ」技術の移転がいっそう大切な要素となってくる。

しかも、途上国との経済協力でより大きな比重を占めるようになっていく技術協力、技術移転の問題は単に経済・産業分野だけでなく、地域の伝統的な文化風土、より直接的には社会制度全般にかかわるものだけに、伝統社会から近代社会への転換過程で多かれ少なかれ社会的緊張をはらむことは不可避である。それはまた、社会秩序に安定作用よりむしろ破壊作用を及ぼす性質のものである。この厳しい実体を踏まえ、たうえでの援助



政策でなければ、真に援助を生かす現実主義外交はおぼつかない。

日本の東南アジア地域との経済関係の基本的パターンは従来、アジアで唯一の工業国・日本にとって、東南アジアは一つには原料資源の供給源であり、二つには工業製品の輸出市場として位置づけるものであった。しかし、こうしたパターンは東南アジア諸国の工業化が徐々に進む一方、資源ナシヨナリズムあるいはセルフ・リジリエンス（自己抵抗力）の認識が強まるなかで変化を余儀なくされている。石油、天然ガス、すずなどの鉱産物、ゴム、パームオイル、木材などの熱帯産品、いずれの原料資源についても、一九七〇年代半ばの石油危機を契機として発生した資源ナシヨナリズムの風潮を背景に、限りある資源の「切り売り」は避け、現地での加工、半製品の輸出に転換しようとしている。このため、日本が資源の確保、安定供給を図るのには、石油精製 LNG（液化ガス）、石油化学プロジェクト、あるいは代替エネルギー開発をも含めて、技術およびエンジニアリングの分野での協力が不可欠となってくる。木材など一次産品についても、原木輸出から合板あるいは家具製造技術、デザインの導入による半製品、完成品の輸出に切り替える方向にある。

原材料供給パターンの変化は当然のことながら製造工業品貿易の分野に影響を及ぼし、日本からの工業製品輸出による片貿易、慢性的貿易不均衡を是正するた

め途上国製品への日本市場の開放が要求されてくる。そして、日本市場を東南アジア諸国に開放するためには、国内の産業構造改革という困難な問題に取り組んでいかななくてはならない。

貿易パターンの変化に伴う日本国内の産業構造の転換は、東南アジアに対する投資、合弁事業、企業進出のパターンの変化とも密接な関連を持つものである。

従来の企業進出は製鉄、セメント、タイヤ、石油精製、造船、自動車、電気・電子製品組立など大型装置産業が主流であったが、今後はこれらの大型プロジェクトを支えるサポーターイン・インダストリ（補助産業）育成という現地国の要請に応じて、日本からの企業進出も大企業だけでなく中小企業にまで分野を広げてゆかねばならない。中小企業の海外進出は一面で現地の安い労働力を利用し、競争力を維持しようとのねらいを持つものだが、他面途上国製品に対する日本市場の開放、産業構造転換との関連では、現地生産への技術移転、日本への製品引き取りという新しいパターン形成の課題を担っているのである。

そして、日本と東南アジアの総合的な経済協力の新しいパターン形成の根本は、資源開発、貿易、投資、技術移転の各分野にわたる「人間資源の開発」に帰着する。故大平首相が一九七九年五月の UNCTAD（国連貿易開発会議）マニラ総会で提唱した「人づくり構想」はこうした要請に応えようとするものであった。

ただ、「人づくり」という言葉の響きは多分に日本の風土、社会環境の中で人材育成のニュアンスの強いもので、そのまま東南アジア諸国民に理解され、受け入れられるかどうかは疑問である。シンガポールのように、李光耀首相はじめ政府、民間をあげて「日本に学べ」運動を展開している国でさえ、「日本人と同じように優秀な人をつくる早道は、日本女性と結婚して子供を生ませることだ」といったシニカルな意見を吐く人もいるほどだ。観念的な人づくり構想は危険である。

「五マイナス」の現実的対応も――

一口に ASEAN 諸国といっても、国家の政治、経済、社会構造は多様であり、民族、文化、風土もそれぞれ異なっている。経済の発展段階、産業構造だけを見ても、ASEAN はヨーロッパの EC（欧州共同体）などに比べ、格差が大きい。加盟五カ国の中で、シンガポールは通常のネーション・ステート（国民国家）というよりはシティ・ステート（都市国家）として特異な存在であり、農業部門の「負担」にわずらわされることなく、近代的な工業技術社会の形成に取り組んでいる。マレーシアも比較的安定した政治体制のもとで、工業化の道を着実に歩んでいる。これに対し、インドネシア、フィリピン、タイの政情は潜在的に不安定で、農業問題の解決が依然大きな課題となっている。したがって、ASEAN 諸国の経済政

策、開発戦略の優先順位がそれぞれ異なるのは当然で、日本との経済協力のあり方も国によって違ったものとなる。日本あるいは欧米先進国とASEANの協力は地域グループとして共通のワク組みを必要としていることは事実だが、そうした原則は別として、具体的な工業プロジェクト、それに伴う資本および技術の導入をめぐる諸条件は違っても不思議ではない。

こうした現実を踏まえ、ASEAN工業化の意思決定方式として、シンガポールの李光耀首相が「五マイナス」方式を提唱しているのは注目される。つまり、域外先進国との協力による工業プロジェクトについて、加盟五カ国全体の合意が困難な場合には一カ国が反対でもその国の利害を大きくそこなわぬものであるかぎり、事実上のコンセンサスを得たものとみなして、プロジェクトを促進するという考え方である。これはASEANの域外経済協力では、各国一律の硬直的なアプローチを改め、柔軟な現実的アプローチに転換する姿勢を示唆している。このことは、日本の対ASEAN協力にも、開発援助、借款、技術協力の面でも個別的、選別的な提携の余地が生まれてくることを意味しよう。

「島づたい連携」の戦略

日本の東南アジア政策をアジア諸国の工業化、近代化促進の観点から、より機

能的、効果的なものとして戦略化する場合、ASEANという地域グループのワク組みを対象とするよりは、近年東および東南アジアで新興工業国(NICS)の地位を築きつつある韓国、台湾、香港、シンガポールの相互連携を足場として、企業進出、技術移転を積極的に進めるのが、いっそう現実的であるように思われる。ハーマン・カーンは、これを「四つの小竜(リトル・ドラゴン)」と名づけ、アジア地域で近年日本をしのぐ経済成長を記録し、将来日本と同様の高度技術社会に成長する可能性を十分持つものとしている。その理由としては、韓国、台湾、香港、シンガポールはもっぱら人的資源の開発に力を注ぎ、経済的成功にその生存をかけてきた国々であり、日本と同じように、近代技術社会が機能する条件としての「平民的調和」「順応主義」「家父長・世襲制」といった文化価値体系を備えている点を指摘している。

大来佐武郎氏は、日本列島から朝鮮半島(南)、台湾、香港、シンガポール、さらにスリランカに伸びる線上で、日本で工業化の第一波が第二波、第三波となって伝播してゆく様をいわば波状的技術移転現象と観察している。

確かに、日本とこれら新興工業国の関係をみると、いったん韓国に進出した企業が台湾からシンガポールに渡り、さらにスリランカを目指し、加工機械技術などの移転も同じパターンをたどる傾向的現象が実証できそうである。この仮説が

実証されれば、日本のアジア工業化戦略の柱として選別的優先権をここに置くことができるであろう。これをかりに「島づたい連携の戦略」と名づけておこう。

NICSとの連携強化は他のアジア地域を無視したり、不当に差別することを意味するものではない。例えば、シンガポールに移転した日本の技術とその製品はマレーシアのジョホール、インドネシアのパタム島、さらには香港、台湾との連携のワク組みの中で中国大陸の福建省、広東省へと伝播する潜在性を持つていよう。一見、荒唐無稽の議論と思われるかもしれないが、シンガポールに進出した日本企業の製品、例えばテレビ・セットが大量に中国向けに輸出されている事実は将来の連携パターンを予測するに十分な根拠となりえよう。

日本の高度技術体系をそのまま中国大陸なり、他のASEAN諸国、インド亜大陸、中東方面に移転させることは、経済摩擦、社会的緊張を惹き起こす点からも困難であるが、いったん台湾なりシンガポールに移植されたものをさらに再移植する方がはるかに容易であろう。この意味で、島づたい戦略は「技術移転の苗床」としての機能を果たすものと意義づけられることができるかもしれない。

(シンガポールにて)

外交における人間の条件

きたはら ひで お

北原 秀雄

(前駐仏大使・西武百貨店顧問・大来佐武郎部会)



基本はやはり人間の資質

最近の世界情勢は、外交というものの内容を急激に変えつつある。外交の担うべき課題の質が変わり、また、外交が関わる問題領域も著しく広がっているからである。

一つには、交通・通信手段の急速な発達によって、世界は非常に狭くなり、国個人を問わず接触の対象が広まることにも、その接触の密度も増している。そのため、いわゆる外交の衝に当たる人間に幅広い資質が求められるようになった。

他方、国際関係においても非常な変化が見られる。すなわち、政治・経済・技術・文化など、あらゆる面において国内

と国外との関係が密接になり、内政と外交とは、切り離せない相関関係をもつようになった。その意味でも、従来のように、いわゆる政府の外交官のみが外交に携わるといふ時代ではなく、社会のあらゆる職業、あらゆる階層の人が、ある意味での「外交」の衝に当たるといふ時代に入っていると言えるのである。

もとより外交というものは、終局的には人間と人間の対話ないし交渉という形で行われることが多い。もちろん、広い意味でのパブリック・リレーションズ、すなわち、多様なマス・メディアを通じて、個人が外交を行うこともないわけではない。しかしその場合でも、終局的には、外交の主体はやはり人間、個人であり、外交は個人から出発するものである。その意味では、個人のもつ能力・資質、あるいは可能性といわれるものが、外交にとつても基本的な要件であることは当然と言えよう。ましてや今日のような世界情勢のなかでは、個人の資質のもつ比重は、いっそう大きくなっているとみられる。

日本人の国民性は外交が不得手

さて、このような時代において、日本人の外交的な資質はどうであろうか。外交に携わる者の要件を考えると、日本においては、非常に特異な問題がある。むしろ、国際的なハンディキャップと言えべきかもしれない。

しばしば言われるように、日本は単一民族国家であり、したがって、ヨーロッパのような多数異民族国家と違い、特に言葉で説明したり話したりしなくとも、心情的に、いわゆる「腹芸」によって、お互い容易に理解し合うという習慣がある。日本人同士の意思疎通は円滑にいくが、このことは逆に、多数異民族国家からなるヨーロッパなどにくらべれば、外交ということについて、個人が訓練されていないことにつながる。

こうした歴史的・風土的な性格に加えて、日本の場合、アジアで唯一の先進国であり、しかも海に囲まれて孤立しているという地理的条件は、外に向かつて孤立した国民性をつくりがちである。これらの特性から、日本人はどうしても、自分の主張を一方的に押しこめてきて、相手の立場を理解し、あるいは、全体の利益のなかで自分の利益を図るという思考方式は、わりあい不得手だと言わざるを得ない。

ナシヨナリスムの限界がみえた

従来の外交のあり方は、当然 ナシヨナリズム、すなわち国益に立脚して行われてきた。しかし、戦後数多くの国際機関がつくられ、そこでは、ナシヨナリズムを超えた立場で、国際間の利害関係を調整していこうという姿勢が貫かれてきた。つまり「水際止まりの外交」を、もう少し国際的な範囲にまで広げていこ

うという努力が押し進められた。単なる
国益追求型とは異なった、戦後外交の流
れをそこに見取ることができ、このよ
うな趨勢からみると、外交は現在一
つの過渡期にあると言いうことができよう。

従来は、米ソ二大超大国の動きを軸に
した国際政治が進められた。しかし、最
近の世界情勢をみるに、こうした流れは
急速に変化を遂げ、多極化の傾向が顕著
である。それは単に政治のみならず、他
のあらゆる面、経済・社会・イデオロギ
ー、さらに技術においても多極化の現象
は顕著である。

さらに従来、国際社会の基本的な構図
であった東西問題に対して、新たに南北
問題がもう一つの軸として、クローズ・
アップされてきた。狭い地球で、富の偏
在がますます激しくなっていくかざるを得
ないという情勢が続く限り、南北問題は、
今後の外交における大きな課題となるだ
ろう。

一方、多極化のもう一側面として、あ
る意味での「地域主義」が生じている。
ECがそのよい例である。ECは地域主
義とはいえ、域内の交流を全く自由にす
るとともに、域外に対しても保護主義的
な主体とはならず、自由な交流を行う
ことをモットーにつくられた。にもかか
らず現実には、域内においても依然と
して保護主義的な面が強固に温存され、
ましてや域外に対しては、初期の理想に
反して、地域保護主義的な主体となる傾
向が、かなり明確に現れてきている。

このような現状に基づいて考えるなら
ば、いまや世界は、従来のナシヨナリス
ムというものの限界が、はつきり見えて
きたと言えるだろう。このことは、外交
のあり方、そして外交に携わる人間の要
件をおのずと示唆している。

よき世界人であることがよき日本人

はじめに戻って、これからの外交に携
わる人間の資質を考えてみたい。ナシヨ
ナリスムがもはや現実性をもちえなくな
った今日、われわれが抱えている問題を、
今後解決に向かって前進させるためには、
世界は一つの共同体であるという意識に
立脚し、世界全体が相互依存関係にある
という認識をもって、従来の外交観念、
すなわち国益追求型の外交観念を切り替
えていかざるを得ない。

でも、あくまでも日本人の立場に固執す
るということでは、もはや外交の意味が
ない時期を迎えている。したがって、外
交に携わる者は、一つの共同体のなかに
生きているという共存意識をもちつつ、
よき日本人であることが同時に、よき世
界人であるという認識をもたねばならな
い。

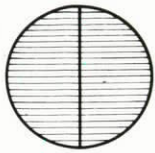
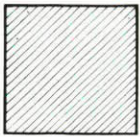
そのためには、あらゆる面において日
本というものの理解を深め、日本の進
むべき方向について明確な認識をもつと
ともに、将来の世界において、日本が貢
献しうる可能性についてのビジョンをも

つこと、つまり、世界の現状と将来にわ
たつての確かな認識と、明敏な洞察力を
もつことが必要であり、これが外交に携
わる者の基礎的な要件となる。具体的
な外交の展開においては、ナシヨナリス
ムの限界を心得つつ、日本のナシヨナリス
ムと、共同体である世界全体の利益の調
和を図っていくことが、外交に当たる人
間の責務である。

二十一世紀に向かって

結論的に言えば、日本を二十一世紀に
最も適合した国家にするためには、どの
ようにすべきであるかを考え、二十一世
紀の世界を平和なものとするために、日
本はどのような貢献をなし得るかとい
う意識をもって、外交に携わるべきである。
つまり、考え方と行動において日本人
あるいは日本の個人としての立場が、即
ち世界という一つの共同体のなかの個人と
しての立場に通ずることが、二十一世紀
に向かって意義ある外交を行い得るた
めの基本的な条件である。

人類社会という共同体に生きる個人と
して、政治・経済・文化・社会のあらゆる
面において、世界を改良していく意欲
と実行力をもった人間こそ、二十一世紀
に向かって外交を担い得るのであり、言
い換えれば、このような資質を備えるべ
く努力することが、外交における人間の
条件と言えるであろう。



Yes, but... と No, but...

かわい さぶろう
河合 三良

(国際開発センター理事長・大来佐武郎部会)



カラジヤス輸出回廊

海外の開発調査の仕事に関係してからまだ僅か五年を過ぎたばかりである。僅か五年余ではあるが、いろいろな調査があった。特に印象の深かったのは、昨年(五十四年)行われたブラジルのカラジヤス輸出回廊の開発予備調査である。これを特に予備調査と呼ぶのは、民間ベースの調査であった昨年の調査に対して、来年度この予備調査を基礎とした本調査が政府ベースで行われることが予想されるからである。

輸出回廊というのは、ブラジルの重要

な開発戦略のひとつである。ブラジルは、東西と南北の最も広い所を比較すると東西の方が長い。これはおそらく大方の予想に反すると思われる。そのため、奥地の一次産品を港まで輸送して輸出に回すためには、その開発、輸送、加工、港湾等総合的な開発戦略をたてる必要がある。

これを輸出回廊(export corridor)と呼ぶ。従来も、パラナ州のパラナグア港を輸出港とするパラナ大豆輸出回廊、中部のゴイアス、ミナスジェライスの農産物を開発し、将来これをエスピリトサント州の港湾から積み出そうという三州輸出回廊、最南部のリオグランデドスル州から農産物を積み出すリオグランデドスル輸出回廊等のアイデアがあり、それぞれその整備が進められている。

最近特に注目を浴びているのが、前記のカラジヤス輸出回廊である。カラジヤス輸出回廊の中心は、何といても埋蔵量一八〇億トンといわれるカラジヤス鉄鉱山である。その埋蔵量は、自由世界のこれから一〇〇年間の鉄鉱石需要を優にまかなうに足りるといわれる。この鉄鉱石は、マラニオン州の首都サンルイス港から約九〇〇キロの奥地にある。サンルイスは自然水深二八メートルの深水港であり、現在ブラジルの政府関係会社であるCVRD社(リオ・ドッセ社)がその間を八八〇キロの長い鉄道で結ぶべく敷設工事を進めている。すでに半分くらいは路床の工事を完了しており、一九八三年には鉄鉱石を積み出す予定である。

豊かな鉱・農・林産資源

カラジヤス鉄鉱山の周囲にはいろいろな鉱物が産出される。銅、マンガン、ニッケル、ボーキサイト、金等である。特に銅とマンガンの埋蔵量は相当あるといわれている。また、鉄鉱山とサンルイスとの中間くらいから少し北にあたる所には、パラゴミナスのボーキサイト鉱山がある。埋蔵量一億トンといわれる。

昨年の予備調査は、これらの鉱物資源の他、膨大な森林資源と農業生産の可能性についても行われた。港への時間距離も考慮に入れて、それぞれ約一〇〇〇万ヘクタールの開発可能地域が想定された。それは、航空写真からの分析に基づき、標高、地質、土壌、植生、水系、降雨量、気温等各種の要素を基礎としてはじき出したものである。森林資源からは、木材、パルプ、チップ、木炭等の生産が考えられ、農業生産物としては水稲、砂糖キビ、マンジヨカ、デンデオイル等が考えられる。砂糖キビ、マンジヨカを原料としてアルコールの生産も予想される。特に最近では木材からアルコール、コークスの生産が研究されている。

この地域はまた水力資源にも恵まれている。トカンチンス川中流、ベレンから約三〇〇キロのツクルイには、現在エレクトロプラスが最高出力七五〇〇万ワットの発電所を建設中である。これはイタイプー、グランド・クーリー、グリに次ぐ世界第四位の能力を持つもので、ダムの堤

頂は三・五段、貯水面積二二六〇平方メートルに及ぶものである。この建設は、フランスの技術と資金の協力の下に行われている。

前記の鉱・農・林産資源と、鉄道・港湾による輸送・輸出、水力による電力エネルギー、さらに東北ブラジルの労働力が統合されれば、巨大な経済活動が起る可能性のあることはいうまでもない。これらの開発に必要な資金量は膨大である。一九八三年から輸出を予想される鉄鉱山（すでに開発中）とそれを輸送する鉄道・港湾の建設に要する費用を合せて、約三〇億ドルの投資が必要といわれる。その他の関係開発を含めれば、その必要量は巨大なものとなろう。

国際的な協力を求めて

今、ブラジルは大きな国際債務の累積と、激しいインフレに悩んでいる。債務累積は五〇〇億ドルを遙かに越したといわれているし、インフレはこの二、三カ月若干下向きになってはいるが、それでも一〇〇パーセントを少し越す三桁インフレである。その原因の最大のものが石油の値上りによることはいうまでもない。今ブラジルの輸入している石油は、ブラジル全消費の八〇パーセントを越え、その輸入代金は七九年には六四億ドルに上る。これに対して、現在政府は新規油田の発見に大きな労力を傾けるとともに、代替燃料としてのアルコールの増産に、

一所懸命である。

すでにアルコール一〇〇パーセントの自動車を本年二五万台生産し、来年度には三五〜四〇万台を生産する予定であるといわれる。

このような石油に対する直接の対策と合せて、長期政策として重要な役割を持つのが輸出回廊政策による一次産品もしくは半加工品の輸出促進である。現在ブラジル政府がカラジャス輸出回廊に与えている優先順位は極めて高い。政府内部にカラジャス開発のための特別機関を作り、関係各省庁の首脳を集めて政府内部の調整を図るべく努力している。またカラジャス開発については、外国資本の参加を特に歓迎し、それにいろいろな特権を与えることを考えているともいわれる。そして、日本と欧州に、この開発に積極的に参加するよう強く呼びかけている。

YESのタイミング

国際的な開発協力に対する先進諸国の態度はいろいろである。日本はどうかという、はじめはまず極めて慎重な態度をとる。そして検討に検討を重ねた末、結論を出す。これは、日本の国内における意思決定方法と同じである。いわゆるコンセンサス方式で、関係者のコンセンサスが出来るまではYESを出さない。いわば、はじめは否定的態度で叩き叩いた上で結論を出す。いってみれば、はじめはNOと言って、その後but……

と拾い上げる。No・but方式とでもいうべきか。これに対して欧州の国々は少し違う。一番極端なのはフランスだといわれる。大きなプロジェクトがあると、まず積極的な態度をとる。日本がまずNOで始まるのと逆である。まず前向きにとりかかって、とりあえずひもをつけてから徐々に検討にかかる。場合によっては大統領が電話をかけてきたり、飛行機でとんで来たりもする。日本とは逆にYes・butの方式である。

それぞれのやり方にはもちろん一得一失がある。場合によってその対処の仕方が異なるのは当然である。しかし日本の場合は、おおむねNo・but方式が多いといわれる。その結果、結論に間違いは少なく、いったん約束すればあとは誠実に手際良くスムーズに事が運ぶ。その代り約束するまでに時間がかかる。これと反対の対応をすれば始まりは早い。しかし後でひっくり返る恐れも充分にある。Yes・but方式の弱点でもあるが、しかしプロジェクトをつかむのは早い。どちらでなければいけないとは一概にはいえない。しかし、上記のカラジャスの場合について考えると、あまり慎重に扱いきざしと時機に遅れるおそれが大きい。カラジャスの場合は、日本が総合開発調査を実施するという巡り合せになってきている。このような場合には、チャンスを生かしてYes・but方式も含めて対処することが考えられても良いのではないかと思うが、どうであろうか？

コンペティブルな国際化を

——企業外交論——

こばやし よう た ろ う

小林 陽太郎

(富士ゼロックス社長・大来佐武郎部会)



「外交」をどう考えるか

戦後の三十年間、日本および日本人は、あるいは日本の企業は、先進諸国に追いつき追い越せをスローガンに、懸命の努力を重ねてきたが、現在、その目標としてきた国際的な水準に、うぬぼれでなく、ほぼ到達することができた、とみてよいであろう。経済力や競争力という点についてみれば、海外の企業から称賛され、さらには驚異と警戒の目を向けられるまでになった。

しかしながら、その結果として、米国やEC諸国との貿易摩擦が過熱し、緊迫の度を増すと、オーダー・マーケットという言い方で、輸出の自主規制

を求める動きや保護主義的外圧が顕著になり、そのたびに、日本国内では「国際化」の遅々たる歩みがなげかれ、「日本に外交なし」の声も、ことさら強く聞かれるようになる。そして海外の論調には、依然として「日本株式会社」の呼称がばをきかし、日本のまとまり過ぎ、特に官民のゆ着や密着した関係が、非難的になる。

さて、「外交」というものを、他国の利益との調和をはかりつつ、自らの国益を最大化するための機能と考え、また企業や人間の国際化は、そうした機能を促進させるための補助機能、あるいは外的世界との接触度の進展と考えた場合、日本の外交や国際化が貧困であるということ、余りにもまとまりが良すぎるという海外からの批判との間には、果たしてどのような脈絡があるのか。日本の外交や国際化が、それなりに成果をあげているからこそ、日本株式会社とまで海外から注目されるのだ、と考えるところであるが、それは間違いなのか、と考え込まれる。

「適合性」のある競争力

しばしば指摘されるように、日本のまとまりの良さは、ユニークな集団主義として海外から瞠目されているが、場合によっては目前の直接的な利益にこだわり、調和をくずす独りよがりの不協和集団として、無気味にさえ映っているように思

う。恥の文化といわれ、見栄を気にする日本人にしては、予期せぬ効果をまき散らす結果になっているのかもしれない。こうした食い違いを徐々に是正し、国際社会の一員としての立場を確立していくために、日本は、いま、新しい理念のもとに外交の再構築を迫られている、と思う。

では、抜群の競争力(Competitiveness)を身につけた日本は、これからのような衣裳に着がえていくべきなのか。一言でいえば、適合力(Compatibility)あるいは適合性のある競争力ということではないだろうか。つまり、相手を打ちのめし、相手そのものを切るといった種類の競争力ではなく、共通の問題点に切りこみ、シャープに切り取ることによって、相互の問題点を浮き上がらせることで、言ってみれば、Compatible——競争相手を押しつけ、存在を危うくする状況にまで追いやるのではなく、相手の立場を認め、尊重したうえで、共存をはかりつつ競争していくことである。その意味で、いまこそ相互依存に基づくグローバルな視野のもとに、新しい秩序づくりを真剣に始めなければならぬ時である。

レーガン氏が米国の次期大統領に選出されたときにも、新聞紙上にあらわれた日本の産業人の反応には、やや自分の業界よりの発言が目だったが、私たちは基本的に日米双方の利益をマキシマムにするという視点から評価し、予想される問題を摘出し、知恵を出し合うべきであ

ろう。もし米国の新政権が「働くアメリカ」を旗印に、もう少し時間をかけて欲しい、と言うのであれば、米国が強くなること、日本にとり長期的にみてプラスになるかどうかを判断したうえで、相応の対応を考えるべきだと思われる。すべての議論が日本の内部からのみ発想され、日本をどう強化するか、といった点に目を奪われて、国際的な観点という大きな視野がなおざりにされるならば、競争にだけ強い異端児といった立場を自ら固めることになってしまいかもしれない。

求められる営業部的センス

さて、次に国家を一つの企業に置きかえてみるならば、外交に相当するのは、営業部門ということになるだろう。では、企業における営業の役割は何か。自社の商品や企業を顧客に売り込み、さらには永続的な取り引きにつなげる努力を積み重ねていくのは無論のことであるが、それだけが営業の仕事のすべてではない。忘れてならないのは、顧客がその企業なり商品に何を求め、将来的に何を期待しているのか、そうしたニーズを先取りし、企業の他の部門、例えば商品開発や技術・設計といった部門に、情報をフィードバックする任務がある、ということである。これこそ、最前線にあって、常に顧客と接している営業マンに要求される、大きな機能なのである。企業には、もちろん調査とか統計といった専門の機関が

あるが、しかし営業マンのもたらすマ情報は、統計情報からは得られぬ価値をもっていることも多い。

国家レベルの外交を、企業の営業に例えてみるなら、いまの日本の外交に求められているのは、この営業的センスではないか、ということに気づく。他国との交渉において、こちら側からの売り込みに腐心するのは当然として、相手側が何を考えているのか、日本に対して何を期待しているのか、といった現場情報を機敏に把握し、本国にフィードバックする、そして本国側の態度や意思決定、ポリシーの策定に役立てるといった感覚が、外交においても、もっと重視されているのではないかと私は思う。

己れを知って他者を知る

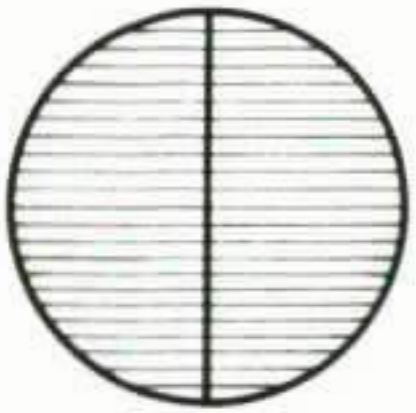
ところで、キメの細かい外交、あるいは国際化を推進しようというとき、民間の果たす役割は今後ますます大きくなるであろうが、その際、心構えとして最も必要なのは、己れを知り他を知る、という原点を明確にすることである。まず自己を鋭く見つけ、アイデンティティを明らかにすることによって、他者との違いを浮き彫りにし、他者になに何物かを、自己のうちに発見することである。

まず己れをよく知ること——日本について、日本人について、日本の文化や伝統思考様式について、あるいは今日的な社会問題について、系統だった知識と認識

をもつことである。相手の考えに合わせたり追随して、表面的に仲良くなること、が、真の国際化への道ではない。他者とは異なる自分を意識し、明快に主張し、共感のレベルにまで達することではなければならない。

そして、当然のことながら、相手について学び、知識を深めることも必要で、相手側の思考の背景に思いをめぐらし、つねに理解のレベルを深化せしめる努力を怠ってはなるまい。

大切なことは、自らをよく知ることによって他者との違いが明らかになり、他者をよく知ることによって自分の姿が鮮明に映し出されるということ、それは国家にしても個人にしても全く同じである。そして、これこそが国際化をコンペティブルに進めていくための第一歩である。



私の近況

有澤廣巳さん



■四年後を目標に

学士院長に就任されたのを機会に、有澤廣巳先生の近況をうかがった。「僕はもう年寄りだから」とお話の折々にはさまれるが、四年後の本の完成を目指して勉強中の「現役」である。

四年後の話は最後の楽しみとして、お忙しい日常をうかがってみたい。

学士院へは一週間に一度。そのほか、毎月の例会、役員会と「結構出ていかなきゃならんことが多いんですよ」。もう一カ所、一週間に一、二度出かけられるのが学士会館。ここは理事長である。敵を求めてやってくる将棋ファン、碁ファンが多く、そのため「理事長室が半分削られちゃった」とのこと。部屋を広げてというファンの希望は相変わらず強いが、「もうスペースがないもの」。

もう一つ、原子力産業会議へは、最近中国の視察団が訪れた。第二機械工業部の次官をはじめ研究所の所員たちだ。先年日本の視察団が中国へ招待され、ウラン鉱山や工場、研究所など、外国人には初公開という

施設の数々を見せてもらったお返しの意味もあるようだ。「先生も中国へ行かれましたか」との質問に、「いやあ、僕は年寄りだから」。

また今年も、有澤先生がつくられた法政大学経営学部二十五周年、そして法政大学の百周年。日頃講演などあまり引き受けられないようだが、これは「ことわるわけにはいかないから」と、つい先日イイノホールで講演された。

最大の関心事とお見受けしたのが、一昨年私家版としてつくられた『ワイマール共和国物語』の続編。「夜は原子力のこと忘れて」、一日三、四時間、資料調べに没頭する。「二、三時間では、本を読んでも仕方がないからね」とのこと。就寝は午前一時か二時。従って朝寝坊もやむをえず、起床は九時。「朝八時半からなんていう朝食会は、全部ことわってしまう」。

「あいつ、また自分の本を宣伝していやがる、なんて言われちゃいそうだなあ」と照れながら、「夜話」にしようか、「余話」にしようか、それとも「こぼれ話」にしようか、まだ決めてないんだけど」と、続編の構想を語ってくださった。

『ワイマール共和国物語』は歴史的な流れを中心に書いたが、続編は、事件中心の形にし、一つ一つの事件を詳しく書きたいとのこと。ワイマール文化の開花期に当たっていた先

生のドイツ留学時代は、「自由な開放された気分、快適に夢のように過ごした」。

戦前のゼミナールの学生、とはいっても今はもう六十代、七十代のお年寄り、四〇〇五〇人が集まった会に招かれたのも嬉しかったことの一つ。本のことも話がおよび、「米寿のお祝いをしてくれたら、続編をさしあげる」約束をしてしまった。あと四年である。（茅誠司部会）

橋口収さん



■美術エッセイを出版

公正取引委員会委員長の橋口さんが本を出されるとの噂を耳にした。本の再販価格制が廃止された折でもあり、そのあたりの消息も含めて早速うかがってみたい。

「いやあ、そう言われるんですけど、たまたま時期が重なっただけ」。本の題名は「美のフィールドワーク」、美術エッセイである。

第一部は、昭和五十二年以降にみた展覧会や絵画から十一人の作家をとりあげたエッセイ。名前をあげると、ファン・アイク、ラファエロ、レンブラント、フェルメール、フラ

ゴナール、ダヴィッド、クリムト、フォーゲラ、フィリップ・リッピ、連水御舟、あと一人は……「誰だっただかなあ」。イタリアや北欧のルネッサンスの画家から、十九世紀、二十世紀、そして日本画と範囲は広い。

美術は二十年來の趣味。西洋絵画ばかりでなく、彫刻、水墨画、やきものなど「何でも好き」。土曜日の午後など、時間のある限り展覧会を歩かれる。最近「イタリア・ルネッサンス美術展」「ベラスケスとスペイン絵画展」「茶の美術展」を観た。

良かった作品は、ポントルモの壁画「ベロッキオの彫刻」、ボッティチエリの「ケンタウルス」、スペインのスルバランの作品、そして、水墨画の梁楷のこと。ベラスケスは「歴史のなかで五本の指に入る絵描きじゃないですか」。

本の値段は、定価とせず「価二千円」と記すそう。値引きをするのもしないのも、小売店の判断でとのこと。本を特殊に考えすぎるんですよ。文化だって言うなら、ファッションだって文化なんですから。

「ものがたくさんつくられて、溢れると、正常ルート以外のところにも流れるし、値引きもする。現実には、新本も古本屋で売られているし……」。公正取引委員会の方は、「週に三、三回だと思っただけで、最低四回。平均して週五、六回の委員会が開かれる。今日は何にもない

なあ」と、資料をまとめて勉強しようと思っても、来客や外の会合があったり。本当に何も無い日は、一年に一、二回、「夏、みんなが休暇のときぐらい」とお忙しい毎日を送っておられる。

(茅誠司部会)

加治章さん



■最近「越ひかり」事情

新潟へ転勤して、はや二年、三回目の冬を迎えようとしています。

ところで今年の新潟の秋は地元の人もビックリするぐらいの異常気象。十一月に入っても小春日和が一週間も続き、その後も青空の見える日の方が多く、日本海側特有の鉛色の空など想像もつかない程の有難い異常気象の毎日。冷たい夏に続く、暖かい秋を喜びながらも、とまどっているのです。冷たい夏といえば、冷害を連想するのですが、新潟では、山間地は影響を受けたものの、平野部では、大豊作、しかも品質も非常によかったです。したがって、今や全国的におなじみになった銘柄米「越ひかり」がよりたくさん、おいしく食べられるというわけです。

この大豊作の原因、実は「越ひか

り」の品種の特徴にあるのです。「越ひかり」は寒冷地に向いた品種のため、夏、気温の上がる平野部ではあまり適さなかったのですが、今年の冷たい夏はちょうど良かったというわけです。どこで、なにが幸いするかわかりません。

ところで、都会の皆さんが、これまでおいしいおいしいと食べていた「越ひかり」の大半は、米どころ・越後平野でとれたものですが、実は味の方はもう一つといったところの「越ひかり」だったのです。つまり、本当の味のいい「越ひかり」は寒冷地で生産されたもので、したがって収量は少なく、都会の皆さんのところへはなかなかとどかないからです。でも、今年は、その本当においしい「越ひかり」がたくさんとれたのですから、本当の味を充分に楽しめるというわけです。これは、冷たい夏が教えてくれた「越ひかり」事情です。

十一月は、なにかと話題が多く、四日から上越新幹線の試運転も始まりました。雪国用に改良された車輛は、海路で到着し、トレーラーで運ばれ、試運転初日のスピードは三〇キロでした。漫才の三球・照代さんに教えたらしいネタになったでしょう。また、新潟のNHKは十一日に満四十九歳になりました。記念の九時間十五分、五百五十五分のラジオ・ワイド番組の進行役をどうにか無事

に済ませました。そして、二十一日には私も四十一歳になりました。ドイツでは「老婦人の夏」という小春日和を楽しんでいます。

(新潟 五四・二二 加藤芳郎部会)

坪内ミキ子さん



■テニスでサビ落とし

女優・母親・妻と一人三役の坪内さん。目下のところ本業は母親業のようだ。一人息子の淳君が小学校五年生。「受験なんかで結構大変なんですよ」とのこと、レギュラー番組は「理想ゲーム」のみ。

「二三年したら手が離れると思いますが」。しかし考えてみると、みんなに「あと二、三年ですよ」と言われ続けて十年。でも「手が離れるのも寂しい」。それに「八十歳を過ぎた両親のことも気になりますし」。時間が不規則になるためドラマの出演もなかなか引き受けられない。

最近の受験戦争は、「批判はしているんですけど、ある程度ルートに乗らないと、とても無理」という厳しさ。でも、「勉強しなさい」と言ったことはない。

「目(視力)だけは誇りにしていた」

が、最近、車の運転に眼鏡が必要になった。「ライトのせいでしょうって皆さん言ってくださるんですけど、乱視は老眼の始まりなんですって!」。車は大好き。でも「遠乗りはダメ、方向オンチだから」と、もっぱら地理に明るい都内を走り回っている。お正月は家族そろって熱海へ。これは十数年来の慣習。熱海には、祖父の逍遙氏が晩年を過ごした家があり、それがいま早稲田大学の寮になっている。暮れの三十一日から四、五日滞在。元旦から年賀状書きという例が多いようだ。

「理想ゲーム」の成績は……「痛いところを突かれちゃったわあ」というご返事の通り、女性軍は連敗続き。スタッツに「(勝敗)のバランスをとるようにガンバってください」なんて言われる程。成績の悪いのは「私とふみ(檀ちゃん)」。でも、こればかりは仕方がない。男性軍に「手加減しろって言った方が早いんじゃないかしら」。前にも連敗したことがあり、そのとき激励会が開かれた。とたんに成績向上。そろそろ激励会の時期なのかもしれない。

今年挑戦することはテニス。「運動神経には自信がある」はずだったが、初めての挑戦は「ボールがラケットに当たらないんですよ」。「サビついたやつたのかしら。サビを落とさなくちゃね」とテニスでリフレッシュ。

(加藤芳郎部会)



明日のエネルギーを求めて

第12回茅誠司部会東北見学会

女川原子力発電所建設所(東北電力)

仙台火力発電所あわび養殖場(東北電力)

大分、北陸の現地見学会に続き、第三回茅誠司
現地部会は東北電力・女川原子力発電所、仙台
火力発電所で開催された。昭和五十九年の運転
開始をめざして昨年着工された女川原子力発電
所(沸騰水型原子炉)は出力五、三万四千キロワ
ット、現在一割方の進捗状況である。



排気管建設予定地からは建設現場が一望のもとに

女川原子力発電所の着工までの道のりは長かつ
た。四十二年の計画発表以来、十余年の歳月を
かけて地元漁民との忍耐強い話し合いが続けら
れた。近辺の海では温排水の利用による、カキ、
アワビ、ホヤなどの養殖が盛んである。温排水
の放出には水中放流方式が採られている。

21世紀のエネルギー誠司部会

非常
EX



松島・大観荘で開かれた現地拡大部会

第十二回・茅誠司部会現地部会は、茅誠司部会長をはじめ、尾関通九、木元教子、三枝佐枝子、高原須美子、中村真乙部順子の各氏、それに四柳修国土庁地方振興局長が特別参加。小春日和に恵まれた十一月九日・十日の二日にわたり、東北電力・女川原子力発電所建設所同仙台火力発電所温排水利用あわび種苗生産大型実験場の現地見学を行ない、松島・大観荘で地元各界代表を交えて第十二回ミーティングを開催した。



女川原子力発電所PR館で、建設の進捗状況の説明を聞く。PR館からは建設現場が木の間隠れに見える。

建設中の原子力発電所、ことに炉心の建設を見学できたことは幸運であった。また、下北半島を中心に、エネルギー基地としての将来構想を持つ東北地区でのミーティングは意義深いものであった。

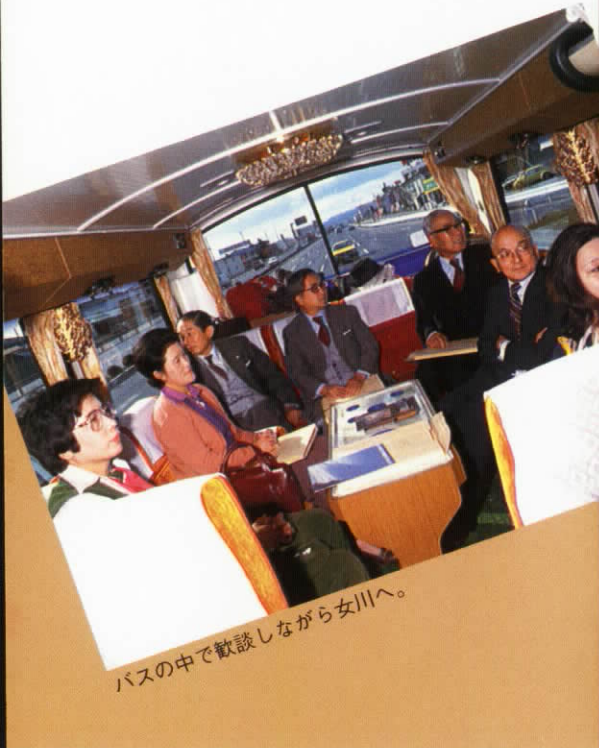
ミーティングは、「東北開発とエネルギー」をテーマに、地元から、佐藤卓郎宮城県企画部長、村上芳郎仙台市企画局長、山口格東北大学工学部長、栗冠正利東北大学医学部教授、石川潔東北石油社長、松田彰東北電力副社長、佐々木良孝県漁連専務理事、高橋由松仙台商工会議所副会頭ら、および協賛側の館内三郎東北経済連合会副会長、西岡勇東北経済連合会事務局長の参加を得て、二十一世紀に向かっての東北開発のビジョンを中心に、安全性に関する住民との合意形成のあり方、エネルギーおよび資源供給地と需要地における意識の落差をどう埋めるかなど、幅広い率直な意見が交された。

食糧、水、エネルギーなど東北地方の豊かな資源を、いかにエネルギー開発と結びつけ、二十一世紀に向かって





名利瑞巖寺を見学。



バスの中で歓談しながら女川へ。



杉木立に歴史を偲ばせる瑞巖寺の参道。

建設現場を見おろしながらの説明に熱心な質問も。



の東北開発のビジョンを描くか。国際化時代における東北開発の索引車と囁望される仙台国際貿易港、エネルギーを誘引力とした企業誘致など、地元からのビジョンも活発に提示された。低成長経済下の今日、それをどう実現するか、国の果たす役割とともに、地元

の創意の重要性も指摘された。二日間の現地部会を通じ、地域振興との関わりにおいて、エネルギーをめぐる論議は更に深まったと言えそうだ。それからもう一つ、水墨調の松島湾と瑞巖寺にみる桃山文化の絢爛さの対比に東北の歴史と風土の厚みを満喫。



建設の進む女川原子力発電所。



あわび養殖場。ここで大きさが2cmぐらいに成長すると海へ。



あわび養殖場。生まれたばかりの稚貝は屋内の水槽に。



仙台火力発電所。中国炭を積んだ船が入港中。

昭和三十四年に一号機の運転を開始した仙台火力発電所は、総出力五二万五千キロワット、三機（各一七万五千キロワット）を有し、エネルギー状況を反映して、石炭専焼から石油混焼、さらに石炭混焼の上昇という流れをたどってきた。現在、石炭混焼率は二四パーセント、これをさらに四〇パーセントに高める予定である。所内の温排水利用あわび種苗生産実験場では、採卵から稚貝飼育まで一貫生産を行う。数年の試行錯誤を経て、昭和四十六年からエゾアワビの大量生産を始め、現在出荷高は全国一、今年目標は一八〇万個という。二センチ程の稚貝が東北地方を中心に全国に出荷される。

茅誠司部会

●昭和55年11月9日

テーマ―東北開発とエネルギー

出席者―茅誠司、尾関連允、木元教

子、三枝佐枝子、高原須美子、中

村真、乙部順子

ゲスト―四柳修（国土庁地方振興局長）

地元出席者―石川潔、内田二郎、木

下藤次郎、小林智夫、佐々木良孝、

粟冠正利、佐藤卓郎、重光秀徳、

高橋由松、館内三郎、中野章、西

岡勇、松田彰、村上芳郎、山口格

□ポテンシャル

東北は全国の面積、水資源の二割を有する未来に向かって開かれた天地であり、切り拓かれるべき可能性を秘めている。しかし、現実には、工業生産額は全国のわずか四・五％、所得は全国平均（一〇〇）の八二・三％、一人当たり工業生産額は同六五％に過ぎず、可住地面積当たりの公共投資も全国平均の六五％に過ぎない。このことは、言い換えれば、東北地方には社会資本のストックが不足しているということだ。

戦後の東北開発は大きく三期に分けられる。まず最初は河川総合開発が推進された。全国的に治山治水が叫ばれた時代である。次に資源拠点開発が行われ、東北開発株式会社で作られた。四十年代に入ると交通ネ

ットワークの時代。東北縦貫自動車道、東北新幹線が着工された。

□東北の将来

ところが、石油ショックを契機として日本は低成長時代に突入した。そのため、労働力・水・土地があるだけでは工場は進出して来ない。そこで解決策として、対アジア拠点を求める欧米企業の誘致が考えられよう。そのためには資源のみでなく、新たな魅力を付け加える必要がある。

その一つのビジョンが、仙台国際貿易港である。これを足掛かりに、プロジェクトチームをつくって、海外へ積極的に働きかける努力が必要になろう。実はサンフランシスコまでの距離は仙台が一番近い。

もう一つは地場産業の育成・振興である。地場産業といっても、伝統産業とイコールではない。むしろ、今後開発してゆくべき産業といった意味である。そのためには東北大学をはじめ地元研究教育機関の協力が不可欠であるといえよう。実際問題として、いままで大学で培われてきた技術が地元有効に利用されていないのである。磁気テープ材料にして、磁気ヘッドの画期的な設置法、

アモルファス金属の研究も東北大学が先鞭をつけたにもかかわらず地元根付いていない。一方、そのような最新技術だけではなく、特殊業種の定着ということも考えられる。また、東北をエネルギー基地とする計画も

ある。いままで東北は日本の食料基地であった。しかし今後は下北を中心としてエネルギーの供給地となるだろう。これを東北開発にいかにかすが今後の課題である。

□地域とエネルギー

東北には福島・新潟という全国有数の発電所があるが、そこでつくられた電力は、東京・関東に送られてゆく。

かつて東北電力は水力発電と安い石油による火力発電で電力料金は東京電力に比べて安かったが、五十五年春の料金改正で逆に東北電力の方が高くなってしまった。加えて、住民のいやがる原子力発電所を東北に建設しておきながら、大宮以南の反対運動により、いつまでも新幹線が開通しないことも東京住民のエゴイズムとして映る。これは住民感情として極めて自然である。

現在原子力発電所でもっとも重大な関心をもたれているものに、安全性の問題がある。もともと、安全性には工学的安全と医学的安全があり、工学的安全には問題がない。つまり一般的に安全性といわれているものは医学的のもので、その大部分は心理的不安である。そして底流は科学的問題というよりは社会的選択と考えられる。その中でジャーナリストの占める位置は極めて大きい。例えば漁業者の立場からいえば、原子力発電所に反対なのは、大事故の想定だ

けてなく、かつての水銀問題のように、たとえごく微量で人体に全く影響がないとしても、ひとたびそれが報道されるとその海域で獲れた魚の商品価値がなくなってしまうのが怖いという声につながる。

安全性は心の問題でもある。地元住民の不安をやわらげるには神経質すぎるほどの対策と誠心誠意住民と対話する努力こそ必要である。たとえば、原子力船むつの事故の時、土地の人とともに放射線測定器をもって船上で計測し、納得してもらった。女川の場合も、たとえば原子炉が未設置の現在の自然放射能を地元の人々にわかってもらって、発電所ができた後の値と比べてもらう。そのためにぜひ、地元中学・高校の理科の先生に放射能を計る測定器を贈るくらいのことをすべきであろう。

このように開発を行うと、必ずつき当たるのが環境とのかねあいである。例えば地熱発電所では、国立・国定公園内に立地適地があっても開発が限定される。加えて、もう少し範囲の狭い健康権も今後開発するにあたって配慮すべき権利として認められてくるであろう。

松島でのミーティングは数多くの話題と問題が討論され、予定を大幅に過ぎて終了した。

大来佐武郎部会

●昭和55年11月6日

テーマ「外務大臣の経験から」

出席者 大来佐武郎、河合三良、北

原秀雄、小林陽太郎、滝田実、松

山幸雄、ロベール・J・パロン

大来佐武郎部会発足第一回目のミーティング。大来佐武郎氏が外務大臣時代の経験から話された。

イラン人質事件発生の日から五日後、第二次大平内閣が発足し、年末にはソビエトのアフガニスタン侵攻が起こった。それから一年、この二つの事件は日本外交に今までにない経験をもたらすことになった。

これまで日本の外交は、日米、日ソ、日中等に代表されるように、日本対他国という、二国間の図式で来た。しかし今度の二つの事件は、日がかつけない外交問題として重くのかかつてきたのである。加えて、従来、経済外交、資源外交という、いかなれば限定された実利外交であつたものが、今回は自国の利害のみならず、非常にグローバルな問題に決断を迫られるという事態になった。従来の全方位外交という手段が不可能であることを思い知らされ、軌道修正を余儀なくされたのである。そういう場合、いままで考えられなかった、経済的な利害を超えた政治的立場からの判断が外交政策に求め

られてくる。

日本の立場は、米ソのような超大国ではなく、ヨーロッパ諸国と共通する立場にある。そういう点からいえば東欧も同様であろう。超大国間の緊張が増大し、紛争なり対立が激化すると自国の安全と生存に大きく響いてくる。そのため、世界の緊張があまり高まらないように努力する必要があるだろう。同時に、これは国内政治と密接に絡まった問題である。日本はその地理的条件と、平和憲法、専守防衛、シビリアン・コントロール等を歯止めとして、守りに徹した技術体系を開発推進するなど、現在の国際情勢のもとにおける日本の防衛をどう考えるかが今後大きな課題となろう。

ところがこのような状況の中で外交を積極的に展開するにはネックがあまりにも多い。外務大臣がしばしば代わる。情報のわりに人員が少なく、収集活動にも支障をきたす。集めた情報が有効利用されておらず、現在も秘密主義がまかりとおつてい

る。外交官の引退後、その蓄積が生かされていない。国会のほうに時間をさかれ、外務をする時間がない等枚挙にいとまがない。今後の部会の進め方についても討論がなされ、中東情勢、企業・労働組合の役割、内向きな外交姿勢の問題など、いくつかのテーマが提起された。

加藤秀俊部会

●昭和55年12月4日

テーマ「祭りからみた山村の将来」

報告者 阿南透、鶴飼正樹

出席者 加藤秀俊、米山俊直、須藤護

京都北山の山村では、鞍馬の火祭りをはじめ、「松上げ」と呼ばれる、伝統的な火祭りが行なわれている。雲ヶ畑、花背八柵町、広河原、鞍馬の火祭り、および久多の花笠踊りの調査報告をスライドを交えて行ない、その後討論に入った。

これら五つの山村は京都市内に位置するものの、有力な産業が存在せず、過疎化、人口の老齢化に悩んでいる。しかし、京都中心部への時間距離によって若干様相は異なり、三十分と近距離の鞍馬では、人口の減少はみられない。

広河原を対象とした人口・産業の実態調査によって、この地域が抱える問題が示唆された。主要産業は杉、檜の柱材生産を主とする林業だが、林業を専業とするに足る山林面積を保有する林家は二、三軒程度である。しかし、農業は自家用の域を出ず、将来に望みが託せる産業はやはり林業であるが、林業従事者は四十年代、五十代に偏り、就業者の高齢化、将来の人手不足が問題である。過疎対策として、わさびやしいたけの栽培、山菜加工、あまご養殖等

地場産業育成の努力がなされているが、ほとんどが、本格的軌道にのるまでには至っていない。

「松上げ」は、愛宕信仰と結びついた「火伏せ」を祈願する祭りであり、八月二十三日、あるいは二十四日が祭礼日である。柵の上に松明を並べて字を書くものと、との木の上にとりつけられた笠（竹を骨組みとして、すすきで囲う）に火をつけた松明を投げ込むものとの、二つの形がある。雲ヶ畑の祭りは前者、花背八柵、広河原は後者である。雲ヶ畑では「若中」（十一、二、三、五歳）が祭りを担う。

八柵、広河原では、松上げ場に対する聖域意識が厳しく、八柵ではふだんから、また広河原では祭礼日には、女人禁制の場所となっている。

鞍馬は、集落全体が鞍馬寺と深く関わってきたところであり、鞍馬の社会組織には、七仲間（血縁？）と四在地（地縁組織）があり、祭りにおける役割をそれぞれ定め、また単位となつている。例えば、大物仲間は村の中心的存在であり、祭りを主導する役割をもち、神輿は在地単位でかつぐ。七仲間と四在地の関係については、今後の調査に待ちたい。

鞍馬では女性の参加が認められ、八柵、広河原とは対照的である。討論では、火祭りと焼畑や木地師との関係、都と山住みの人の関係など、この調査を深める視点が提示された。

加藤芳郎部会

●昭和55年11月27日

テーマ「エネルギー政策について

スピーカー 児玉勝臣（通産省資源エネルギー庁長官官房審議官）

出席者 加藤芳郎、大山のぶ代、川野一宇、砂川啓介、檀ふみ、坪内ミキ子、富田純孝、藁目良、水沢アキ、尾関通允、木元教子、伏見康治、村田浩、山城祥二

昨年六月に開催されたベネチア・サミットでは、主にエネルギー問題が討議された。その中で、「今後十年

間でエネルギー弾性値を約〇・六に低減し、一九九〇年までに石油依存度を四〇％程度まで下げるとともに、同年の石油消費水準を現在よりかなり下回らせること」が合意されたのである。

しかし、日本はエネルギー輸入依存度が八六％と極めて高く、そのうえ一次エネルギー供給の七二％を石油が占め、そのほとんど全量を輸入に頼っているという事情がある。また、産業部門のエネルギー消費の割合が他の先進諸国に比べて大きい。加えて、石油供給国が中東にかたよっているため、例えばホルムズ海峡が通行不能になると同地域からの輸入率約七六％に直接影響がでる。

そこでわが国は、今後「省エネルギーの推進」「輸入石油の安定的供給

の確保」「石油代替エネルギーの開発・導入の促進」を強力に行なわなくてはならない。

省エネルギーは、五十五年一月総

合エネルギー対策推進閣僚会議で七〇％以上の石油消費節減を目標として決定された。

輸入石油については、安定的な供給を確保するため、過度の中東依存から脱却し、石油備蓄を推進することとが経済安全保障の観点からも重要になってきている。昨年九月末の日本の備蓄量は官民あわせて一一一日分となった。

代替エネルギーについては、特に原子力に力を注がなくてはならない。現在、わが国の総発電設備の一・二％が原子力であるが、昭和六十五年には二・三％までにするのが目標である。その他、石炭、LNG、水力、地熱等の開発・利用の積極的な推進と、ローカルエネルギーや新エネルギーの研究に、より一層の努力が必要となる。

この後討論に入り、高速増殖炉とプルトニウム、再処理施設と核不拡散政策との関わりあいや、原子炉の耐震性、低レベル放射性廃棄物の深海投棄等についての論議から、人為ミス——ミスには「義務違反」「うっかり」「総合判断の誤まり」の三つがある——を防ぐための安全工学の必要性など幅広い話題が出された。

国際交流研究部会

●昭和55年9月25日

テーマ「説話交流の条件

スピーカー 松原秀一（慶応義塾大学文学部教授）

出席者 佐々木行、高見沢宏、遠山一、石井好子、佐賀和光、山城祥二、吉川光

距離も文化もはなれた東洋と西洋で、同一の源から発したと思われる説話が伝えられている。一方、書物や伝道師によって持ち込まれても全く広まらない物語もある。この差はどこからくるのであろうか。例として「聖アレクシウス伝」を素材に話が進められた。

「ローマの榮譽ある家に生まれた聖者は、この世の名誉や空しい知識には目もくれず、成長して妻をめとることにしたが、花嫁が到着する前に彼はシリアに逃げだしてしまう。そこで、教会で祈り、日のある間は断食をする生活が続いた。乞食となった彼は長い年月の後病気になる死んでしまう。来歴を知る者の話を司教が聞き慕地に行ってみると着物しか残っていないなかった」というのが、六世紀のシリアの写本に残っている聖アレクシウス伝の最も古い形である。これが東ローマの伝説「小屋住みのヨハネ」と融合し、アレクシウスの名がつけられた。その後ローマに伝

わり、カトリック世界へ伝播していく。その過程で、カトリックの世界観にふさわしい伝説として変形されていく。

この説話は、キリスト教の伝来によって日本にも伝えられ、「聖アレクシオの御作業」という題で、ギリシヤン文学の印刷本に入っている。水戸で没収されたこの本を復刻した姉崎嘲風は、「儒教の人がこれを見たならば、不合理なお伽噺と感じただろう」と記した。事実、この説話は全くといってよいほど広まらなかったのである。

フランス文学史では、フランス文学初期の傑作との評価を得ている。ところが、われわれ日本人には、どこが良いのか理解に苦しむのである。この話を土台に、一つの文化が異なる文化圏に受容される要件は何か、をめぐり論議が展開された。

歴史や考え方や自然も異なつたところに文化が伝播するためには、ある程度の変化はやむを得ない。本質さえ見失わなければ良いわけである。いたずらに正統を主張するのは、かえっておかしいと言えよう。しかし何が本質的かを見極めることは、極めて難しいことではあるが。

日本は他の文化を輸入し、日本的に変容させてきた。その、日本的な転換プロセスの特徴とは何か。交流を考えるうえで、一つのテーマとなる。

原発立地紛争と合意形成

山田 嗣
（政策科学研究所主任研究員）



はじめに

電源立地は一般の工場誘致とは異なり、地域社会へのインパクトが巨大であるため、地域社会にきわめて大きな社会変化をもたらす。それだけに電源立地では、地域社会の特性を充分考慮に入れ、計画を立案し、推進にあたっては、地域社会の実情を十分に配慮する必要がある。さもないといたずらに地域社会を混乱に陥し入れ、立地を困難にするばかりか、地

域の住民の中にぬぐい切れない傷跡を残すことになる。

電源立地、とりわけ原発立地が進まない理由はいくつかあるが、第一の要因は何といっても安全性問題である。第二の要因は、エネルギー問題とは直接関連のない地域社会が抱えている種々の地域問題が、原発立地の表面化に伴い顕在化し、建設が暗礁に乗り上げることである。さらに、第三の要因は、原発立地の推進側が、生活の急激な変化に対する地域住民の不安に対して、十分に信頼を得るような答えをすることができないことである。

実際に原発立地が問題になっている地域では、これらの要因が複合して一層問題を深刻化させているが、地域社会の人々の懸念は、第一の問題より、第二、第三の問題に対して向けられる。地域社会の具体的な生活実態を理解し、それに即した計画、つまり地域社会の特性に応じた計画・推進方法が採られなければ、計

画はスムーズに進められないばかりか、地域住民の間に禍根を残すことになるのである。

ここでは、政策科学研究所が行なった電源立地に関わる地域紛争に関する調査から、どこに問題があり、合意形成の手がかりは何かを探ってみる。

地域社会特性への対応

地域紛争は地域社会特性に応じて種々の様相を示す。ここでは、自然環境特性、産業特性、生活環境特性の三つの視点から、地域紛争と問題のあり方をみてみる。

自然環境特性 □ □

地域社会特性のうち、自然環境特性は計画を物理的に規定するという意味においてもっとも基本的なものである。したがって、自然環境特性として問題となる

のは、推進側と地域住民の間に、自然環境特性に関する認識のギャップや見解の相違がある場合である。

たとえば、立地地域に自然災害の経験があり、またそれに関する情報の蓄積があるような場合があげられる。このような場合、立地計画が持ち込まれると、この経験をもちとして、地域住民から問題が提起される。

大地震の経験がある地域では、当然原発施設の安全性についての疑問が反対運動の大きな論拠となる。施設がマグニチュード8というような地震に耐えられるか、地震の際予想される火災発生で熱気流が起らないようになっていくかなど、きわめて具体的な形で住民の不安が生じてくる。

また、特別な海流があったり霧がよく発生するという地域では、温排水が湾内に流出して海水温を上昇させ、霧の発生をより一層促すのではないかと、そしてたゞでさえ多い海難事故を、より一層増やしてしまうのではないかと、ひいては漁業も安心してできなくなるのではないかとといった不安が表明される。

産業特性□□

電源立地は地域の産業に重大なインパクトを与える。とくに、地域独特の気候・風土の条件によって成立している農・漁業を中心とする一次産業やいわゆる地場産業は、きわめて大きな影響を受ける。したがって、電源立地の推進主体と地域

住民との間で、産業への影響の評価をめぐって紛争が生じる。とりわけ、比較的豊かな地域では、地域紛争がこじれ、長期化する傾向がある。茅誠司部会が現地見学を行なった女川原子力発電所も同様である。女川原子力発電所は、昭和四十五年五月に電源開発調整審議会を通り、原子炉の設置許可が昭和四十五年十二月におりたが、実際に着工できたのは昭和五十四年十二月二十五日である。四十二年の計画発表から何と十二年余りかかっている。

女川原子力発電所の場合、東北電力が女川原子力発電所の適地と判定した頃は、この地域はそれほど豊かではなかったが、養殖漁業、とくにカキの養殖漁業が進むにつれて豊かになり、最盛期には、多い人で一世帯あたり一〇〇〇万円もの水揚げになったといわれている。

このようになると、当然、豊かな海を原子力発電所で汚したくないという意識は強くなる。女川原子力発電所の場合も、放射線の量はわずかであっても、検出されると、値段に影響するのではないかとという不安、さらに、やっと軌道にのった養殖漁業を壊されたくないということが反対の気持ちの根底にあったようである。

このような問題は、漁業だけに限らない。農業においても、野菜・果物などの市場作物を生産する地域では、イメージダウンなどによる商品価格の下落を問題にし、紛争がこじれていくことがある。

また、沿岸地域では、地元住民が海浜

に季節営業のレジャー施設（浜茶屋・民宿など）を営んでいる場合が多い。このような地域においては、電源立地に伴う港湾施設の設置、海面埋立てなどによる海流変化、海浜地形の変化などが大きな問題となる。

沿岸漁業が行なわれている地域では、温排水、水質汚濁等による回遊魚の生態変化、魚種の変化等が重大な問題となる。さらに、漁法（網・形態など）の違いによって問題の起こり方が異なってくる。たとえば、流し網を主とする漁民は、海流の変化や魚類の棲息区域の変化を問題とし、定置網漁法を用いる漁民は、沿岸から沖合までの広域的海流変化や魚類生態の周年変化を問題とする。

生活環境特性□□

立地計画が生活環境に与える影響が大きい時、紛争が発生する。とくに、地域の社会的伝統的な生活形態や生活習慣とふれあう時、問題は深刻化する。

水を小河川に依存している地域では、水資源涵養林の伐採により、小河川の集水能力が低下し、その結果水不足をきたすことを危惧した反対運動が起こるし、砂丘における湧水や地下水を利用している地域では、地下水の汲み上げを要する立地計画には、生活環境を破壊するとして反対運動が起こる。

また、伝統的な地域社会においては、日常生活の必要性から従来より認められてきた慣行権がある。入会権、入浜権、

水利権、里道権といったものである。これらは通常部落単位の共同の権利で、入会権などが認められている地域では、一人一人に季節ごとの採集分量が決められている場合が多い。電源立地によりその権利から受ける利益の減少が予想される場合には、地域住民は計画への反対を表明する。

たとえば地元住民がたき木、きのこ採り等のために入ることが慣行的に認められている入会地や、漁師が船を乾かしたり、魚を干したりすることが認められている入浜に通ずる道路は里道と呼ばれて通行が認められている。このような慣行権を無視して、計画を強行し、里道を原発用地内に入れたため、地域住民から住民の生活慣行権を侵害するものだとして建設が反対され、紛争化した例がある。

農村社会でも、漁村社会でも、村落共同体の抱えるいろいろな相互扶助機能がある。しかし、それが立地計画により十分機能しなくなったり、中止されたりすると、これらは、新しい地域問題として紛争のひとつの要因となる。

推進主体の問題

地域社会特性を十分に踏まえないで、立地計画を推進していることが地域紛争の要因であることを述べたが、紛争の解決を困難にしているのは、さらに推進主体の地域社会へのアプローチのまずさで

ある。

電源立地が紛争化する要因は、推進主体が「地域住民が地域社会における意志決定の主体である」という地域社会の基本理念を踏まえないことによる。地域住民に一方的な情報を押しつけたり、立地のは非が札束の厚みにすりかえられたりしたのでは、いつまでたっても、地域社会との合意形成をはかることはできない。

よく推進側は、見学会と称して、地域住民を既存の原子力発電所につれていくが、これまでのアプローチでは、「見せれば勝ちだ」式の大量動員方式で、賛成派だけを連れていき、真に地域にとつての原発の意味を考えようとする住民をないがしろにすることがあった。

すでに述べたように電源立地においては、立地計画以前から抱えている地域問題が、それを契機に顕在化してくる。とくに、地域問題が地域住民間のしこり、疎外感、不平、不満等として蓄積されている場合、そのエネルギーは深刻である。ところが、これまでのアプローチは、地域社会全体のバランスを無視し、立地推進に都合がよい当事者とだけ接触し、単純に他の当事者を切り捨ててきた。そして、地域紛争を一層深刻化させた。

また、推進主体のアプローチに計画の一貫性がないことが問題をこじらせる一つの要因となっている。

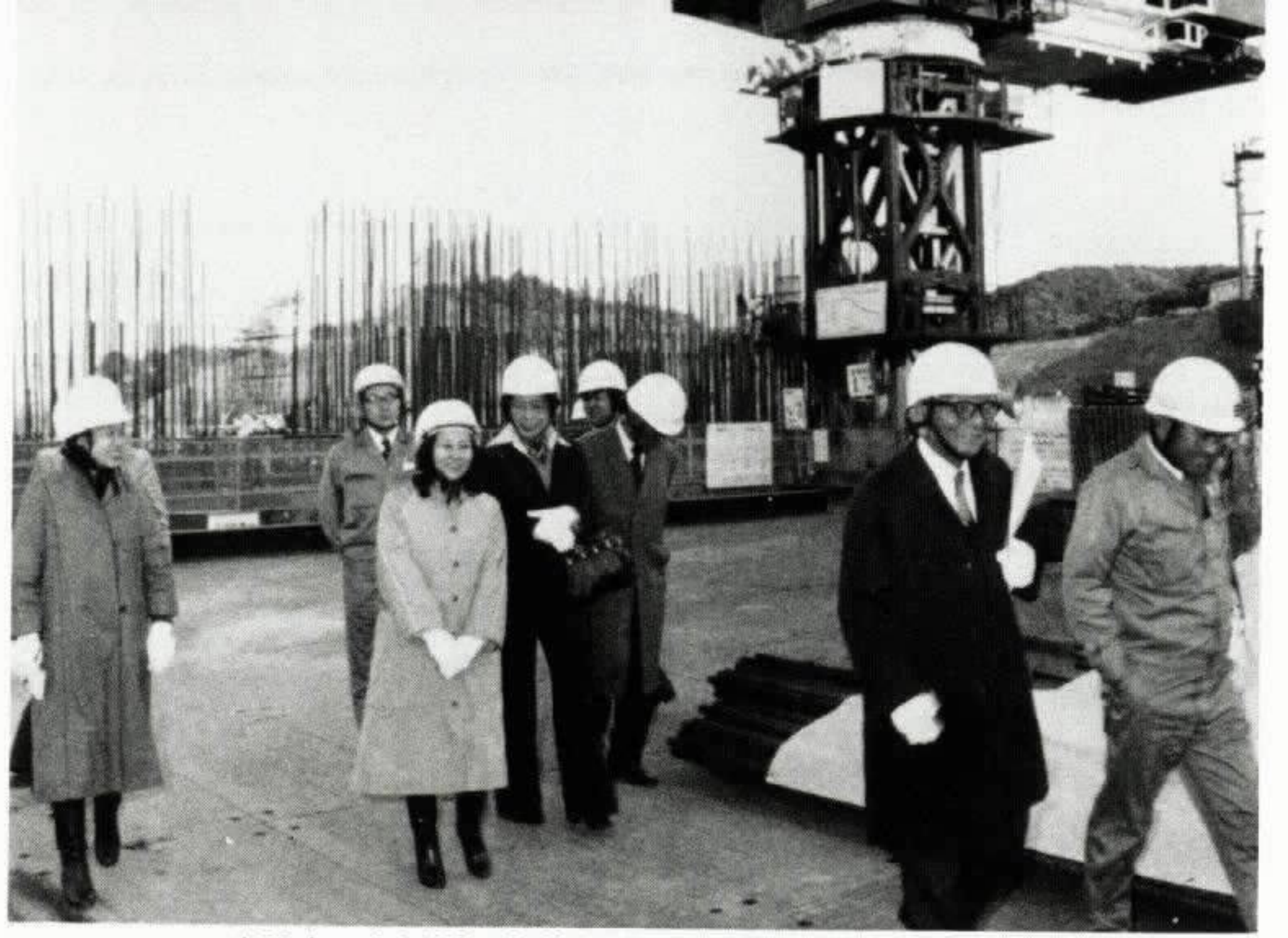
ある原発立地で、推進主体はA・B両部落から農地を買収して原発を建設する計画をたて公表した。と同時に、一部落

のみでは実行しないという約束を住民との間に交し、A・B地区の用地買収を行なった。A地区は十分な農地をもった地域とはいえず、むしろ、山が海へ迫り、わずかな平地で農業を行っていた。そのような地域であるにもかかわらず提供しうるぎりぎりまで、A地区は用地として提供したのである。しかし、B地区は交渉がうまく進まず用地買収が難行した。すると推進主体は計画を変更し、A地区の第二次用地買収を行なおうとした。これに対し、A地区住民は住民感情を無視するものであると怒り、信頼関係を著しくヒビが入り、紛争が長期化する一因となった。

もう一つの要因として、推進主体があまりに「ボス交（ボスとの交渉）」、つまり地元有力者あるいは漁協の幹部との対応だけに頼りすぎ、地域社会全体の理解あるいは、漁民全体の理解というあたりまえの手続きを無視して、紛争が長期化した例がある。

たとえば立地計画の推進が一般漁民に秘密に行なわれたある漁村地域では、漁協内部が漁協幹部を中心とする側と一般漁民を中心とする側に分かれ、やがて原発問題が具体化するなかで、賛成派と反対派の対立となって現れ、賛成派漁民による新たな漁協を結成しようとする動きも生まれ、合意形成の基盤が失われていった。

また、ある原発立地の場合、県議会、町当局にまかせきりて出発した。ところ



建設中の女川原子力発電所を見学する茅誠司部会の一行

が、肝心の漁民に対する説明会が始まったとたん、「なぜ町が、電力会社のために説明会を開くのか」ということで、手続きに対し住民の不満が爆発し、原発立地が暗礁に乗り上げた。

合意形成への道

以上のように、原発立地に伴う地域紛争は、地域特性を無視した立地計画に、推進主体のアプローチのまずさが加わって、紛争を深刻化させている。

このような状況を打開する道は何か。それは地域社会を知り、そこで骨をうずめるつもりで、地域社会の人々につきあうていくかどうにかかってくる。地域社会の人々は、そんなに難しいことはわからないかもしれない。しかし、相手が本物かどうか、本当に地域社会を考えて接触してくれている人かどうかを見抜く目だけは確かである。女川原子力発電所の建設準備本部に九年間いて地域住民との接触にあたっていた人が、「地域住民に何と言葉をかけてよいかわからなく、壁に突き当たることがありました。そのよくな時、話のできるベースは何か、それは原発問題抜きでよいかからつきあわせてほしいということでした。私もなりに、漁業とはどんなものか、またカキの養殖はどのようにやるのか、どうすれば保健所からクレームがつかないようにできるかなど、食品衛生にまでわたる細々した

問題について提案し、相談に乗り、その中で初めて対話ができる状態が生まれたのです」と語っている。

結局、合意形成の道は、人間関係を地道に築き上げた時に、はじめて成立するものである。

ある電力会社の課長は、「私は、漁民の一人娘が横浜の大学に入学した時、下宿の世話について行きました。会社からは、下宿を見つけて落ち着かせるまで帰って来るなど言われました。その時は、なぜ電力会社に入り、下宿探しをやらなくてはいけないのか考え込みましたよ」と笑っていた。

最後になったが、原子力発電所の安全性問題の理解も、結局は信頼の問題になると思う。女川原子力発電所建設準備部長であった平沢哲夫東北電力常務もこう言っている。「原子力発電所の安全性問題、これはきわめて純粋技術的な問題のはずなんです。がね、実際にはだれが安全と言っているのかというきわめて社会的な側面が重視されるんですね。この「社会的な」というところを、「人間的な」とおきかえてもいいだろう。

昨年、茅誠司部会・北陸現地見学会に参加したフォーラム・メンバーの共通の印象は、技術は人であるということのようであった。高原須美子さんは、動燃の島史朗理事と敦賀発電所の板倉哲郎所長の話聞き、「お二人の説明を伺って、私は設備でなく人間を信頼しようという気持ち深めたのでした。どんなに立派で

近代的な設備であっても、情熱、自信、人格に裏付けられた現場の方々がおられなかったら、私は不安感を抱いたまま、東京へ戻ってきたのではないかと思えます」と述懐している。

もちろん、人間的信頼関係だけで安全が保たれるわけではない。平沢東北電力常務も、「国や自治体、電力会社などの姿勢が常に問われている。絶対に問題を起さないようにする姿勢が必要なんです」と断言している。

やはり、原子力発電所の安全性の維持を行なうと同時に、地域社会との信頼関係を確立していくことが合意形成への道であるだろう。

そのためには、推進主体が地域社会を理解し、この地域の地域問題は何か、そのためにどのような努力がなされてきたのか、地域問題を解決し、新たな発展をはかってゆくためには、今後、どのような努力をすればよいかを本気で考えることである。

女川現地見学会で、松田彰東北電力副社長は、「女川原子力発電所は東北の明日を信じる男達の夢が作り上げた」と言った。

地域社会に根ざし、本気で地域の発展を願う時、合意形成への道は開けてくるのである。

省エネルギー考

環境性・経済性・価値観

日本エネルギー経済研究所

完全電化の台所

かつて、アメリカのさる国立研究所に数か月滞在した時のこと、その宿舍のキッチンにはガスレンジがなく、電気コンロを組みこんだレンジが備わっており、暖房も電気ヒーターで調節できるようになっていた。電気は高いという先入観と、発電効率は三分の一などという日頃鍛えた知識があるものだから、アメリカとは何と無駄なことをする国かと驚いたものである。帰って来てこの話を友人にしたら、日本だって、ガスのないマンションはいくらでもありますよといわれて、またびっくりした。

この二つの例には根本的に考え方のちがいがあつた。アメリカの場合、この研究所は町らしきものから数十キロも離れて孤立しており、しかも広大な敷地の中をガス管を引き回すなど、それ自体効率が悪い。電気はどうせ引かねばならないのだからいっそ電気にしてしまえ、とこれは推測であつて確かめたわけではない。アメリカというのは、大量輸送手段が発達しないのもしか、広すぎるが故に、所詮無駄使いせざるを得ない国である。研究所内の台所が完全電化なものもベストならずともベターな解かも知れないのである。この点に関してのみいえば日本などまさしく「スモール・イズ・ビューティフル」であろう。

ひるがえって日本の例は、ガス災害を

まず防ごうとしたという。しからば漏電対策は万全であるか、もし大停電が起つたら、などと聞くのは止めよう。他にも理由はあるかも知れない。

いずれにしてもそれぞれに選択の理由はある。しかし理由があればあるだけ物事は高くつくし、効率が落ちることの例と見ていただければ良い。余談ながら、トロ火で長時間などという芸当は電気コンロでは至難の技であると実感した。

石炭利用における効率

七、八年前のこと、石炭を発電用燃料として使う場合の経済性を検討したことがあつた。石炭直接燃焼（いわゆる生焚き）、ガス化、液化、メタノール化などの諸ルートについてコストの積み上げをした。送電端における発電コストは、排煙脱硫、脱硝を設置してもなお石炭生焚き火力がすぐれていた。技術開発途上の利用ルートもあり、普及プロセスにくらべ相対的にコスト高という面もあつたが、ポイントには石炭の加工過程における効率であつた。ガス化、シフト反応、合成という一連のプロセスで約半分に近いエネルギーの失われるメタノールルートは、最もコスト高となつたが、これは、同一の出力に対し、倍近い石炭の投入が必要だからである。

ガス化コンバインドサイクルは、将来高温ガスタービンの技術進歩があつて、発電効率が格段に向上した時点ではじめ

て、石炭生焚きに対抗できるコストになるという結果も得られた。二度の石油危機を経て、プラントコスト等はかなり変わってしまったが、相対的な評価の順位は未だに信頼がおけると自負している。

物は加工すればするだけ、たとえ移動するだけでも、なにがしかのエネルギーを必要とするものであり、特に熱エネルギー源については、なるべく加工しないで熱エネルギーを熱エネルギーとして利用するのが原点であることをこのスタディは教えてくれた。もちろん、化学品の合成や、輸送用液体燃料の製造など、より付加価値の高い製品を作り出す場合は必然的に加工が必要となり、それはそれなりに報いられるはずである。

石炭復活が叫ばれている昨今、新規発電用の石炭利用は、在来型の直接燃焼がほとんどであるのは、ガス化・液化等の技術開発の遅れもあるが、石炭から出発したトータル効率が大きく経済性を左右しているからである。しかし、大都市周辺のように、環境上の制約から、大量の石炭の持ちこみが難しい地点では、何らかの対策が必要であり、それなりのコスト負担増、効率の悪化は覚悟しなければならぬ。

硫黄分も 発電効率に寄与？

またまた古い話で恐縮である。硫黄酸化物の削減対策で日本中が大騒ぎしていた頃、重油からの低硫黄化ルートの比較

検討をした。間脱、直脱、ガス化脱硫などの対策に伍して、重油―発電―排煙脱硫のルートが最も安価と出た。当時、発電所における排煙脱硫は今日ほど普及しておらず、一、二検討中という時代であった。この結果をみて、ある電力関係の方から、電力会社に排煙をやらせる意図なのかとしかられたことを覚えている。こちらにはその意図たるや微塵もなく、素直に計算したまでであり、そのようにご理解願った次第である。

重油中の硫黄分も燃えることによつて燃焼熱を出し、これはボイラ水に伝えられて蒸気に変え、やはりながしき発電に寄与しているのである。一方、脱硫は、炭化水素の分子に組み込まれた硫黄原子の結合エネルギーを断ち切るために、大きなエネルギーを外から加えてやらねばならない。切られた結合の手を充足するために、水素を製造しあてがってやらねばならない。間脱から直脱へと、脱硫の度を増すごとに、液収率も、燃料および水素をも含めたトータルのエネルギー収率も落ちてゆく。ひきかえて、高硫黄重油の燃焼から発生した亜硫酸ガスは大したエネルギーの投入なく石こうに変えられる。石炭火力の先の例と同じくここでもなるべく加工しないこと、燃えるものは皆燃やして、熱を利用しつくしたあとで排煙処理するのがベストという実例でもある。

もちろん、ここにも石灰の投入、石こうの処理という難問も控えているから、

そう簡単に理屈通りにはいかない。ここにも環境性と経済性のトレードオフがある。

地球を暖める 温風暖房

日本古来のコタツはホームヒーティングの中では抜群の効率を誇る。しかしあまりにローカル過ぎるため、一度入ったらなかなか出られない、行動を緩慢にする欠点がある。灯油やガスストーブは、燃焼排ガスが直接的に部屋を暖めるので、これも効率は良いはずだ。ただ室内の温度分布が不均一になりがちであり、ストーブを焚きながら扇風機を回すという珍現象が見られる。

温風暖房は室内清浄、温度制御性など確かにすぐれている。確かに一酸化炭素中毒や酸欠のおそれはない。しかし、燃焼ガスによる直接暖房でないため、熱交換におけるロスが生ずる。言いかえれば、それだけ外に熱が排出されている。しかも快適な温度調節は、昼夜連続運転となるため、寝るときにはまず必ず消すであろう灯油ストーブにくらべ、灯油消費量は三〜四倍になるといふ説もある。ここにも快適さ、環境性と経済性のトレードオフがある。

エネルギー効率の評価 基準を何に求めるか？

以上にあげたいいくつかの例に見られるように、エネルギー利用における効率に

は、環境性と経済性の関係がつきまとう。加えて、快適さをどこまで追求するか、生活水準の向上をどこまでねらうかなど価値観の問題とも裏腹である。折角ここまで引き上げた生活水準をあえて引き下げることはない、これは先進国の利得であり、省エネルギーはあくまで利用効率の改善に着目すべきだという人もいる。いざという時困るから、今のうちは効率を上げない方がよい、削り代があった方がよいと極論する人もいる。とはいえ、効率の分母と分子を何に決めるか、これもまた千差万別である。

省エネルギーほど世代感覚の違うものはないという意見も多い。卑近な例でいえば、鉛筆はナイフで削るものという意識の世代も健在であれば、鉛筆削りこそ鉛筆を削るもの、ナイフで削るなんて知らないし削れない、という世代も充分に育っている。

一つ一つの機器、エネルギーシステムの効率向上を目指すのは当然として、もっとマクロなシステムとしての利用効率の向上のためには、価値観のコンセンサスを作らないと省エネルギーも壁をぶち破れない感じがする。

(K・O)

座談会

わが師

わが友

わが時間

新春合わせて二百四十四歳

●出席者

茅誠司 かや せい じ

(東京大学名誉教授・学士院会員・茅誠司部会)

東畑精一 とう はた せい いち

(東京大学名誉教授・21世紀フォーラム発起人)

松本重治 まつもと しげ はる

(国際文化会館理事長・松本重治部会)

●十九世紀と二十一世紀

東畑 私は、最初にお断りしなきゃならぬのですが、「21世紀フォーラム」の部会報告など見ると、茅、松本なんていう長老が熱心にやっているんだから、こんな若い者が出たって仕方ないと思って欠

席してたんですが……(笑い)。

——今年はいよいよ東畑部会を……。

東畑 あれを見てるとな、もうこれで十分だ、年寄りとは、思っ。失敬しました。

——機先を制せられました(笑い)。

ところで今年、八一年に入るわけですが、諸先生のお力添えを得て、フォーラム活動も早くも四年目を迎えます。きよ

うは、フォーラム活動のご提案者でもあ

り、日本の代表的な長老とでも申し上げるべきお三方にお集りいただき、お正月でもあり、気軽にお話し合い願おうという趣旨です。題して「長寿の経験」……。

松本 長寿の経験？

——日本も高齢化社会の真只中に突入しつつあり、先生方のご経験をぜひ若い人たちに伝えたいと……。

松本 長寿かね、みんな。

茅 長寿の経験者、天野貞祐とか松田竹千代。少しちがうようだね、われわれの場合は(笑い)。

——茅先生は明治三十一年十二月のお生まれ……。

茅 八十二歳になる。

東畑 私よりちょっと上ですよ。安心してらんだがね。



松本重治氏



東畑精一氏



茅誠司氏

茅 お二人は同じぐらいですか。

松本 十月月ぐらいはちがう。

東畑 ぼくがお二人の比例中項だね。

——東畑先生が明治三十二年二月、松本先生が明治三十二年十月のお生まれ。ただ、お三方が共通しておられることは十九世紀に呱呱の声をあげられた(笑い)。

東畑 十九世紀の遺物だね。ほんとうにそういう感じがするな。

——とんでもありません。そういう先生方に二十世紀の問題を考えていただいているところに私たちの幸せがあると思つています。

茅 このごろどこへ行っても、たとえば

物理などやった連中では、私が一番年寄りになつちやつた。

松本 そうだなあ。朝永(振一郎)さんも亡くなられたし。

東畑 お互い同士はそんなに年寄りと思わないがね、妙なもので。一緒にやつてるからか。

——お三方それぞれの最初の出会いというのは、いつごろでしょうか。

茅 私は東畑さんとはね、文部省の清水勤二という科学教育局長と一緒に、紙の割当てをもらいに東畑さんのところへ行つたことがある。

東畑 ああ、終戦後ですな。

茅 二十二年か三年だな。そのとき、こんな偉い人がおれと同じ年齢かなあと思つてびっくりした。

東畑 そりや紙のせいですよ(笑い)。紙の委員というのは怖かった。一、二度そ

ういうことありましたな。

——松本先生と東畑先生とは……。

松本 戦後だなあ。

東畑 いや、それは戦前だよ。何かやつたらう、政治……。

松本 経済研究所？

東畑 そうそう。

松本 しかし、東畑さんはそこへ来られたことある？

東畑 うん。

松本 そうかな。

東畑 何か知らんけども、あんたとも相当古いんだね。

松本 五十年近いか。

——半世紀ですね。

東畑 松本さんの奥さんとも相当古い。

松本 ああ、そうか。はじめて軽井沢に行つたのがたしか昭和六年くらい……。

東畑 そんなもんだ。雨宮敬次郎の一族で市村さんというのが軽井沢の膨大な土地を友人たちと拓くことになった。それで松本さんだとか、我妻(栄)だとか、

蠟山(政道)だとかみんな行つちやつて、ぼくにも入れというので行つてみたんですけど……。

松本 東畑さん、雷が怖いので家を建てるのは怖いなあ。

東畑 東京でしょつちゅう遭つてるし、

また遭うのはかなわんと思つて。今でもほつたらかしてあるんですわ。茅さんどうですか、ぼくの土地買つたら(笑い)。

●● 技術も経済もわかる人間を

松本 茅さんとは、たしか茅さんが東大の総長になられたときに〔国際文化会館の〕評議員をお願いしに行った。それが最初じゃなかったかと思うけど。

東畑 私が茅さんとよく話すようになったのは戦後です。吉田内閣の……。

——顧問会ですな。

東畑 よく吉田さんとこに寄ってワンワン話をするということがありました。茅さんと、自然科学では内田俊一。それで早速ぼくはお二人を利用した〔笑い〕。

それはぼくがやっていた研究所〔農業総合研究所〕で、どうも経済をやっている人間は技術を知らん、技術も経済もわかる人間が必要じゃないか、と。それがなかったから戦争にも負けただ、と。ぜひそういう人を養いたいというんで、畜産、工学、農学等を本当にやった人間を探していたんです。そのとき、たまたま、飛行機をやっていた某君はどうだ、という話がありました。その人物の鑑定をお二人にお願いした。鑑定という言葉は悪いが、たまたまその日、お二人に紅茶を一杯ごちそうするというんで、元のNHKの近くにお茶を飲むところがあ

りまして、そこに某君を呼んだ。お二人から、採れ、採れと盛んに進められた。茅 東畑さんとの間には何かいろいろとあるんです。

東畑 昭和三十一年に、農林省に農林水

産技術会議というのができた。会長になつたが、どう運営していいかわからない。技術が大事なものだということをほつきりさせたいことは確かなんです。それで農業界の長老である安藤広太郎という先生を訪ねて相談したら、君、ぜひやり給え。だけど、やるについてはこういうことを考えろ、と。つまり、農学の進歩は狭い意味の農学に由来するだけではだめで、最近では、物理学(例えば原子力)、化学(例えば微生物学)などは非常に進歩している。そこからも農業技術の発展を招来する必要がある、と。

それで、法制上、顧問のような人を五人置くことになっていたんですが、よし物理学は茅さんだということ、またそのころは総長でなく理学部長だった茅さんを口説いて議員になつてもらった。化学のほうは酒の神さん、坂口(謙一郎)が古くから友人なので頼むといってね。そんなわけで茅さんを大いに利用した。

——今の話を伺っていると、日本の社会科学はやはり科学・技術に弱かったんでしょか。

東畑 両方やる人がいなかったんだ。

茅 そうそう。

東畑 戦前は大河内正敏という人がいた。あの人は工学の人で、しかも社会・経済がわかる人だった。ああいうタイプの若い人をたくさん作りたいたいのがぼくの気持ちです。

茅 大河内正敏さんが、理化学研究所を育てた意義は大変大きいですよ。仁科さ

ん、湯川さん、朝永さんにしても、みんな理研にいた。自由な研究の雰囲気がありましたよ。戦後の大学が立ち直ったのは理研があったからだというのが私の言い方なんです。確かにその功績は大きいですが、同時に、そういう理研を経済的な面でも企業として成り立たせ、自活し、存続させるようにした大河内正敏という人の組織的才覚も大したものだと思います。

●●● みんなジャイアントだった

——ところで先生方の学生時代、大学の学生数はどれくらいでしたか。

茅 私が東北大学に入ったときは学生の数は十三人だった。

東畑 大学に毎年来るのが全体で二千人か、そんなものじゃなかったですか。数は非常に少ないです。だからエリートですよ。

茅 だから先生と生徒がすぐ友達になつた。ことに私なんか北海道へ行って教えたいときは、教室ではぼくが先生だけと外でスキーをやるときは彼らが先生。

松本 東京帝大はそういうことなかった。ぼくなんか特に法学部だから数が多くて、大講堂で三百人くらいの学生のための講義が多かったからね。小科目の方が講義は面白かった。

東畑 農学部は小さかったから、せいぜい一クラス二十五人くらい。それが法科へ行行ってびっくりしちゃった。何百人で

しょう。講義に行つても、実にやりにくい。半年間はいやでした。

松本 東畑さん、農学部というのが出来たのはいつごろですか。

東畑 それは、駒場の農学校というのがずつとありまして、高橋是清さんがアメリカの銀山に行かれる前に農学校長になられて、そのとき卒業生を「農学士」とするということになった。それで非常に

学生たちが喜んで、クラス代表みたいなのが校長宛にお礼状を出した。それを高橋さんに見せてもらったことがある。農学部と正式に言うようになったのはいつ

かな。それははっきりしませんが、高橋さんがやったのは明治二十三年か。それで一年か二年やられて、南米の銀山にだまされて行かれたんですね。

——いずれにしても、人数はそう少なかった……。

東畑 一年に百五十人も入るかな。それが五つか六つの科に分かれますからね。

獣医学科なんていうのは三年合わせても四人よりなかったこともある。学校休みますよと生徒の方が言うんだから〔笑い〕。法科は、今の松本さんの話じゃないけど、ぼくの弟が法科で、おれは三年間、大学教授と話したことないよと言ってます。

ちようどそのとき、ぼくは教授でしたから、おれと話してるとじゃなかったって冷やかしたことがある〔笑い〕。

松本 だけど、ぼくが学生のころは法学部の先生はなかなか面白かった。第一、神がかりの寛克彦先生がいたね。「いやさ



か」と言って講義をやるんだよ。それから憲法的美濃部達吉先生がいたし、上杉慎吉先生と全然違う憲法のことを聞いて、どちらも面白かったな。それから刑法の牧野英一先生といって、法の社会化では有名な人だが、この講義も面白かったね。みんなジャイアントだったね。ときどき文学部に講義を盗み聞きに行ったが、社会学の建部逸吾、彼の講義も一流だったね。コントの社会学をそのまま引き写しに喋るんだよ。

実際、ウソ八百みたいな講義をする人もいたが、堂々と自信をもって講義する人間が面白かったね。実に面白かった。

茅 私は大正九年に東北大学に入ったんですよ。というのは、当時、高等学校を出た者以外は大学に入れなかったんだけど、東北大学だけは欠員があるので試験で入れた。私は東京高等工業学校、今の工業大学の前身……。

東畑 ああ、元の蔵前。

茅 うん、蔵前のポートの選手をしていた。土光敏夫君（経団連前会長）と同級ですよ。彼は機械科、ぼくは電気です。

それで東北大学の試験を受けたんだけど、これがなかなかむずかしい。志願者も大勢いてね。ぼくはビリで入った。今でもその先生が「茅、おまえはおれに一生頭が上がらないぞ」って（笑い）。

それから演習というのがあって、あれが怖かった（笑い）。小林蔵といって、今も九十三歳ぐらいで生きておられますが、当時バリバリの助教授で、力学演習を担

当しておられた。黒板に問題を出されるんですよ。一時間ぐらいしてやってきて、「茅、落書きしないで早くやれ」（笑い）。ひどくやられたもんですよ。ですから仲良くなってね。日曜なんか一緒に散歩するんですよ。そういう学生生活をして私は東京にきて非常につまんなく思った。生徒との接触がほとんどなかったですからね。

●●●●● 卒業式に出ない自由

——お三方が卒業された大正十一年、十二年といえ、いわゆる大正デモクラシーの時期ですね。たとえば就職などはほとんど心配のない時代ですか。

松本 だいたいそうでした。だが、ぼくは就職する気がなかったから、親父に電話をかけてもう一、二年勉強させてもらいたいということを書いて、結局どこにも行かなかった。それで卒業式にも行かなかったし、免状も法学部の事務局から取りに来いというまで取りに行かなかった。

茅 ぼくも取りに行かなかった。入学式も卒業式も行かなかった。

東畑 茅さん、そういえば、はなはだすみませんけど、ぼくは東大の入学式・卒業式は一度しか出ていない。姪が卒業するといつので、それで出た。それっきり。南原総長の名演説も聞いたことがなければ、茅さんのそれも聞いたことがない。まことに相すまん。

——じゃ、諸先生方は卒業式もろくに出席おられないではないですか（笑い）。

東畑 ぼくは卒業が大正十一年か、それこそ大正デモクラシーのときをこないみたいでね。卒業式もたしかそういうことは意味がないといつので、なくなっただけじゃないですか。小使い室に卒業免状がたくさん積んであったんですよ、農学部では。それをお茶を飲みに行ったときなどもらってきたり（笑い）。親父が「おまえ、いったい大学を卒業したのか」と聞くので、「卒業しました」と言うと「証拠を見せろ」と。「何もないじゃないか。せめて卒業証書ぐらい持ってこい」と親父に叱られてね。

松本 東畑さんの卒業された大正十一年というのは、学制が改革されて、七月卒業が四月に繰り上げられた年？

東畑 うん、月足らずの農学士。

松本 ぼくは大正九年九月に大学に入つて、翌年の四月にはもう二年になってたわけでしょう。それで、単位を早く取っちゃつてあとは好きなことをしようと思つていたので、一年七カ月ぐらいで二十五、六課目の試験を受けてしまった。したら二年の終りに末弘蔵太郎先生から、「早くやつても悪いことはないが、いい点はやれないよ」と言われて、あまり優は多くなかったですね。その代り、といつては何だけど、あとは一年間一回も学校に行かなかった。

東畑 農学部でもそうでしたよ。試験のとき初めて顔を見る先生がいてね（笑い）。

——なるほど、それがモクラシーということなんですね(笑い)。

東畑 そうなるんだね。調子に乗ると妙なことになる。

——東畑先生はそのまま大学院に……。

東畑 それで、ぼくは寂しくてね。というのとは当時の駒場(農学部)には、横井(時敏)先生のような偉い先生はおられたが、相談相手になってくれるような中間の人がいなかった。だから若い者が実に寂しかったな。荒涼たるもんですよ、大学としては。ただ一人例外がおった。同級生に蠟山政道さんの弟、勝次郎君という人がいて、同じ方面から通うというので通学を共にするうち、ある日おれの所に寄れと言うので寄ると、そこで政道氏を紹介された。蠟山さんは法学部の三年生で、もうそのころすでに立派な教育者でした。ぼくはいろんなことを教わって非常にありがたかった。

松本 那須(皓)先生はまだ日本に帰っておられなかったか?

東畑 ぼくが卒業してしばらくして留学から帰って来られた。さっそうたるもんでね。

松本 いや、あなたが卒業する前に帰っておられるよ、先生。

東畑 そうかな。

松本 だって、あなたの助手や助教授、

那須先生が推薦したんでしょ。

東畑 いや、一年か一年半、一介の青年でしたから。

松本 助教授にするときかな。

東畑 そうそう。珍しく農学部では卒業二年ちょっとで助教授になった。

松本 やかましい総長がいたね。

東畑 古在由直。

松本 古在さん。それでね、東畑さんの成績表を見て、「あんまり成績よくないじゃないか」と那須先生に言ったというんだ。

東畑 そうなんだ。

松本 「いや、成績は得意じゃないが、人間がいい。これから組織的な研究をやっていくにはこういう人以外にないんだから、ここはひとつ目をつぶってオーケーしてくれ」と言って通したというのが那須先生の自慢の話なんだ。

東畑 悪かったんだな(笑い)。

いや、文句をよく言いにいったんだよ。

古在さんが学部長だった。先生方がよく休んだ。某先生のごときはしょっちゅう休む。で、学生たちはみんな怒った。おれが代表になって言ったことがあるんですよ。「休むという広告は要りません。本日出席という広告にしてくれ」と。それで古在さんともワンワンやり合った。

偉いもんで、先生、それを覚えていた。助教授になったとき挨拶に私は行かなかつたんだ。ある日、教官食堂でメシ食っているとき、先生、つかつかと入って来られて私の前にポーンと座られた。もう総長でした。「挨拶も致しませんで」と私がやっていると先生、「そんなことどうでもいい。それより君、しよっちゅうブツブツ言っただけでも、五十歳はすぐ

だぞ」とやられた(笑い)。

松本 いや那須先生はよくよく言っていたよ。自分のやったことについていことはた一つ、東畑を推薦したことだと。二度も三度も聞いたことがある。

東畑 まあ、そういういい先生がおられたから今日あるを得たんで、今は友達がいいからこんな劣等格でも……、まことに茅さん、すみません。松本さん、すみません。これ、一人ぼっちだったら問題にならんわな。今ごろ三重県の田舎で、村長を引退して、シヨボシヨボ暮しているでしょう。

——いつでしたか「私の履歴書」で東畑先生、小学校時代から現在までの友人・仲間を「カラスの群れ」に例えておられましたか、お三方を「カラス」呼ばわりするのは失礼かもしれませんが、人生やはりカラスの群れでしょうか。

東畑 非常にぼくは恵まれている。友達というか、先生というか……。

●●●●● 鯛釣つても泰然自若

松本 東畑さんはドイツでシユンペーターをうんと勉強されたんだけど、あのころ蠟山(政道)さんもドイツに行っただことあるか?

東畑 いや、蠟山さんはぼくより早い。

松本 じゃこれも那須先生から聞いたのかな、東畑さんはドイツで何してるかと聞いたたら、あれはダンスに熱中しているよ、と(笑い)。

東畑 いや、ぼくは音楽はダメなんだ。運動神経が発達してないんだね。ぼくのいとこがちょうど二十人おるが、その中で、文芸というか、芸文の出来る人間はわずか一人。あとは芸文を解せずという輩。自慢ならんがね(笑い)。

——芸文からちよつと話はズレますが、お三方はそれぞれが個性の趣味をお持ちですね。茅先生は釣り……。

茅 この間も行ってきた。

——昔からですか。

茅 子供のころは相模川で鮎をやった。親父が好きでしたからね。それが、松根(宗一・茅部会メンバー)さんと知り合ったら、「茅さん、あなたは何をやってるんだ」と言うので「鮎です」と答えたら、「鮎か」とバカにされた。「松根さんは何ですか」と聞いて、「おれは鯛以外は何にもやらない。連れて行ってやろうか」と言っただけ、それで弟子入りしたんです。

東畑 松根さんって原子力の……。

茅 そうそう。あれは大した釣り人ですよ。年に五、六回、もつと行くかな。

——船もお持ちのようですね。

茅 あの人は自分のことだけじゃなくて、その近辺の釣り師に必要なことまで面倒見る。たとえばトロール網が来たらし回っているのがいたら、ちゃんと警察に連絡してそういうことをさせないようにすると、船を作るのを手助けしてやるとか。それで漁師は本当に心服してるんですね。

ぼくは二、三回一緒にやったら松根さ



んが「茅さん、あなたはまだ修業が足り
んね」と言う。「なぜだ」って聞くと、「遠
くで見ると、茅さんのは釣れたとき素
振りてわかる」と。そう言われて松根さ
んのをみると全然わからない。五十セ
ンチぐらいの釣れても同じ恰好でやっ
てる。

東畑 鯛釣っても泰然自若か(笑い)。

松本 松根さんは、ほんとにいい人だね
え。ゴルフをやっても悠々と超然、ゴル
フをやつてね。

茅 あの人は「私」ということを全然考
えないね。エネルギーのことばかりで
すよ、初めっから終りまで。ああいう人
とつき合ったのはよかったですよ。

——ある電力会社の役員の方に伺つたら
松根さんが鯛釣りにくるといって大変ら
しいですね。前の晩にエサまいとかなき
やいけないとか(笑い)、釣れたものを氷
詰めにする用意とか。それで、みなさん
に鯛を配つちやうそうですね。

茅 そうです。初めて松根さんに招ばれ
て高松へ行ったとき、四国電力の会長さ
んから奥さんまで出迎えていたいたん
ですよ。大変なものですな。それで八
洲園というのが鳴門にあつて、今の話じ
やないが、釣れたらすぐドライアイスで
送れるように準備してあるんです。

私は今治で弟と二人で二日間、百何匹
釣った。最後のころになって弟が言うん
です。「こんなに釣っちゃったけどどうし
たらいいだろう」。二人とも小さい容れ物
しか持つてなかった。見回したところ、

松根さんの大きい容れ物があつたので、
それを拝借した。二人でフル・パワー出
してやつとというほどの大きな荷物をよ
うやく船の上に揚げて、ボーイさんに「神
戸まで持つていくのでよろしく」という
といやな顔するんです。ところがその容
れ物を見て、「あつ、松根さんのですね」
と言うので「そうだ」と答えたら、「それ
じゃ」と待遇がガラリと変つた。それを
持つて東京駅に着いたら今度は赤帽まで
知っている。「あつ、松根さんのですね」
いやあ、

東畑 茅さん、今度いっぱい釣つたら拙
宅にも配つて下さいよ(笑い)。

●●●●● 「ドイツ四段」ならさぞかし

——松本先生のご趣味はゴルフですね。

松本 いやあ、もう趣味なし。音楽を聞
くのが好きなくらいなもんです。

——始められたのは早かった……。

松本 古いことは古いの。そうですな、
五十三年ぐらい前。

——最初はどちらで……。

松本 プリンストンに赤星六郎という友
人がいて、とにかくゴルフばっかりやつ
てる。ニュージャージーのチャンピオン・
シップまで取つてしまった。その赤星君
からある夏、兄貴がヨーロッパ旅行する
からベッドを空けて待つている、という
ので、彼の下宿に行つて十日間、有名な
プロについた。一本だけのクラブで一週
間やつたかな。あと三日間で、残り全部

やつて、早速回ろうというわけに回つて、
ハーフ47だったかな。そのレコードが今
だに切れない。

——最近は何回ぐらい……。

松本 いやあ、蠟山(政道)君、中山(伊
知郎)君、みんな亡くなつちやつたから
うやめた。

——音楽はどういうものを……。

松本 好きなのはクラシック、特にウイ
ーンのワルツとタンゴの音楽。

——東畑先生は碁ですね。

東畑 最近は何となく腰がエライもんで
からほとんどやりません。椅子でやるの
もいんですけど、椅子で碁を打つとい
うのはどうも面白くなくてね。

ぼくがドイツにおるとき、経済学部の
ある男が、ドイツ人ですがね、たずねて
きて「碁を打つてくれないか」と言うん
ですよ。聞いてみると、ハンブルグかど
こかの大学にいたとき、日本人に習つた
らしい。「あんな面白いものない」と言う
んですよ。当時、ベルリンで鳩山さんと
「郵便碁」を打つた人があるんですよ。

名前は忘れてしまつたが、郵便で次の手
はこうだと。随分時間がかかる。その人
が碁会所のようなものを開いていて、そ
の二、三番目の弟子と打つて、ぼくが勝
つた。だから、あなたはドイツでは少な
くとも三番目というわけですよ。一番
強いのが八段なら四段ですな、と言われ
て、それでぼくは「ドイツ四段だと思
うとつたんですよ」。

それで一週間に一度ぐらいカフェーで

打ったんだ。そのとき面白いことを聞いた。「劫」ってあるだろう、あれを「アルザス・ロートリンゲン」と言ってるんだ。取ったり取られたり……なるほどと思っただね。それからドイツ語のなかなかの解説書もあって、ぼくも持ってたんだが失くしてしまった。

それで帰ってきて「ドイツ四段」と号していたら、田舎の人に「ドイツは学問も進んでいるし、碁もあれでしょうな。ドイツ四段というのは大したもんですな」と言われて照れちゃってね（笑い）。

——今、何段ですか。五段？ 六段？

東畑 いやいや、四段かな。

——ある新聞の夕刊で、東畑先生がさる高名な経済学者をからかっておられたことがあります。曰く、彼の碁は彼の経済学の如く少しも進歩しないと（笑い）。

茅 ぼくの友人の中谷吉郎の親友で、岡潔という亡くなった数学者がいた。中谷は岡先生から数学を習うが如く将棋を習ったというので得意になっていた。

中谷が病気で伊東で静養しているときに、藤岡由夫と私とで見舞いに行っただけです。私が按摩さんに揉んでもらっている間に、二人で将棋を始めた。私が揉み上がったので藤岡が今度は揉んでもらうことになった。そこで中谷があわてて「これどうするんだ」と言ったら、藤岡「おれは見ないでいい」と言いながらやっているうちに、中谷はペロペロに負けてしまった。中谷が怒って「もう一番やろう」と言ったら、藤岡が「よし、今度は最初

っから見ない」というのでやったら、今度も中谷がペロペロに負けてしまった。藤岡曰く「おまえのように岡潔にだけ習ったんとはわけがちがうんだ。おれのは金がかかっている」と。その藤岡が和達（清大）君とやるとペロペロに負ける。上には上がいるもんだねえ。

松本 和達さんは何段なの？

東畑 あれはぼくとトントンだな。

松本 いや、将棋のことを言ってる。

東畑 将棋は知らん。

茅 我妻さんはどのくらい打ったのかな。

ぼくは「教えてやろう」と言われて断ったんだけど。

東畑 非常にシユアな碁で、我妻の法律の通りですよ。

茅 ぼくの先生の本多光太郎という人は碁が好きなんです。数学の教授がいて碁敵がよく打つ。打つと先生、危なくなると「これ、しばらく待ってくれんか」。一つぐらいならと思っていると、先生考えているうちに「この前のこれもいかな」（笑い）。とうとうそれで喧嘩になっちゃった。

●●●●●●●●●● 風呂上がりのサントリー角

——ところで非常に個人的な質問をさせていたいただきたいですが、今日一日のうちで最も時間を割かれるもの、楽しいと思ってるやっておられるものは何でしょう。東畑 なかなかつかまりにくいと言われてね、「どこに一番おられるんですか」と

言うから、「ばあさんのそばじゃ」と答えたの（笑い）。

松本 ぼくはね、夕方六時に風呂に入っただけ、それから水割りを一杯、四十分ほどかけて飲む。これが一番楽しい。

——ウイスキーの銘柄は……。

松本 サントリーの角瓶。あれが一番うまい。

茅 ぼくは「だった」という過去形になるんですが、それはバラを作っているときですよ。こやしをやったりしてね。それが咲き出す五月の二十日前後、これは楽しいです。ところが、辛くなったんですね、近ごろは。結構労働でしょう。かつては日本バラ会の会長だったんですが、今度は石田博英さんが会長になった。

東畑 茅さん、身体がエライと言われたが、実際足が弱って来るといけないね。動くことができない。趣味がないでしょう。こういう男は座り込んで本を読むしかない。

——テレビはいかがですか。

東畑 ニュースとか相撲は見るけどね。

孫がいたころはしょっちゅう孫と喧嘩してね。相撲、五時ごろから面白くなるだろう。そのころから漫画やるだろう。もう一つの方へ行けと言っても、カラーじゃないからダメだ、と。しょっちゅう喧嘩していた。このごろ孫がいなくなっただけで一人になったけど、目がやっぱり疲れるな。心身ともにいたんできとるもんですから。本を読んでも三頁前へ行くともう忘れとるんだ。

その話をしたら、いや、それはこうなんだと説明してくれたな。頭に入らないというんだ。忘れるというのは入ってからの話で、通過するらしいんだね。だから、読まないことと大して変りないらしい。読むというのは多少の自己満足で、そう言われりや近ごろ自己満足ばかりしているようだね（笑い）。

茅 確かに人の顔など、会ったことがないと思っているのに会ってるんですね。あれは通過しちゃうってんですね。

●●●●●●●●●● 「茅誠司の女房になつて……」

——少し変わった質問をさせていただきませんが、美人像は時代によって変わると申しますが、テレビでも、映画でも、印象に残る女性像を伺えませんか。

松本 ぼくはテレビで美人見るの好きだからね、「夜明けのタンゴ」の松坂慶子。

東畑 誰れ、それは。歌手？

——映画・テレビ女優です。大変美人と言われる……。

松本 それから、ぼくは中山君と一緒に三林京子のファンでしたよ。

——ああ、大阪の……。

松本 うん。「鳴門秘帖」のスリのお綱とか。中山君が得意になって、三林京子のことを言うのに「さんばやし」というんだ（笑い）。

——それはいい話ですね。

松本 ぼくらはほんとに吹き出してさ、「中山さん、あなたは博学だが、『みつば

新幹線の影響波及

—都市機能はどう変わるか—

政策科学研究所

はじめに

新幹線は、第三次全国総合開発計画の中においても、将来の高速輸送体系の整備に欠かすことのできない広域交通手段として位置づけられており、整備計画・基本計画線合わせて七〇〇〇キロの整備が予定されている。しかし、その整備には約二兆円（昭和五十年価格）もの莫大な資本投下が必要とされ、現在のような苦しい国家財政にあつては慎重な事前調査が求められていた。特に今後整備が検討されている路線は、沿線人口も少なく、経済的にも開発が遅れている地域が多いため、新幹線の経済性や整備効果等についての十分な調査研究が待たれていた。

このような背景のもと、運輸省と国土庁の両省庁は、新幹線等総合交通施設体系調査として十数本の調査研究プロジェクトを組み、新幹線整備に関する総合的、多面的な調査研究を実施した。この調査研究もその一環として五十四年度に実施されたものであり、新幹線整備が都市機能に及ぼす影響波及について多面的な調査分析を行なっている。

今回の調査研究では、既存新幹線地区の調査分析を充分に行ない、都市機能への影響波及メカニズムやそのプロセス等を明らかにし、その結果をベースに整備五線地区の影響波及の予測を行なっている。具体的には、都市社会学的なアプローチ（多面的なヒヤリングや、アンケート調査

等）によって、新幹線整備のインパクトの波及連鎖を説明するとともに、中枢管理機能、宿泊機能などの都市機能の質的変容や都市イメージの変化の実態を明らかにした。また、都市全体として受けるインパクトの大きさをとらえるため、システムダイナミクスによる都市モデルを構築し、各種のシミュレーション分析を行なっている。以下で、本調査研究の成果について、簡単な紹介を行ないたい。

影響波及の連鎖パターン

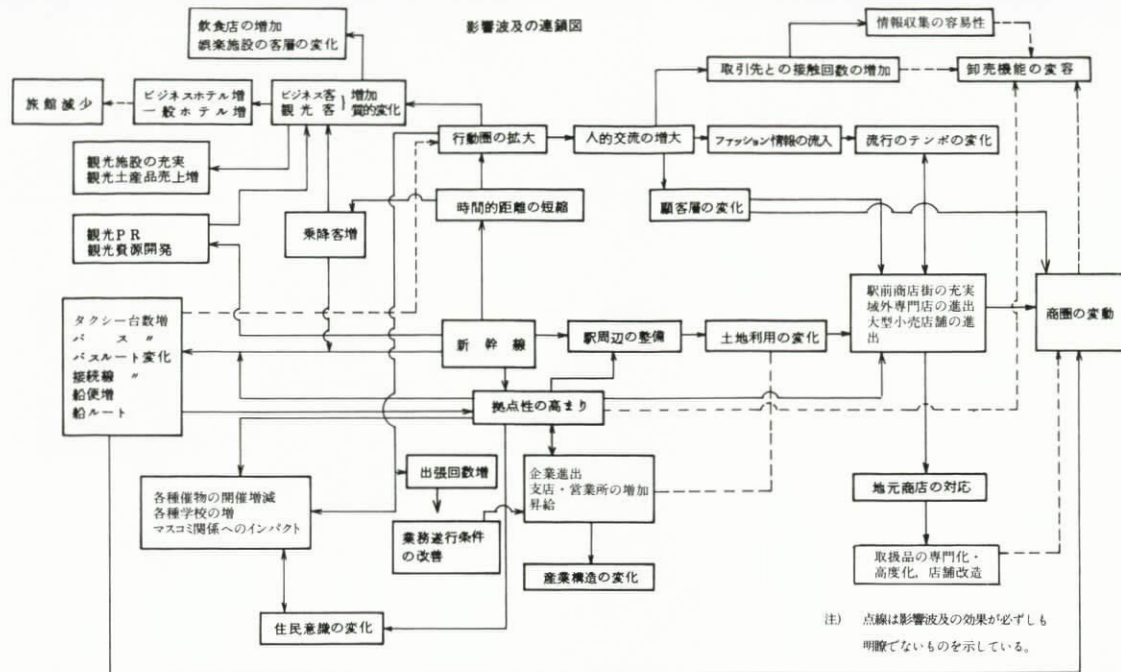
この分析では、多くの都市機能の中から幹線交通網と係わりが深いと思われる中枢管理機能、商業機能、宿泊機能、教育・文化・マスコミ機能、アミューズメント機能、交通・観光機能の六機能を取り上げ、影響波及の時期、程度、連鎖状況等について分析を行なった。影響波及の連鎖パターンは、新幹線停車都市と非停車都市で大きく異なっており、また都市規模によっても多少の相違が見られた。

次頁に図示した影響波及連鎖は人口一〇万前後の停車都市のそれであり、新幹線整備の諸影響が時間距離の短縮、拠点性の高度化、交通体系の変化、駅周辺の整備等を通して各分野に種々のインパクトを与えていることが分かる。このような波及は分野別に影響を受ける度合や時期に特徴があることが明らかとなった。すなわち、中枢管理機能や教育・文化・マスコミ機能、アミューズメント機能へのイ

ンパクトが予想以上に小さいのに対して、商業機能や宿泊機能、交通・観光機能への影響はかなり大きなものであった。また、宿泊機能への影響が新幹線の開業前に出始めるのに対して、卸売業への影響は五、一〇年のタイムラグを持って現れることが認められた。

空間的影響波及

新幹線整備が沿線各都市の土地利用や商店街等に与えた影響を明らかにするため、三原市（新幹線停車都市）と尾道市（非停車都市）を対象に、面接アンケート調査を行なった。事例が少ないので一般化することは難しいが、かなりおもしろい結果が得られた。つまり、新幹線の開通前後には建物の新増築や高層化の動きはあまり見られず、新幹線整備を契機に計画された駅前再開発事業にテンポを合わせるかのごとく、対象地域周辺で新築、改築が盛んに行なわれていることである。面接調査で得たニュアンスでは、再開発地区との競争上店舗を新増築した商店が多く、駅前再開発が行なわれなければ新増築ブームはなかったものと考えられた。これ以外の特色としては、乗降客の増加に対応して商店街の店舗構成が多少変化し、駅前を中心に飲食店や喫茶店が増加していることをあげることができ、他方、非停車都市である尾道市では、商店街の構成や建物の新増築には大きな変化は認められなかった。



注) 点線は影響波及の効果必ずしも明確でないものを示している。

都市イメージは どう変わったか

新幹線整備による都市イメージ・行動イメージについて調査すると、都市イメージについては、小さな停車都市ほど

変容の度合いが大きく、開通前の地方都市、静かな町、田園都市、ふるさとの町、どこにでもある町といったイメージから、開通後には交通の要地、観光都市、にぎやかな町といったイメージへと変容していることがわかった。なお、新幹線沿線地区でも非停車都市では、このような傾向は当てはまらず、さみしい町といったイメージも増加している。

また、行動圏イメージについては、各都市とも比較的類似したイメージ変化を示しており、買物圏（高級買回り品）の広域化や旅行パターンの変化が生じている。前者については、遠方大都市への日帰りが可能となったため、若者を中心に買物圏が大幅に拡大し、後者については一泊の小旅行が近在観光型から広域長距離移動型へシフトしている。

起爆剤としての効果

都市の経済的魅力度（経済の中心性、生産力）や社会的魅力度（文化性、消費規模）を表す三〇系列のマクロデータを指標化して、新幹線の停車都市と非停車都市との魅力度比較を行なった。全般的には、停車都市に選ばれただけあって、停車都市の魅力の方がかなり非停車都市のそれを上回っている。しかし、成長性の観点から見るとこれは必ずしも妥当せず、東海道沿線都市においてはその格差が急速に縮まっている。なお、岡山以西の新幹線停車都市にあっては、依然と都市成長が進んでおり、非停車都市との格差は広がっている。新幹線の整備は、都市成長の起爆剤としては有効に作用するものと考えられるが、長期的には他の諸要因との関係で限界が出てくるものと考えられる。

都市規模によって異なる効果

新幹線整備が都市機能の集積度に及ぼす影響は、都市規模によって大きく違っている。県庁所在都市のような大都市では、ホテル・百貨店に代表される高次施設が大幅に増加するとともに、スーパーマーケットやバー、キャバレーなど多くの都市施設が顕著な増加を示している。次いで地方中核都市では、一部の都市施設（ホテルや喫茶店など）に影響が出ている。

るが、地方中核都市レベルでは大きな影響はそれほど現れていない。なお、非停車都市では、ほとんど新たな集積が見られなかった。

今後への示唆

このような調査分析結果を踏まえて、整備五線（東北・北海道・北陸・九州一線）沿線都市の都市機能への予想されるインパクトについてごく簡単に示唆すれば、今後整備が計画されている地域は、人口集積や経済的な集積が乏しいだけでなく、都市間の格差が大きく、県庁所在都市のウェイトが極端に高くなっている。

この地域特性を考慮すれば、県庁所在都市については、既存整備地区以上に、各種の影響波及が強く現れることが考えられる。特に、小売業や宿泊業、交通・観光業にあっては、域外資本の進出も多いと予想される。

他方、人口数万程度の都市にあっては、各種の集積度も低いため、停車都市であっても地元の適切かつ積極的な対応が行なわれなければ、新幹線の整備効果を充分引き出すことができないどころか、近くの県庁所在都市に各種の都市機能を吸収される可能性すらあると予想される。なお、このような影響は都市構造の限界領域において生じる現象として理解され、都市そのものの死活を左右するほどのインパクトは持っていないと予想される。

座談会

絆きずな

モリモリ、生人がかられ

モツキン・バードを追いかけて

三国 ぼくが、ダーク・ダックスの皆さんに初めてお目にかかったのは、日比谷の野外音楽堂、あそこで、アサヒビール・コンサートだったろうと思いますが、そのときに出していただいたのが、おそらく

最初だろうと思います。お名前は存じていたけれども。その頃は、ダーク・ダックス・クワルテットといつてらしたと思います。リサイタルがあるというポストアーを、有楽町の銭湯で見ました。飯沢 ほう、そうですか。喜早 銭湯で貼ってくれた人がいるんで



すねえ。

三国 いたのね。今はもうありませんけど、有楽町のガード際の小さな銭湯。深夜放送をやるものですから、入りに行くと、ダーク・ダックス・クアルテットって……。クワルテットというのをとったのは、いつですか。自然にとれたの。

●出席者

飯沢 匡 いざわ たけす
(劇作家)

遠山 一 とやま はじめ
(歌手・ダーク・ダックス・国際交流研究部会)

喜早 哲 きそう てつ
(歌手・ダーク・ダックス・国際交流研究部会)

佐々木 行 ささき とおる
(歌手・ダーク・ダックス・国際交流研究部会)

高見沢 宏 たかみざわ ひろし
(歌手・ダーク・ダックス・国際交流研究部会)

司会

三国 一郎 みくに いちろう
(放送タレント)

佐々木 結局、長過ぎるということですね。新聞の予告に入らないんです。ダーク・ダックスぐらいまでならいいけど。喜早 最初にぼくらが憧れた黒人のコーラスグループが、ゴールデンゲート・クワルテットなんです。三国 日本へも来ましたね。

喜早 ええ。それで、ダーク・ダックス・クワルテットと、なんとなく四人でつけたわけなんです。

ばり謙遜ですから、ぼくらは(笑い)。
三国 ゴールデンゲート・クワルテットっていうのは、黒人の男性四人でしょう。あの人たちは、男性のボーカル・クワル

かったんです。「ジェリコの戦い」とか。
遠山 黒人の、最も黒人くさいクワルテットでしたね。
三国 でもね、ゴールデンゲートの人達

高見沢 だいぶ後だけど、日本へみえたときに会ったんですよ。やっぱりすごく喜んでいましたね。

喜早 当時、ゴールデンゲートの譜面が出ましてね、十曲ぐらい入っている譜面が。大阪に、輸入譜面ばかり売っているところがあるんですが、そこへ行っちゃ買ってきて、練習しました。ゴールデンゲートの極めて基本的なやさしいものでも、喜んで買ってきては、ずいぶんそれで練習しました。

三国 その頃は、もう大学をお出になってらした？

喜早 いえいえ、在学中です。ワグネルで歌っていた頃。

その頃、アメリカから「ヒット・パレード」っていう映画が来たんですよ。その中に、ゴールデンゲート・クワルテットが出ていて、「モッキン・バード、モッキン・バード」ってやっていたね。

佐々木 ぼくは、あの映画を追っかけて追っかけて、下北沢のオデオン座まで行った。

喜早 そのコーラスがすばらしかったんですよ。完全なニグロ・スピリチュアルという感じで……。

ハーモニーをつくる愉しさ

三国 皆さんね、初めからハーモニーとか、ボーカル・クワルテットとか、つまりグループで歌うっていうことばかり考えてたんですか。一本立ちの歌い手になる

遠山一氏



佐々木行氏



三国一朗氏



飯沢匡氏



高見沢宏氏



喜早哲氏



からって、それは真説なんですか。
喜早 それは正しいです。それと、ドナルド・ダックにひっかいたということもありますね。あひるは声が悪いと。やつ

テットとして、どういう特色がある人達でしたか。黒人霊歌とか……。
喜早 黒人霊歌が専門ですね。佐々木 それで、非常にハーモニーがよ

も、まさかこんな、宗教も違えば風土も違う太平洋のこっちの島国で、自分達の歌がそういうふうに分かってもらえるって、驚いたでしょうね、きっと。

つていうことは考えなかつたんですか。

佐々木 ええ。

三国 どうして。

佐々木 ハーモニーを作るのが愉しいわけですよ。一人で歌うなんて、夢にも考えてなかつたです。

喜早 慶応のワグネル・ソサエティーという合唱団に入ったとき、それぞれみんないろいろな理由があつて入つたんでしょうけど。

ぼくは、その前の年、高校のとき、共立講堂で全国の合唱コンクールがあつて、合唱団で行つたんですよ。そのとき、慶応のワグネル・ソサエティーというのが出てきて演奏したんですよ。それで、しびれちゃいましたね。おれはもう、慶応に入つたらワグネルに入るんだつて、決めちやつたわけですよ。

三国 しびれたのが、コーラスだつたわけですよ。

喜早 そうなんです。

佐々木 そのときは、やつてたんでしょう、コーラスを。

喜早 高校ではやつてましたけど。

遠山 それは、目的は女の子と付き合えるという……。

喜早 いや、ぼくは、ガールフレンドはいっぱいいたから、そんなところに入らなくてもよかつた。

遠山 その割にガツガツしてたじゃない。

喜早 余裕たつぷりだつたよ(笑い)。

三国 ワグネルで正規に習う歌つて、どんな歌です。

喜早 クラシックです。それ以外には、ロシア民謡がありました。その頃、ワグネルがレパートリーにしていたのは、「ド

ン・コサック」をコピーしたものが入つていたんです。そのことが、ぼくらがダーク・ダックスになつても、ロシア民謡を歌つたという基本なんですよ。

三国 いまのダーク・ダックスの形になつて、初めて公けに歌つたのは、「ホワイト・クリスマス」だつたんですつて？

喜早 ええ、ワグネルのクリスマスパーティーで……。あのとき、まだパク(高見沢氏)は入つていなくて、ダーク・ダックスという名前はなかつたんですが、三人で余興で歌つたら、大受けに受けちやつて。それがまちがいの元ですよ(笑い)。

そうなるよ、やはりクルワレットにしたいということになつて一人探したんです。いろいろな連中が入つて来ましたが、それで一緒に歌うんですが、どうも合わない。そこで、その翌年、下級生の中から探せということになつて、引つ張り出してきたのが、パクだつたんです。これが運の尽きです。

佐々木 それで決まっちゃうと、パクが試験だとか何とかで他のを入れるでしよ

う。やつぱりダメなんです。

三国 しつくり行かない……。

高見沢 やつぱり、いまと違ひましてね、素直でしたから、上級生のいうことを「ハイ、ハイ」と聞いてましたから(笑い)。

佐々木 ほんとに素直だつたなア、いまと違ひ(笑い)。

「イロハ」はパロディーのはしり

三国 飯沢先生には、いつ頃お会いになつたんです。

喜早 結局、ダーク・ダックスの変遷としては、その後がありました。初めての演奏会するとき、もちろんパクもいましたけど。そのとき、それこそ、ゴールドエンゲートとか、エイムス・ブラザーズとか、いろいろな向こうの曲を聴いて勉強してましたので、そのコピーを歌つたわけですよ。そうしたら、新聞の批評でコテンパンにやられたんです。何は何々のコピー、何は何々のコピー、何は何々のコピー、何は何々のコピーと。書いたのは、確か大橋巨泉です。全部バレちやつたわけですよ。

飯沢 そうなるよ、その批評はたいしたもんですよ。立派なものじゃない？

高見沢 すごいのがいるなと思つた。

三国 巨泉に、君だろうつて言つたことあります？

喜早 あります。そうしたら、「そんなことあつたかな。アハハ……」つて言つてました。

三国 やつぱり早稲田だからね(笑い)。

喜早 それで、これじやいかんていうので、コピーじゃない、自分達のスタイルを作り始めた頃に、飯沢先生にお会いしたんです。

飯沢 ぼくの定かならぬ記憶によればですな、ラジオ番組で……。当時朝日新聞の都内版で「東京むかしむかし」つていう

連載があつたのからヒントを得て、「むかしむかしミュージカル」というタイトルを考えたことだけは、はっきり憶えている。

喜早 あの番組でお会いしたんです。

飯沢 それで、日本の昔話をミュージカルにした。ニッポン放送でしたね。

高見沢 三国さんがポスターをご覧になつたというのは、その後の第一回のリサイタルだと思ひますが、そのときすでに、飯沢先生が作つてくださった「イロハニホヘト」というのが入つてますよ。

三国 「イロハニホヘト」つて何？

佐々木 西武劇。不朽の名作なんです。

飯沢 あれは、リサイタル用に書いたんです。作詞・弘法大師。

三国 作詞・弘法大師ですつて。

飯沢 そう。そうしたらね、ジャズラック(音楽著作権協議会)で臨時総会を催してね、ぼくに著作権を認めるか認めないかということになつて、協議の結果、著作権を認められた。

喜早 弘法大師と同格になつた(笑い)。

飯沢 これで、弘法大師には印税をあげてないんですよ(笑い)。

三国 ときどき拝まないといけない。

遠山 でもね、あのくらい自分達でやつておかしくなつちやつたものもないです。何回やつてもおかしくなる。単にパクが女形をやるつていうことじゃなくて、何ともおかしんですよ。

飯沢 いま、パロディーつていう言葉があるけど、本当はあれはパロディーのは



ね。インディアンは、やはり「ハニホヘ」なんです。

喜早 (節をつけて)「ハ・ハ・ハ・ハ、ハニホヘ……」

高見沢 「ホヘホヘ」なんてね。

飯沢 こうやると、いかにもインディアン。

喜早 悪漢が「ワカヨターレ」。突然、「ナラムナラム」なんて言うんですよ。

遠山 これはおかしいね。

飯沢 ヒーローは「オクヤマケフコエテ」。

三国 それで女性は何?

喜早 「アサキキキッ」って悲鳴をあげてますよ。

高見沢 「アサキキキキ」って「アサキキキ」のところが女性なんです。

喜早 あれが大ヒットしちゃってね。ずいぶん歌いましたよ。

飯沢 そうらしいですね。ジャズトラックからくる印税の伝票を見れば、あ、ダーク・ダックスは健在だと分かるわけ。

三つの記事でドカンと売り出す

飯沢 同じリサイタルのときにね、芥川(也寸志)君が、「新聞」っていうコーラス原稿を書いた。これも実におもしろい。

三国 それは何です。

飯沢 全部新聞の案内欄。

喜早 三面記事ですよ。

飯沢 広告だけでしたら。

高見沢 ニュースもありましたよ。

佐々木 「天声人語」とか……。

遠山 「重光外相急死す」なんていうのもありましたよ。

佐々木 多摩川に死体があがったなんていうのもあったしね。

喜早 この「新聞」と「イロハ」を、第一回のリサイタルで出した……、これがぼくらの失敗の元だったんです。

名前も知らないような……、一応新聞にはある程度出ていたけれど、そういうグループが、演奏会でそういうことをやったって……、すごい話題を呼んだんです。それから、リサイタルのたびに、何かあるんじゃないかと、みんなが期待するわけです。

三国 あ、なるほど。

喜早 それで、苦しみ抜いて、もう二十何年です。

三国 あつと驚くようなものをやらなきゃならない。

高見沢 その頃、リサイタルっていう言葉は、あんまりポピュラーじゃない頃だったんです。亡くなられましたけど、越路さんぐらいが最初だったかな。それからすぐわれわれぐらいじゃないかしらね。

それからは、何でもリサイタルになっちゃって……。

喜早 で、ぼくらが、リサイタルをやる前の、何となくやっていると、ドカーンとわれわれの名前が出たのは、飯沢先生の、さきほどの「むかしむかしミュージカル」と、特に先生が書かれた朝日新聞の記事、それに「週刊朝日」の記事で、中川さんという記者が取材したも

のと、それから「東京新聞」の、亡くなられた伊藤さんの方が書かれた記事、この三つですね。この三つでドカンと出ました。それ全部ありますよ、先生。

飯沢 それは、ぼくは全く憶えていないな。なんかのまちがいがいいじゃないかと思うんですが(笑い)。

喜早 ちゃんと取ってありますよ。黄色くなってるけど……。それがきっかけでしたよ。マスコミの力って恐ろしい。

もがき続けたリサイタル

三国 やっぱラッキーでしたね、伺ってみると。出発が、非常に恵まれていたね。いま考えてみると、作品に恵まれていた。

遠山 そうですね。知らないうちに、ムリヤリ押し上げられちゃったみたいな感じで……。

三国 だけどね、そうおっしゃるが、ムリヤリ押し上げられたって、それだけなら、そう長続きはしない。

飯沢 そう思いますね。

喜早 最初われわれをプロにした小島さんが、「プロになれ」って言ったときに、「先生、食えますか」と聞いたら、「そんなこと分かんないよ」って言われましてね。「お前らの努力次第だ」と。そう言った小島さんが、十周年のときのプログラムを見てみますとね、よくまあ十年やってきたもんだって書いてあるんです。

三国 そういふこと言う人だよ(笑い)。

先生のお考えで……。

飯沢 でも、ああやってみるとね、弘法

大師という人は、実に五十音をうまくアレンジしていますね。「ハニホヘ」なんて

しりです。

佐々木 西部劇はあれしかないというエキスが、全部入っているわけです。

喜早 西部劇っていうのは、つまるところ、「ドンドーン」「バンバン」「チュッ、これだけだっというんです。

三国 なるほど。

喜早 男と女が会ってすぐ結婚しちゃったら、おしまいになっちゃう。いかに伸ばすかっていうんで、一緒にさせないために悪役がいる。それに、インディアンが出る。それが西部劇である。そういう先生の考えで……。

飯沢 でも、ああやってみるとね、弘法

遠山 でも、小島さんの夢っているのは、コーラスを世に生むことだったんですね。三国 それで、男性の方でダーク・ダックスが生まれ、女性の方でスリー・グレイセスが生まれた。

飯沢 スリー・グレイセスは三木鶏郎がよく使ってなかった？

佐々木 使ってみました。鶏郎さんは、ぼくにもよく使ったね。あらゆるコマーションに。

喜早 コマーションというコマーションは、ほとんどぼくら、やらされましたよ。高見沢 というのは、理由があるんです。いま冷静に考えると分かるんですけど、

鶏郎先生はぎりぎりまで曲がおできにならないわけですよ。そうすると、編曲も何もできていないのを、ひゅつと持って来るわけですね。それで、「やってくれよな」って……。ひどいときは、五線をピツと破いて配給して、アレンジして…。

佐々木 それをまたつなげて……。それですぐ歌っちゃうでしょ。それが非常に便利だった。

喜早 初見がきいたっていうことは、飯沢先生の記事にも出ています。他の歌手がみんな苦しんでいるのに、ダーク・ダックスは、その場で歌ってくれたって。三国 譜面をもらってすぐ歌うっていうことは、そんなに難しいことですか。

佐々木 ぼくらはそれほどでもないですけど、読めない人は大変ですよ。

三国 ということは、いかに日本の歌手が不勉強かっていうことね。



飯沢 そう、それはいえませぬね。

喜早 いまなんかは、譜面の読めないほうが、いいフィーリングがあるなんて言われますよ。

三国 それがちがつていると思うな。そんなのはフィーリングとは言わないよ。やっぱり皆さんは、当然ではあるけれど、基本的な技量をちゃんと根底に持っていたということが、長続きした一つの原因だろうな。

喜早 それは言えるかもしれませぬね。

それに、やはり、ヒット・ソングを追っけなかったっていうことでしょうね。ヒット・ソングを作るためにシヤカリキになったんじやなくて、何か歌っているうちに、良いものが生まれると……。

飯沢 毎回、リサイタルのたびに、何か新機軸を出そうとして、あなた方はもがいていたね。

遠山 リサイタルのためには、いまだにもがいていますよ(笑)。

●老人達に愛されたワケ……

喜早 ぼくら考えるんですけど、飯沢先生を初めとして、われわれが出てきたときのブレンが、ものすごくよかったですね。

佐々木 恵まれてたね。

喜早 サトウハチロー先生、それからハチロー先生に紹介された初山滋先生……。

飯沢 初山先生はぼくですよ。

高見沢 そう。飯沢先生のお宅で、初山

先生のお話を伺ったんだ。ポスターをお願いしに行きなさいって。

喜早 初山先生が、飯沢先生に言われたんなら描いてあげるって……。

三国 しかし、初山先生に……。よかつたねえ。

喜早 経済的には、三木鶏郎さん、コマーションで助かりました。それから小島正雄さん。

遠山 谷内六郎さんもね。谷内さんも飯沢先生に紹介していただいた。

喜早 谷内先生に、楽屋で絵を描いていただいて。あれ、うちに貼ってありますよ、額に入れて。

飯沢 初山先生も、案外早く逝かれて……。あの方を、ロシアにお連れしたのだけは、ぼくはいいことをしたと思ってるんです。

喜早 サトウ先生にも、ずいぶんお世話になりました。いまでもサトウ先生からの手紙はとってあるんですけどね。「もうすぐ、続々できます」なんていう手紙。

飯沢 そのゼネレーションの老人達が、何かうれしかったんだね、きつと、ダーク・ダックスと付き合うのが。

喜早 老人連に可愛がってもらいましたずいぶん。

高見沢 また失礼な(笑)。

佐々木 あの頃そうだよ。渡辺紳一郎さんなんかずいぶん可愛がってくれて。三国 どこがそんなに可愛かったんだらうな。どうですか、飯沢さん。

飯沢 やっぱね、物欲し気ではなかったからね。

三国 あ、それはそうですね。

飯沢 ちょうどあの頃、タレントなんていう言葉ができた頃で、物欲し気なやつが横行したときに、そういう顔をしながら連というものは敏感なんですよ。と、神経質なんですよ。

喜早 そろそろこっちも敏感になってくるよ(笑い)。

遠山 そういう年代になってきた。

高見沢 割と敏感になりつつあるね。

飯沢 いやでしょう、物欲し気なのは。その伝統は、ぜひ伝えといてください(笑い)。

密造ワインにさそわれて

喜早 三国さんはご存じないかもしれないけれど、初めの頃、ぼくらは新聞なんかの批評でやつつけられているんです。

佐々木 出る杭は打たれるんですよ。

喜早 そうすると、しよぼんとしちやいましてね。そのとき飯沢先生のところへ行って、「先生、もうやめようと思うんですけど、こんなこと書かれちゃって」って言うと、「いやア、そんなこと気にしないで」って、やられるんです。

高見沢 それで、帰る頃は、すごいハッピーになって帰ってくる(笑い)。

飯沢 ぼくの若い頃なんて、何書いたってやられてたんだから。

遠山 そのお話を伺ってね。「たたかれろことは、認められることです」なんて



言われて、喜んで帰ってきちゃう。

喜早 ぼくらの精神科のお医者様だったくしやんくしやんになって先生のところに行く、慰めてくれる。

高見沢 珍しいおいしいものを探してきて、食べさせてくださったってね。

三国 それは、ぼくもそうだったな。

飯沢 いや、若者の飲心を買うのは、食い物しかなかったから、当時は(笑い)。

喜早 手の内が分かった(笑い)。小島さんが天井でつったのと一緒だ。

飯沢 天井より、もう少しいいものを出したはずだよ。なんせ自家製のブドウ酒を……。

三国 それは高級だ。

飯沢 苦心の作を、全部飲まれちゃったんだ(笑い)。

佐々木 うまいって言わないと、ぶん殴られそう(笑い)。

遠山 あれはうまかった。でもね、お猪口一杯ぐらいしかご馳走してくれない。

飯沢 そうでしたかね。あれ、非常にうまくできたんですよ。あの年は。

高見沢 あの頃は先生、密造でしたよ。

飯沢 あれは完全な密造です。あれから十年ぐらいたって、法律が改正されて密造じゃなくなったんです。

高見沢 それで、先生、だいたいようぶですかって言ったら、「ぼくは、お酢作ろうと思ったら、アルコールになっちゃった」と言い開きするんだ」って、そうおっしゃったの。ぼくはよく憶えている(笑い)。

三国 逆だね、それはしかし(笑い)。

佐々木 ストープの横に置いてね。

高見沢 何年ぐらい前かな、二十年……。

飯沢 二十年じゃやかないですよ。

パリは素人娘だった!

喜早 二十年前という、最初にソビエトに行った頃ですよ。あのとき、ずいぶんえらい目に遇ったんです。行くなっていう声がいっぱいありますね。

高見沢 共産党と思われるから、行ってはいけない、帰ってるときは、共産党になってるって。

佐々木 とくに右翼っぽい文化人の方々が、こぞって行くなと。洗脳っていう言葉があった時代ですからね。いまは、あんまりないでしょう。

喜早 それでずいぶん反対されましたけど。何しろ若気の至りで、とにかく呼んでくれたらどこでも行きたいというときでしたから。

飯沢 あれは、何で着目されたんですか。

佐々木 NHKの吉川芸能局長。

喜早 これは、つい最近知ったんです。ソビエトの大使館の人がNHKに来て、日本を代表する芸能を教えてくださいって言うので、ぼくは君達を推薦したんだよって言われて、初めて分かったんです。

佐々木 つい、三、四年前だね。それまでは、知らなかった。

飯沢 吉川さんという方は、本当にそういうことを言わない粋な方です。ぼくも恩人だと思っている。黒柳(徹子)君な

んかもそうですよ。

高見沢 われわれには、突然ソ連大使館から、ちよつとオーディションをやってもいいから、もしかしたら行ってもらいたいからと。それで、ヤマハのピアノ売り場か何かで、ソ連の文化担当の人が並んでいる前で歌ったんです。

三国 へーえ。何を歌いました。

遠山 「最上川舟歌」なんていうのをやりました。それにロシアの歌も。

喜早 あのとときは、ソビエトへ行って、帰りにヨーロッパへ出ましてね。ずうつと回ったんですけど、ほとんど日本人はいなかったですね、あの頃は。

飯沢 たしか、三国さんもご存知の、あのフランス語の先生の、レオナルドさんから、ストリート・ガールを買ってはいけな、パリに行ったら素人娘を口説け、必ず成功するからって話をよく聞いていたでしょう。だから、それをそのまま、四人に懇々と話した。そうしたら、それを実行したらいいんですよ。

三国 やっぱりねえ。それはよかった。

喜早 おれ、実行しないもん。
佐々木 おれだってしないよ。玄人だもの(笑)。先生は、本に書きちゃうんだもの。

飯沢 あ、そう？ 書きちゃった？

遠山 書いてありますよ。ダーク・ダックスって、ちゃんと。

飯沢 実行したらいいって？

喜早 実行したらいいって。

飯沢 「らしい」だから、いいじゃないで

すか(笑)。

落ちこぼれかしら？

飯沢 だけだね。もう今やあなた方は、イタリアントを発掘する義務がありますよ。

三国 ぼくもそう思いますね。

飯沢 それと競おうなんて考えは、絶対持たずにね。

喜早 もうそんな気持ちはないですよ。

遠山 そうか？ まだ多少あるな(笑)。

飯沢 だいたいようぶですよ、もう不動の地位を築いたんだから。後は後進に道を譲るんじゃないかと、道を拓くんですよ。譲るんじゃないんですよ。

喜早 でも、最近では、見ていますといいのがありますね、ニューミュージックの連中なんかは。

三国 どういうところがいいんですか。

喜早 歌唱力があります、いまの連中は、歌に説得力がありますね。

いま、ぼくら、若い人と一緒にやる番組を持っているんですよ。これはもう十六年も続いている「サンデー・ダーク・ダックス」っていう番組だけど、二年前から企画が変わりまして、ニューミュージックのタレントを呼んで来て、その連中としゃべったり歌ったりするんですよ。おもしろいですよ。それにうまいです。

飯沢 ラジオ？

喜早 ええ、日曜日の五時半から。

高見沢 彼らと話していると、本当におもしろいね。昔は、われわれもこんなだ



つたんだなアと思って……。
佐々木 びっくりするほど真面目なものですよ。

遠山 進取の気性の激しいのがいたり、そうかと思うと、何も受け容れずに突っ張ってるのがいたり……。

飯沢 もう、その年齢に達したんですかな(笑)。

喜早 オフコースっていうグループがありましてね、いま非常に人気があるんです。一人は、東北大学の工学部を出て、早稲田の理工科の大学院に入っているんですよ。そして、一人は東京工大を出ているんですよ。それで、「みんな変わってんねえ」って言ったたら、「だって先輩達も変わってるでしょう」って。そう言われればそうですか……。変なのがいますよ、いっぱい。

飯沢 何か、ワキから来た人ばかりの集団じゃない、今日は。三国さんも、本来なら大学教授か学部長くらい……。何ていうの、こういうのは。

三国 アウトサイダー。

佐々木 落ちこぼれかしら(笑)。

四人組、でも女が一人いない

三国 皆さんは、中国にも行かれたんでしょう。中国には、皆さんのようなコースというのはいないんですか。

喜早 ないです。

佐々木 たただただ驚いていました。

三国 驚いたっていうのは、どうしてこ

んなハーモニーが生まれるかということにですか。

高見沢 要するに、西洋音楽がポピュラーじゃないから。われわれがやっているようなハーモニーというのは、西洋音楽です。しかも、自分達と同じような顔をしているのがやる。

喜早 まず、もつと基本的なことに驚いたんです。歌い手が舞台に出て来て、マイクを握って、しかも四人で出てきたとたん、ニコニコ笑ってしゃべり出したというので驚いちゃったんです。向こうの歌い手というのは、サーッと出て来て真ん中に立って、何もしゃべらず、サーッと歌って、パツと引っ込んでやう。決してしゃべらない。

高見沢 司会者が別にいましたね。

遠山 あれは、どういうんだらうね。ステージと客席は、一線を画しているって、いうことなんだろうか。

飯沢 だって、日本だって戦前まではそういうでしょう。東海林太郎だって直立不動で歌っていた。

喜早 ぼくらが行って演奏しましたんで、上海で同じような四人のグループができましたけど。北京でも、もうすぐできるといっていましたが、新しい四人組があるらしいです。抵抗があるらしいです。わかれわかれ「スーレンパン」だって言ったら、ワーッと笑ったものね。でも、いい方の四人組です。なんて言っています。

遠山 女が一人いなくて残念だなんて言

っていますね(笑)。

三国 それはうまい洒落だ。

飯沢 洒落って言えばね、日本には政治ジョークがないから一生懸命作ろうと思っただけで、なかなかできないんだよね。やっとなんか作ったんで。

鈴木善幸が発言すると、必ず宮沢長官が訂正するじゃないの。その連続でしよう。それで、ある人がね、「鈴木さん、あなた全甲じゃなくて、全丁だね」っていったら、怒って「新年から多くの発言を見てくれたまえ。訂正なんて必要ない」。それで、みんな大いに期待してた。そうしたら「皆さん、明けておめでとうござります」って言った(笑)。

三国 「どうだ」ってなもんだな(笑)。

飯沢 それぐらいしかできない。なかなかできないものよ。外国にはいいのがいろいろあるけどね。

喜早 ソビエトに行くと、そういう小話がいっぱいあるんですよ。最近聞いたのだけど、ポーランドへソビエトの政治局員が視察に行った。

飯沢 例のストライキがあつてから？

喜早 そうです。そうしたら、亡命者が精神病院に入れられている。そこで、ソビエトのやつが、「これはおかしい。わが国では亡命者は刑務所に入れるのに、何で精神病院へ入れるのか。するとポーランドのやつが、「普通は刑務所に入れるんですけど、こいつはソビエトに亡命しようとしたんです」(笑)。

飯沢 その小話は、前からありました。



佐々木 ええ。ソビエトにはそういうのがいっぱいあります。それを、かなり大勢のお客のいる前でやるんですよ、それが、お客に大受けなんです。

三国 日本の寄席には、そういう笑いがないね。

飯沢 そういう習慣がないのね。ジョークとか笑い話って、全部下半身だと思っっているんですよ。

佐々木 ソビエトの場合、そういう小話をしたからって、別に手入れをくらったっていう話も聞かないし……。あの辺が吐け口なんだろうね。

飯沢 三国さんに差し上げましたか、「ソ連は笑う」っていう漫画集。

三国 いえ。

飯沢 「ソ連は笑う」っていう漫画集が最近出たんですよ。それを見ると、ずいぶん自由ですね、少なくとも官僚主義批判については。現政府の要人を指名でやったらダメなだけども、一般的傾向を皮肉ることは、ちつともかまわないらしいですね。

佐々木 好きだね、あいつら、本当に。

喜早 小話じゃないですけどね。この前中国に行ったとき……。ウーン、あんまりリアルな話をするのはまずいかな。

三国 それでは、いったんこの座談会を終わらせてから聞きましょうか(笑)。

21世紀フォーラム・部会メンバー

発起人

内田忠夫 東京大学教養学部教授

加藤秀俊 学習院大学法学部教授

加藤芳郎 漫画家協会理事

茅 誠司 東京大学名誉教授
日本学士院会員

小松左京 作家

東畑精一 東京大学名誉教授
政策科学研究所顧問

中山伊知郎 (故人)

松本重治 国際文化会館理事長

向坊 隆 東京大学総長 国連・開発の科学技術適用諮問委員会(ACAST)委員

加藤秀俊部会

加藤秀俊 学習院大学法学部教授

宮本常一 武蔵野美術大学名誉教授
日本観光文化研究所所長

米山俊直 京都大学教養学部助教

加藤芳郎部会

加藤芳郎 漫画家協会理事

青空うれし テレビタレント

青空はるお テレビタレント

天地総子 歌手 タレント

大山のぶ代 俳優

大和田獏 俳優

岡江久美子 俳優

加治 章 NHKアナウンサー

川野 一宇 NHKアナウンサー

小島 功 漫画家

砂川啓介 俳優

鈴木義司 漫画家
漫画家集団所属

田崎 潤 俳優

植 ふみ 俳優

坪内ミキ子 俳優

富田純孝 NHKディレクター

中田喜子 俳優

墓目 良 俳優

水沢アキ 俳優

三橋達也 俳優

ロミ山田 歌手 俳優

渡辺文雄 俳優

茅 誠司部会

茅 誠司 東京大学名誉教授
日本学士院会員

有澤廣巳 東京大学名誉教授
日本原子力産業会議会長
日本学士院院長

生田豊朗 日本エネルギー経済研究所所長

稲葉秀三 産業研究所理事長

内田忠夫 東京大学教養学部教授
大島恵一 東京大学工学部教授
岡村和夫 NHK解説委員
尾関通允 日本経済新聞記事審査委員

金森久雄 日本経済研究センター
理事長

木元教子 放送キャスター

五代利矢子 評論家

斉藤志郎 日本経済新聞アジア総局長

三枝佐枝子 評論家
商品科学研究所所長

高原須美子 評論家

富館孝夫 日本エネルギー経済研究所研究部長

中村 貢 朝日イノベーション・ス社代表取締役社長

永井陽之助 東京工業大学教授

橋口 収 公正取引委員会委員長
慶応義塾大学経済学部教授

深海博明 慶応義塾大学経済学部教授

伏見康治 名古屋大学・大阪大学
名誉教授 日本学術会議会長

松根宗一 大同特殊鋼相談役
済団体連合会常任理事

村田 浩 日本原子力研究所顧問

小松左京部会

小松左京 作家

河合秀和 学習院大学法学部教授

中村隆英 東京大学教養学部教授

大来佐武部会

大来佐武 対外経済関係担当政府
代表 日本経済研究センター理事・顧問

江藤 淳 評論家
東京工業大学工学部教授

河合三良 国際開発センター理事長

北原秀雄 前駐仏大使 西武百貨店顧問

木田 宏 国立教育研究所所長

小林陽太郎 富士ゼロックス株式会社社長

篠原三代平 成蹊大学経済学部教授

滝田 実 アジア社会問題研究所
理事長

堤 清二 西武百貨店会長 西友
ストア1社長

中根千枝 東京大学東洋文化研究所
所長 国際人類学民族学会副会長

林雄二郎 未来工学研究所副理事

松山幸雄 朝日新聞論説委員

ロベール・J・パロン 上智大学経済学部教授

松本重治部会

松本重治 国際文化会館理事長

川喜田二郎 筑波大学教授

永井道雄 朝日新聞客員論説委員

中村 元 東方学院院长
東京大学名誉教授

本間長世 東京大学教養学部教授
前田陽一 国際文化会館専務理事
東京大学名誉教授
横 文彦 東京大学工学部教授

武者小路公秀 国連大学プログラム
担当学長

村上兵衛 日本文化研究所専務理事

柳瀬睦男 上智学院理事長

国際交流研究部会

遠山 一 ダーク・タックス 歌手

喜早 哲 ダーク・タックス 歌手

佐々木行 ダーク・タックス 歌手

高見沢宏 ダーク・タックス 歌手

石井好子 歌手

小林道夫 チェンパロ奏者

佐賀和光 建築家

佐々木信也 スポーツ・キャスター

千 宗室 裏千家家元

堤 清二 (大来佐武部会の欄
に同じ)

富田 勲 シンセサイザー作曲・
演奏家

服部克久 作編曲家

松原秀一 慶応義塾大学文学部教授

三村忠良 日本国有鉄道職員局労働課長

ミルトン・L・ラドミルビッチ
アメリカ公立アメリカ
ンスクールビジネス
メジャー

村上兵衛 (松本重治部会の欄に
同じ)

山城祥二 芸能山城組組頭 筑波
大学講師
吉川 光 NHK整理部担当部長

事務局

笠井章弘 政策科学研究所理事長

生田豊朗 (茅誠司部会の欄に同じ)

依田 直 東京電力企画室室長

山田 嗣 政策科学研究所主任研究員

斉藤洋美 (株)二十一世紀企画

比田井和子 (株)二十一世紀企画

村野京一 (株)二十一世紀企画

21世紀フォーラム会報
第七号

発行
一九八一年一月一日

発行人
笠井 章弘

発行所
21世紀フォーラム事務局

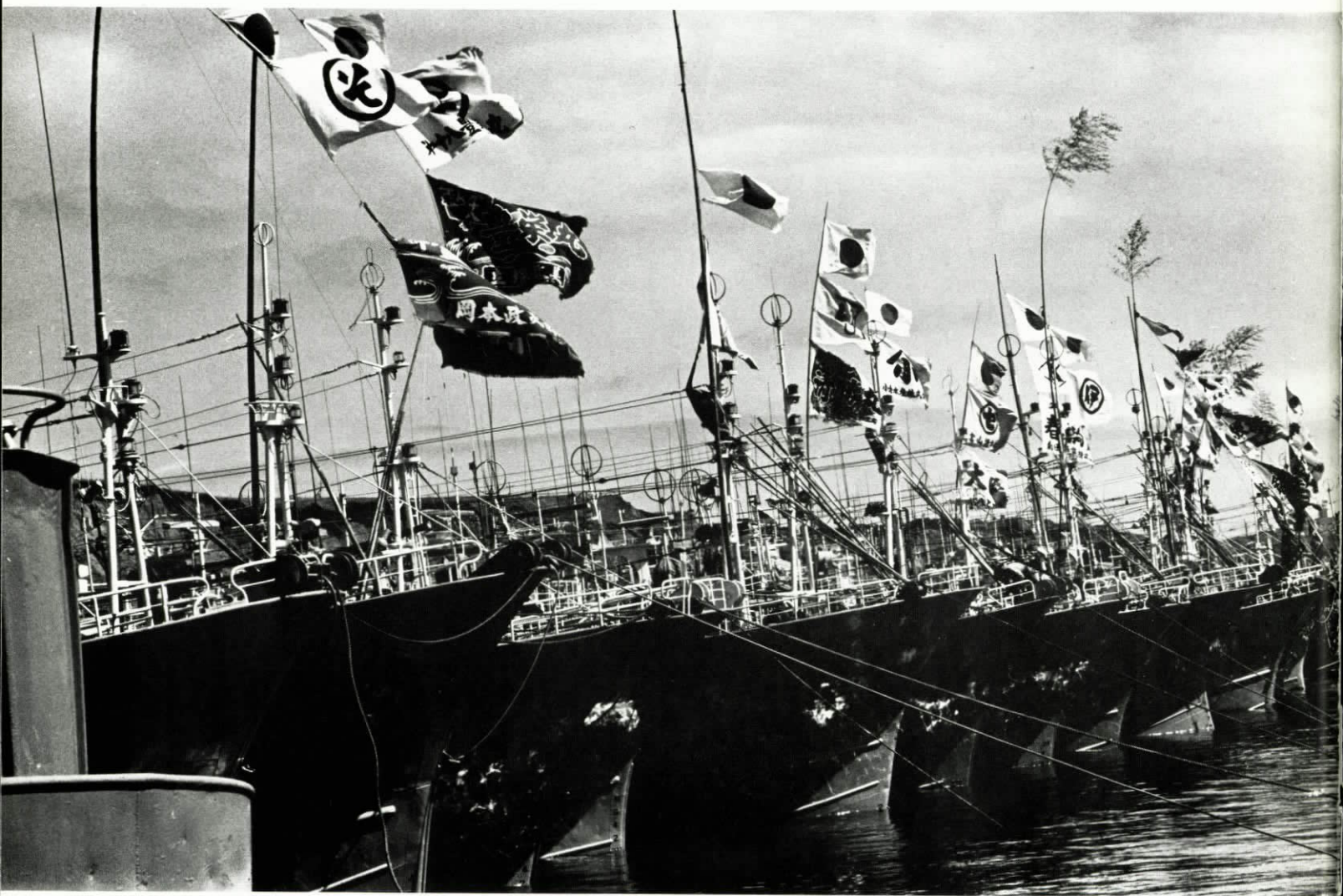
東京都千代田区水田町二の二
の二 秀和永田町TBR六〇一

(株)二十一世紀企画内
電話〇三五〇八二六二五

編集

21世紀フォーラム事務局

印刷
(株)東京印書館



A POINT OF VIEW

地球

深瀬昌久



〈表紙のことば〉 水井一正

バランス感覚が胎む緊張感を表現しました。自転車に似た乗りものの二つの大きな車輪は、大きさは同じですが、チューブの太さが違います。

人は力の比重の異なる二つの輪を操って、バランスを保持しながら進んでいきます。外交にも、バランス感覚が大切なのではないのでしょうか。私の〈白のレリーフ〉作品の一つです。